
いつも見ていた世界

板井虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつも見ていた世界

【Nコード】

N 6 3 1 2 M

【作者名】

板井虎

【あらすじ】

数年前から謎の発作を患う天野沙恵、20歳。普段は健康だけど、発作があるからという理由で自宅療養という名のニート生活中。友達と遊びに行く日に発作が起き、気がつけば森の中……。そこで発光している美人さんに出会っちゃたり、ファンタジーな事が起きれば……。誰でも気がつきますよねー。はい、異世界です。だけど私は勇者や巫女とかになるつもりは毛頭ありません、それは20歳以下の人がやれば良いと思います。なので私は穏やかな平凡生活を希望します！そんなやる気のない現実主義な主人公のシリアスで無

自覚ラブコメディな異世界トリップファンタジー。*第一章は恋愛要素は無い…です。

第一章 プロローグ：始まりはすでに始まっていた

「はぁ・・・」

思わず溜息が出る。

そりゃ牢獄の中いきいきしてる人なんていないよね。
動くと手足に着けられた重たい枷が鳴る。

これを見ると改めて自分が捕まってるんだなあって思う。
別に悪いことしてないのに。

冷えた牢獄の壁に凭れかかると、格子つきの窓から覗く月を見た。

満月じゃないけど綺麗な月だなぁ・・・。

私はいきいきしてないけど、鬱々もしてないのさ。

まぁ、なるようにしかならないよね。

お迎えが来るまでのんびりと待ちますか。

第一章 プロローグ：始まりはすでに始まっていた（後書き）

はじめまして板井虎です。

あまり頭が良くない文章ですが、楽しんでもらえれば幸いです^^
作者の行動と主人公のつぶやき（及びツツコミ）が多いので、基本的に話の進みが遅いと思いますが、長い目で付き合ってください。
さい。

第1話：今までの生活

4年前の4月、私は急に倒れて『発作』を起こしたらしい。私はその時の事を覚えてないから『らしい』としか言えないんだよね。覚えていることと言ったら、気がついたら頭がガンガン痛くてゲロゲロ言っちゃうくらい気持ち悪くなってたことしか覚えてない。

それから母親が急いで救急車呼んで病院に運ばれて、気持ち悪いのに色々検査された。この時、たらい回しにされてる患者さんの気持ちがつつこいよく分かった。いい加減にいろとか思うよね。うん。その検査が終わってようやく先生のお出ました。今も思うけど、あの時の先生には正直良い印象はもてなかったよ。

あまのさえ
「天野沙恵さんですね？」

「・・・はい」

「気分の方はいかがですか？」

「・・・」

・・・見てわかんないのかよ。この死んだ目を見たらわかるだろ。もうしんどくて言葉が出ないので文句は心の中にしまって黙って先生の話聞いた。

「検査の結果なんですが、特に異常なところは見当たらないんですよ」

「・・・」

その言葉に母親は不安そうに先生を見つめていた。

「・・・どういことですか？」

「症状自体はてんかん発作によく似ているので脳波を見てみたのですが、脳波は正常ですし、他の検査でも異常が見当たらず健康そのものなんですよ」

機械壊れてんじゃない？そう心の中で呟いていると、先生は元気付けるためか輝かしく見える笑顔で私たちを見た。

「今の段階では病名不明の病気なので、一ヶ月ほど検査入院して精密に調べてみましょうか」

…つまり私はモルモットな訳か。どうりで笑顔が輝かしいわけだよ。一瞬でも先生を信じかけた自分が馬鹿だった。

「・・・そうですね。もしそれで治療法が見つければいいですからね」

お母さん、私の意見は聞いてもらえないのかな？

「では入院の手続きをしますので、沙恵さんは先に病室に行ってください」

「それじゃあ天野さん行きましょうか」

私は看護師さんに車椅子を押されて診察室から強制退場させられた。

これから高校が始まるのに入学じゃなくて入院してどうするんだよ私。

「沙恵おめでとー！！！！」

「ありがとー！！！！」

ガシッ！！と友達の奈由^{なゆ}と熱い再会をした。

結局なんの異常もなく検査を終えて退院した私は、ようやく高校デビューを果たした。出迎えてくれたのは小学からの友達の奈由だ。昔から仲が良かったので、高校も一緒にしようよって事で同じ高校を受験してともに合格。だけど残念ながらクラスは別々だった。

「クラスが離れてるけど大丈夫？」

「多分大丈夫だよ」

「一人で淋しくない？」

「まあ仕方ないよ」

「一緒にクラスまで行こうか？」

「奈由のクラスと私のクラスは遠いからいいよ」

「一緒にクラスまで行くよ」

「なら聞くなよ」

そんな風にふざけて自分のクラスに行き、名残惜しそうな奈由とさよならをして教室に入るわけですが・・・もうグループとか出来ちゃってますよねー。

まあいつか。珍しそうにこっちを見ている生徒がいるが、私は大して気にせずに自分の席に着いた。私は元から淡泊なほうなので、一人で居るのが苦痛ではなかった。別に誰かと居るのが嫌いなわけじゃないけど、自分が無理してまで人に合わせようとは思わないんだよ。あとグループ派閥も好きじゃないし。正直めんどくさい。まあもしケンカする事になっても、口が悪いから負ける気はしないけどね。

学校生活が始まってからも発作は治まらず、高校と病院と半々くらいで過ごしていたと思う。

私の発作を見た人は気持ち悪がつて余計に友達はできなくなったが、全く友達がいらないわけでもないし、クラスが違っても奈由がいたからそんなに苦痛じゃなかった。一人でも私の事を理解してくれる人がいればいいんだ。

授業がなかなか受けられなかったけど、親が家庭教師を雇ってくれたおかげでそんなに勉強には困らなかった。そのおかげで無事高校を卒業して大学への進学も決まったが、友達も少なく青春という青春はほとんどせずに私の高校生活は幕を閉じた。

大学では自分のやりたい事を満喫してやろうと思い、髪を赤く染め、ピアスを開けた。親に5個は付け過ぎじゃない？なんて言われたけど、私は気にしなかった。だって付けたかったんだもん。

髪の色に関しては元からの強力な天然パーマもあって、奈由から『沙恵は色白いし外人さんみたいだね』って言われた。残念ながら純日本人だよ。

そして晴れ晴れとした大学入学の日、また発作が起こり私は病院に入院することになった。…どれだけ入学の邪魔すんだよ！！

またいつもの病院で会いたくない医者に会って、さあ困った困ったと話し合っていた。

「沙恵さん、発作が起きる前や起きている最中の事は本当に何も覚えていないんですか？」

「覚えていませんよ。何回同じ事を聞いているんですか？」

「うーん、何か前兆みたいなものがあると病気も特定できるかもしれないんですけどね」

「前兆…」

本当は少し心当たりがあった。ただと言うのが恥ずかしかった。信じてくれるか分からないし。だけど、この病気が治るかもしれないなら・・・とかなり悩んだが先生に話した。

「あの・・・」

「ん、どうしました？」

「最近発作が起きる前か最中か分からないんですけど、何か・・・夢みたいなものを見るんです」

「どういうこと？」

「なんだか、中世みたいな服を着た外国人達が国を攻められているから戦う様な・・・」

そう、実は2年くらい前から少しずつこんなものが見え始めていたのだ。だけど確信もないし、夢だからと思っていたから今まで話さなかったけど、徐々にその夢みたいなのがはっきりしてきた。外人の男の人達が何か懸命に守ろうとしている、そんな感じの夢を・・・。

その夢を見ていると、意識が引つ張られ、意識を保たなきゃ自分が居なくなってしまうような漠然とした不安が押し寄せて、私は負けまいといつも必死に意識を保っていた。

この事をこの医者にどう説明しようか考えていると、

「多分それ発作に関係ないですね」

スッパリ切りやがったこの野郎！！！！

恥を忍んで言っただけならこの返事！一生懸命考えた私が馬鹿みたいじゃないか！！

もう二度とこの事は誰にも話すまいと心に決めた。

退院した後も大学に行くのは危ないという事で、結局一度も通うこともなく大学を退学してしまった。どうやら私は青春とは縁がないらしい。

それから発作が起きても病院に行くこともなく、自宅療養という名のニート生活が始まって早一年。退屈で仕方ない日々を楽しく過ごすと思ったらすっかりオタクになってきた。いや、完全なオタクではないんだよ、中途半端にオタクだからね！

奈由は大学が休みの日は遊んでくれたし、他にも遊んでくれる人や家族で出かけたりしたから、何とか一人の世界になることはなかった。

だけど大学が2年目に入るとみんな忙しくなり、奈由もバイトも始まったので遊べない日が増えてきたけど、それでも奈由は休みができるかと私と遊んでくれた。

そして今日は久々に奈由とカラオケに行くのさ！ストレス解消は叫ぶのが一番だと思う。

私は昨日から楽しみで仕方なくて、明日持っていくバッグの中や服を何回も確認したり、興奮してなかなか寝付けなかったりした。翌日には予定時間の1時間前から準備完了して、早く奈由が来ないかなあとそわそわして待っていた。

小学生か！！と思うけど、楽しみだから仕方がない。

子どもたちよ、今まで馬鹿にしてすまなかった。

ようやく出発の10分前くらいになったので、私は玄関でミュー

ルを履いてしばらく待っていると家のチャイムがなった。よし！！！！

「沙恵、来たよー！」

「今行くー！」

ルンルンと立ち上がりドアを開けようとした時、私は発作が起こし、ドアに頭をぶつけて倒れた。

「沙恵？！」

倒れた私を見て奈由が駆け付けてきたみたいだった。だけど私の耳には奈由の声はだんだん聞こえなくなり、中世みたいな格好をした外人達が見え始めた。

やっぱり何かを叫びながら話している。

『・・・ま・・・で・・・い・・・！！！！』

・・・うつさいよアンタ・・・なにシャウトしてんだよ。

シャウトしたいのはこっち・・・だっつーの・・・これ・・・からな・・・

・ゆ・・・と・・・

私は最後まで負けまいと抗ったが、残念ながら意識はそこで途切れてしまった。

第2話：未知との遭遇／嫌な予感ほど当たるもの／

「・・・ん・・・」

いったあー・・・あたまた超ガンガンする・・・

これは絶対あたまた打ったなあ・・・なんか右側いたいし・・・
てかうっ！！・・・きもちわるい・・・吐き・・・そう・・・

私は酷い頭痛と吐き気にうなされながらなんとか動き始めて目を開くと、周りは真っ暗だった。なんで暗いの・・・？・・・それより早くせんめんじょ・・・

それよりも問題はこの吐き気だ。頭痛も酷いがこのまま玄関で吐く訳にもいかない。

私は地面に這いずり、渾身の力を振り絞って生まれたての小鹿のように立つと、壁に手を支えに歩き始めたが、壁はやたらゴツゴツとしていた。・・・こんなに手触りわるかったっけ・・・？・・・うっ・・・！そろそろマジやばい・・・

息も荒く、頭を抱えてふらふらしながらもなんとか洗面所に向かうとしたが、周りが暗くて洗面所どころか足元もよく分からなかった。誰だよ明かり消したの・・・！！みんな・・・出かけっちゃったわけ・・・？

壁にもたれて周りを見ると、ぼやけて周りが真っ暗にしか見えなかったが、遠くが白く光っていた。あ・・・あれせんめんじょの蛍光灯じゃん・・・あそこだ・・・

私はふらつき今にもこけそうだったが、なんとか歩き始めた。ゆっくり歩いているけど、思ったより早くに着きそうだ。だけど歩いている速さと近づく速さを考えると明らかにおかしかったことに、その時の私は気がつかなかった。

ようやく着いた・・・と思ったら、それは人の形をしたものだった。憔悴しきった顔で上を見上げると、白く光っている人と目が合い、じっと見つめてきた。

『大丈夫?』

不思議そうにその人が尋ねてきたけど、私はもう限界だった。

「うっ・・・!!・・・ぐふぁあっ・・・!!!!」

初対面の人の前で・・・・・・・・リバースしちゃいました。

私は初対面の人の前で盛大にリバースしていると、白い人は私の横に来て背中をさすってくれました。本当に申し訳ないです…。

しばらくゲーゲー吐いて、腹の中の物を全部出し終わると、白い人は私の顔を覗き込んでまた同じ質問をした。

『大丈夫?』

いや・・・だいじょうぶ・・・じゃない・・・です・・・

ぜえぜえはあはあ言いながら私は白い人を見た。頭痛も酷くなり意識が朦朧としてきたので白い人がぼやけて見える。

『そつか、じゃあ少し休みなよ』

では・・・お言葉に甘えます・・・。

私はなけなしの理性で自分の嘔吐物の反対側に転がるように倒れると、意識を手放した。

「う・・・ん・・・」

私は意識が戻り目を開けると、やはり周りは暗かったが先程よりかは暗くなかった。…何で？

まだガンガンする頭を抑えながらけだるい身体をのろのろ起こすと、左側が明るいことに気付いた。左を向くと…さっきの白い人がいました。

「あ、」

暗い森、広がる自然、目の前には湖、そして白い人・・・。

このおかしい状況に私は痛い頭を抱えた。何で私はこんな大自然に囲まれてんの？しかもこの人発光してるし。まあおかげで周りが見えるから役に立つけど、普通光らないでしょ！？

もしかして妖精さん？妖精さん・アハアハアツハハゝはあ、嫌な予感がする。

そんな失礼な事を考えながら現実逃避していると、白い人は私の顔を覗き込んできた。

『大丈夫？』

「あ、はい。さっきよりかは・大丈夫です・・・」

『まだ大丈夫じゃないの？』

「えっと・まだ頭痛がひどいですし、少し気持ち悪いので・・・」

『そつか、じゃあ少し休みなよ』

「はい・・・」

優しいなあー・・・で、この人さっきも同じこと言ってなかったっけ？ん？さつき・・・あっ！！！！

私は頭が痛いのも忘れて顔を見上げた。

「つつ！！！！」

『？』

やっぱり痛い・・・けどそんな事言ってる場合じゃない！！！！

「あの、先程は本当に申し訳ありませんでした！初対面にも関わらず盛大にリバ・嘔吐してしまつて不愉快な思いをされたかと存じますがどうぞお許しください！！！！」

『どうして謝るの？』

頭を下げた私の上から気の抜けるような純粹な声が聞こえた。

「え、だからさっきの・・・」
『気にしてない』

・・・なんて懐の深いお方だああ！！！！

私は白い御方（もう人なんて呼べない！！）に感動していた。初対面なのに目の前でリバーズしてあまつ意識が戻るまで一緒に居てくれる面倒見のいい人には初めて出会ったよ！！！！

「ありがとうございますっ・・・！！」
『うん』

私が顔を上げて白い御方を見ると、白い御方は（なんかよく分かんないって感じが出るけど）無邪気に微笑んでいた。：なにこの人、なんて素晴らしく美しいのにこんな可愛らしい笑顔をするの！！！！

今までちゃんと白い御方を見てなかったから気付かなかったけど、白い御方はかなりの美人さんだった。

肌は陶器のように白くすべすべ。もちろんニキビやシミ、そばかす、ホクロなんて皆無だ。パツチリとした大きな目にはトパーズが埋め込んであるのか！！と思うほど綺麗で透き通っている。絹のようにつやつやでサラサラした真っ白な髪は、超ロングだけどストリートですごく綺麗。私は天パがひどいから余計に羨ましいのさ！！顔は中性的な感じで、美人で麗しく、可愛らしさも備えているなんて素敵過ぎる！！！！

テレビでも見たこと無いよこの美しさ！！！！ていうかこの御方自身発光しちゃってるけど、もうそれすらこの御方の美しさを際立たせているから気にしない！

服も真っ白でゆとりのある布がヒラヒラしてるのに、あまり露出

してないのがこの御方の神々しさを演出してるよ。

私は体を動かしたりしなかったが、白い御方の美しさで脳内暴走寸前だった。そして白い御方の無邪気なニコって笑顔にノックアウトされた。

もうダメ・・・これからは畏れ多くてご尊顔を拝見できません・・・恋する乙女の如く下を向いてもじもと恥らっていたが、ハツと思い出した。

そういえばゲロはどこだ？てか私臭くないかな？

まだ頭痛が酷くて動くのも億劫だったが、臭いが気になるので白い御方からちよつと離れると、不思議そうな顔をされた。

『どうしたの？』

「いや、私は先程貴方様の前で盛大に嘔吐してしまったので、臭いかなと思い、あなた様にこれ以上不快な思いをされないように距離を・・・」

『さっきのやつはもう無い』

「え？」

『さっきの所は寝にくいと思ったから、こっちに移動した』

「移動って・・・えっ?!?!」

さっきは木々の中、今は湖畔の芝生の上。そうだよ、ここはどこ？

あー、嫌な予感がどんどん確信に近づいてきている気がする・・・

『口の汚れもないでしょ？』

「あ・・・ホントだ」

『だから臭くないよ』

そういつと白い御方は優しく微笑んで私の隣に座りなめました。
・・・なんて優しくて美しい御方なんだああ！！！！

初対面なのに目の前でリバスしてあまつ意識が戻るまで一緒に居てくれてさらにゲロの処理までしてくれる面倒見のいい美しい御方には初めて出会いましたよ！！！！

私は再び感動に浸っていた…が、流されて忘れかけていたけど

「・・・ここはどこですか？」

私は下を向きながら白い御方に尋ねた。白い御方のお顔は見ちゃダメ。私が白い御方のご尊顔を拝見するのはおこがましいよ。

『ここは、【神聖樹海^{しんせいじゅかい}】と呼ばれている場所』

「しんせいじゅかい？」

『うん』

…どこだそれ？

『だから神聖樹海だよ』

「あ、はい・・・」

神聖樹海って何？どこ？それっておいしいの？なんで家じゃないのさ。そうだよまずそこからだよ。

私は奈由と遊びに行こうとしていた、うん。それで奈由が迎えに来てくれたから出かけようとしたら発作が起きて、気が付いたら森の中。そして白く発光する神々しい御方との遭遇。

「……………」

・・・オワタ。もうこれは、あれしかないよね？

『何が終わったの？』

「ああ・・・なんかもう色々あり過ぎて私の理解の範疇を超えた現象が起こり、もう夢なんじゃないのかっていつか夢であって欲しいという感じになっておりまして・・・」

『夢じゃないよ』

「え？」

私はもうご尊顔を拝見できないとか言ってたくせに、思わず白い御方のご尊顔を拝見してしまった。

『ここにいますよ』

「だけど・・・」

『夢なら寝て、起きたら醒めるよね？』

・・・そうだよ夢オチ！それがあつたじゃないか、ナイス白い御方！！

もうそれに賭けるしかない！！！！

『じゃあ少しお休みしよ？』

「・・・はい」

正直もうこれ以上頭が働かなかった。今まではなんとか我慢していたけど、頭痛も激しくなりもう何も考えなくなかった。

私は頭を抱え、白い御方の顔を見ないようになり、私の顔が見えないように横になって目を閉じた。するとふわりと暖かい温もりが頭を

撫でた。

『おやすみ』

優しい声に思わず目頭が熱くなった。

第3話：これが現実、そして真実

「・・・ん・・・」

白い光りが瞼を照らし始めたので、眩しく感じた私は瞼を開くと・

・

『おはよう』

・・・目の前に微笑んでいらつしやる白い御方のご尊顔がああ
！！！！

私は叫びたい衝動を抑えてすぐに右手で口を押さえて左手で顔を隠した。やばい朝から悩殺されかけた。

だって美しいお姿が朝日に照らされてキラキラ輝いているんですものー！！朝日のキラキラもあるけど、白い御方自身のキラキラがもう少女マンガのエフェクトなんかじゃ足りないくらいに輝いているんですものおお！！！！

『ねえ』

「はいっ！」

『手、どけて』

「！！いや、そんな私が貴方様のご尊顔を拝見だなんて・・・！！！！」

『ねえ、見て？』

「・・・!!!!」

そんな風におねだりされて断れる人間なんかいるのだろうか？

そんな人がいるなら会ってみたい。殴ってやるのに。

私は恐る恐るといった感じで手をどけ、ゆっくり目を開けると白い御方は私を見つめていた。多分私は顔を真っ赤にしてゆでダコ状態だったと思う。

『夢、醒めた？』

「・・・・・・」

そうだ、夢だと思っていた。

家に居たはずだったのによく分からない森の中にいて、白い御方に会ったことも、あまりにも奇妙で現実味に欠けているから、全て夢の中だと思っていた。いや、思っていたかった。

だけど結局寝ても醒めても何も変わらなかった。

これが現実、それなら受け止めるしかない。例えそれが、私の予想通りの場所だったとしても。

『醒めた？』

白い御方は首を傾げて尋ねてきた。その愛らしい仕草に私の緊張も解れる。

「・・・いいえ」

『目、覚めた？』

「はい・・・すごく、よく、覚めました」

微笑んで白い御方の目を見つめ返した。私、ちゃんと笑えてたかなあ？

だけど頭は妙にすっきりしていた。

『じゃあ、起きようか』

「・・・はい」

差し伸べられた白い御方の手をとって、私は起きた。起き上がったあためて周りを見回すと、そこは大自然に囲まれていて美しかった。

青々と茂った植物、そこから顔を出す可愛らしい花々、朝日に照らされて輝く湖、遠くまで見える沢山の青く生い茂った木々たち。

日本では見られない光景・・・そう、まるで外国にいるような気分だ。ぼーっとその景色を眺めていると、白い御方に顔を覗きこまれた。

『何を見ているの？』

「へ?!・・・ああ、周りの景色を眺めているんですよ」

私は苦笑しながら白い御方に答えると、視線を逸らした。それでも白い御方は私の正面に来て視線を合わせると、私の目を見つめてきた。

『何処を見ているの?』

「・・・」

じーっと覗き込んで見つめてくる白い御方の質問に戸惑った。
覗き込んでくるご尊顔を直視するのに困ってるのもあるけど、見つめてくるトパーズのような透き通った瞳には、何もかも見透かされているような気がして……。

『遠くを見ているの?』

見つめてくる綺麗な瞳には、私の情けない顔が映っていた。
そんな私を純粹に見つめてくれる白い御方には、何一つ嘘をつけないと思った。

「はい……すごく、遠いところです」

『何かあるの?』

「もう何も……ありません」

白い御方がぼやけて見える。口にすることで、これが事実だという事を改めて実感した。

ちゃんと受け止めてるよ、これが現実だって。分かっているから余計に辛いんだよ。もう家族にも、奈由にも会えない。やりたい事は何も出来ない。欲しい物も二度と手に入らない。

今まで大切にしていたものの全てを失ってしまった。そんな私は一体何を持っているんだろう?

もう、何も無い。

こんな顔を見られまいと、私は俯いて齒を食いしばって涙を堪えた。すると白い御方は私の頬に手を伸ばして顔を上に向かせたので、私は驚いて目を見張った。

『悲しいの?』

「・・・はい」

『苦しいの?』

「・・・はい」

『ならどうして泣くのを我慢するの?』

「こんな情けない顔を、貴方様に見せられないからです・・・」

『気にしない』

「・・・」

『泣きなよ』

「・・・っ!」

その言葉を聞くと、堰を切ったように涙が溢れてぼろぼろ落ちていった。

私は子どものように泣き叫び、目の前にいる白い御方に縋り付いた。白い御方は嫌な顔を一つせず、子どもをあやす様に私を優しく包み込んでくれた。

その温もりに、私は余計に泣けてきた。

「ぐずっ・・・」

あー泣いた泣いた。こんなに泣いたのなんていつ振りだ?もしかしたら初めてかもしれない。

ここは異世界で、自分の世界に戻れない思うことがこんなに辛いとは思わなかった。

だけど、泣いているだけでは何も変わらない。これから自分で

どう生きていくか考えなくちゃ…。

思いつきり泣いて落ち着いてくると、自分が非常に失礼で恥ずかしいことをした事に気がついた。

白い御方に抱きついた拳句、涙も鼻汁も唾液も垂らして泣き叫んでいました。

・・・うあああああああ！！！！

『ん？』

私は白い御方の胸を押して急いで離れた。とりあえず謝るしかない！！

「申し訳ありませんでした！！！！泣いて縋り付いた拳句、貴方様のお召し物まで汚してしまつて…！！」

目をキョロキョロさせて青い顔をしてガクガクしている私は、明らかに挙動不審者だったと思う。だけどやっぱり白い御方はどこまでも懐が広かった。

『気にしてない』

ああ・・・もうこの笑顔には何も言えません・・・。一人で至福のときを堪能していると、自分の手に違和感を感じた。

「・・・ん？」

もう一度確認するために失礼ながらも白い御方の胸を触らせて頂いた。

『どうしたの？』

「・・・・・・ない」

『何が？』

「胸が・・・無い」

『そうだね』

と、いう事は・・・

「貴方様は男の人・・・だったん・・・デス・・・力？」

驚きのあまり思わずカタコトになってしまった。白い御方は優しい微笑みを浮かべていた。

『君が思っているとおりだよ』

・・・なーんてこつたあーいつ！！！！

私は急いでその場から離れると、混乱する頭を抱えて考え始めた。

今まで女の人だと思ったからゲロ吐いたり泣き叫んだり抱きついたりしてたけど、男の人なら話が違ふよ！！いやゲロ吐いて迷惑かけるのは男女ともにいけないと思うけどさ、会って間もない男の人に泣き縋るのはさすがにいけないだろ。

確かに身長は高かったけど、外人さんならそれくらいあるかなあとか思っただし、友達の優花ちゃんも私・・・お金が溜まったら胸大

きくするヨ…』とか言つて本気で豊胸手術を考えるくらい胸が平ら…密やかだったから、白い御方もパリコレに出られるような体型だから無いのかなあって思つてたんだけど・・・男性だった。あの美人顔で男性つて反則じゃないか！

『そうなの？』

「うわあっ?!!!」

気がついたら白い御方は私の真ん前にしゃがみこんでいた。不思議そうな顔で私を見つめてくる白い御方に・・・もう理性が耐えられなかった。

「…男だろうがなんだろうが私は貴方が大好きです!!」

だって私の恩人の白い御方には変わらない。性別なんて関係ないのさ！

突然の告白に白い御方が少しビクリしたみたいだけど、嬉しそうに笑ってくれたから良し!!!!

あ、ちなみにこれは純粹な『好き』だから誤解しないでね。さすがに恋愛なんて無理です。色んな意味でね…。

第4話：名前を知る前に個人情報が出回っていました

とりあえず落ち着いたところで、お互い何も知らないままなので、その場に座ると自己紹介をする事にした。

「まず、色々ご迷惑を掛けてすみませんでした。だけど貴方様のおかげでとても助かりました。本当に有り難うございます」

最初に私は土下座をして謝った。これがジャパニーズスタイルですよ。

『うん？』

やっぱりよく分かってないけど返事をしてくれる白い御方…だが良い！！

「私は天野沙恵と申します」

私は頭を上げると自己紹介をした。うん、眩しいけどやっぱりちゃんと顔を見せないと失礼だからね。

自分で言うのも難だけど、結構礼儀は弁えている方だと思う。

じゃあ何で今まで自己紹介してなかったんだよ…っていうことになるけど、まあ…全部出来ているかって言われると『うん』とは言えないのさ。だけど自分がされて嫌な事はあんまりしないようにしてる。

『アマノサエ？』

「はい、名前が沙恵で名字が天野です」

『沙恵？』

「そうです」

『沙恵』

「・・・！」

嬉しそうに笑う白い御方はもう天使っていうか女神かつ！てくらい美しくて可愛い。

なんか『萌え〜』って感じの中にズキューーン！！って感じがするんだよ！もうこの笑顔見たら、どんなに機嫌悪くても一気に幸せになれるわ。とろける。

『沙恵？』

「あっ！」

おっといかんいかん、自分の世界に飛んでくところだった。

「あの、貴方様のお名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

照れている時はどうしても上目遣いになってしまふ。上目遣いが有効なのは可愛い子限定なのは知ってる。私がしたらただのガン飛ばしにしかなくてないだろうけどさ、直視できないし。

『名前は無い』

「えっ」

どういつことだ？白い御方は全く気にせずに寛いでらっしゃる。

「では何と呼ばれているのですか？」

『色々』

「色々って・・・例えばどんなのがあるんですか？」

『ジース、ルルバド、ディノー、グダ、アンロ、バシュ、ビューヌ、ラフープ、シーリースー、ティーヴァスラー』もう結構です」

『そう？』

「はい・・・」

『分かった』

「・・・」

きつと名前が無くて色んな人に名前を付けられたんだろう。確か
とあるマンガにも存在の珍しさから様々な所に売り飛ばされて、そ
の時々にな名前を付けられていた子がいたな…。きつと白い御方もお
美しいから…。

私は哀れむ様に白い御方を見てしまった。だけど白い御方はただ
不思議そうに首を傾げている。

ああ・・・可愛い。

「私は何とお呼びすればよろしいでしょうか？」

『何でも良い』

「え」

『名前、呼んで？』

…そんな風に微笑まれたら名付けるしかないじゃないですか！
うーん、何て呼ぼう…。なんかもう天使とか神の名が良いんじゃないか？

いや、けどこの御方はそんな神々より神々しく美しい御方だから
一緒の名前なんかダメだ。

悶々と悩んでいると、白い御方が覗き込んできた。

その上目遣いは理性崩壊させる凶器ですか？

『呼んで?』
「……………」

透き通るような瞳が私を見つめる。私は目を閉じて、この御方の事を考え始めた。

白い御方と初めて出会ったとき、私はこの御方の事を洗面所の蛍光灯だと思った。

だって光っていたから。

私が目覚めた時、この御方は朝日に照らされて美しかった。だって輝いていたから。

私が泣き叫んでいる時、この御方の温もりに余計泣けた。だって温かったから。

この御方は…

「……レイ」
『?』

「貴方様の名前は【レイ】です」

『レイ?』

「はい」

私は首を傾げる白い御方に名前の由来を説明をした。やっぱり名前って大切だしね。

「私の世界の言葉に英語と言語があり、英語には【ray】という単語があります。」

意味は希望の光り、輝き、放射線や熱線という意味です。

私にとって貴方様は希望の光りであり、眩しく輝き、温かく包み込んで下さる存在です。

だから【レイ】です」

『・・・・・・』

「ちなみに中国という国の漢字という文字の【麗^{れい}】という文字にもかけています。

このレイは『麗^{うるわ}しい』って意味です。ぴったりですよね！」

笑顔で白い御方（まだ決まっていなかったので呼べない）の方を見ると、小さく口を開きぽかーんって顔をされた。・・・・やべえ。ちょっとクサかったか？

「・・あの、気に入りませんでしたか？」

心配になった私はおずおずと白い御方の顔を見つめた。

『・・・・レイ、好き』

「へ？」

『この名前、好き』

「ホントですか!？」

やつほい！気に入ってもらえたよ！！

『沙恵ありがとう』

「・・・・っ！！！！」

満面の笑顔キターーーーー！！！！しかもこの台詞！！！！恋愛感情無くてもこんな御方の好意を頂けるなんて！！！！もう一生分の

幸せ貰った気がする。そろそろ幸せすぎて死ぬんじゃない？

「いやいやそんなお礼を言うのはむしろこちらで……。ではその、これからもよろしくお願いします」

『うん』

私は照れつつニヤけながらレイ様と握手を交わした。

はい、お名前が分かったのでこれからの生活のためにもレイ様にこの世界の説明をしてもらおう。カモン私の平穏生活。

「レイ様、ここのを『レイ』」

「へ？」

『私の名前はレイ』

少しむくれた様に私を見るレイ様。本人は睨んでいるつもりなんだろうけど、私にとっては萌えでしかない。ニヤけそうな顔を何とか押さえた。

「ええ・・・そうですね。だからレイさ『レ・イ』」

余計むくれた。やばい可愛い・・・ほっぺ触りたい。

『【サマ】はいらない。レイが良い』

「え、けど貴方様にそのような事は…」

『その喋り方も嫌い』

ええー！？じゃあどうしろと？！喋るなってことか！！？

『喋るなどは言っていない。その喋り方が嫌い』

「ではどうしろと……」

『いつも心の中で思っているような喋り方が良い』

「そうですか……」

……ん？今おかしい事聞こえなかったか？

『おかしい事は言っていない』

ですよー……って、

「それがおかしいじゃないですか！」

『どうして？』

「普通心の声とか聞こえませんよ……！」

『私は聞こえる』

「何で?!」

『何でだろう?』

不思議そうに首を傾げるレイさ『レイ!』……レイは最高に可愛いけど、もっと早く気がつけよ自分。そう、確かにレイの声は普通に聞こえるけど、頭にダイレクトに聞こえる声でもある。

今まで声に出してないのに会話が続いていたのはレイが私の心の声を聞いていたからで……。まじファンタジーだな。さすが異世界、何でもアリだ。

……ちよつと待てじゃあ今までずっと私が興奮しまくってた声も……

『うん、聞こえていた』

「……オワタ。私はずっと「サトラレ」状態だったんだね。けどまあ・仕方ないか。ここは異世界、私の常識は一切通用しない。これからは何でも受け入れていかなきゃね。」

「大丈夫？」

「ええ、とりあえず大丈夫です」
「そっか」

落ちてついた私にレイは私の頭をポンポンと優しく叩いた。
「ホント可愛いなお前。」

第5話：教えて 先生、痛くしないで……

なんかもう心の声聞こえるんなら、気い使う必要ないよね。さあ、
レッツ質問タイム！

「心の声はこの世界に暮らしている人達も聴こえるの？」
『聴こえない』

「うーん、レイは特殊な存在って事でいいのかな？」
『そうなの？』

「いや、聞きたいのはこっちなんだけどね……」

レイはうーん、と首を傾げて可愛らしく考えているけど、多分の
答えは出ないんだろうな……。

さすがに麗しくて発光している人はいないだろ。そんな人ばかり
だったら困る。サングラスくれ。遠い目をして私は次の質問を尋
ねた。

「じゃあ、ここはどこ？」

『ここは神聖樹海「だったね、うん……」

レイの言葉は端的だから、分かりやすく完結に聞いた方がいいの
かな？

「ねえレイ、この世界は何て呼ばれているの？」

『【グランイース】』

「グランイース……」

『うん』

グランイースって言うのはきっと地球みたいなものだよね。地球は惑星だけど、私達の世界とも言えるし。

「グランイースはどんなところ？」

『「ヒューマニア」と「シャネウイグ」という大陸が分かれていて、ヒューマニアには人間が、シャネウイグには魔人が住んでいる』

「魔人？」

魔人ってアラ・ンのジ・ニーみたいなのが、それともドラゴン・ールのブ・みたいやつか？

それはそれで困るような…。

『魔人は魔法を扱い、人間より寿命が長い。人間は魔法を使えず短命だけど、文明が魔人より発達している』

「なるほど・・・」

人間は私たちの世界の人間と変わりはないね。魔人達は魔法があるからそのままでも生活に困る事はないだろうけど、人間はそれが無いから他のエネルギーを使う必要がある。自分達の力で生活を向上させようと思えば、自然と文明は発達する。

それにしても、こっちはどの程度科学が発展してるのか気になるなあ。もしこっちの方が発展してたらきっと近未来に来た気分になれるよ。

攻・機動隊みたいなやつ希望。少佐に会いたい。あーけどア・ムや・ラえもんも捨てがたいかも。

『少佐って誰？ア・ムと・ラえもんって何？』

「ああ、関係ないから気にしないで。あと私たちが今いる大陸はど

「うち？」

『シャネウイグ』

「そっか・・・」

魔人さんの大陸でしたか・・・まあシャネウイグでも物語の世界に來た気分になれるよね。ファンタジーだよファンタジー。貴重な体験をしていると思う。

それならそうだな…テ・ルズ系希望かなー。F・系でも良いけどね。

ふむ、今シャネウイグに居るんなら、シャネウイグの事を重点的に教えてもらった方が良いよね。ヒューマニアの事は生活に慣れてから自分で調べれば良いし。

「じゃあレイ、シャネウイグの事詳しく教えてくれる？」

『うん』

レイの優しい微笑みが頼もしく見えた。

さて、レイから聞いたシャネウイグの事を簡単にまとめるとこんな感じか。

？シャネウイグには5つの国があり、オラリオスを中心にランリ
ング、マシュリツカ、ファターム、タリミューラという国が周りを
囲んでいるらしい。一番強国はオラリオスで、オラリオスを中心
にした政治展開がされているらしい。

？私達の居る神聖樹海はオラリオスにあるけど、オラリオスの首都から離れたかなり田舎にあるらしい。

？オラリオスにも人間は住んでいるけど極少数。人間と魔人の間には人種差別があるが、最近は軟化しているらしい。

？異世界から人が来たのは私が初めてらしい。

「はぁ……」

私はため息をついて頂垂れた。だって…ねえ？ 問題は？だよ？私が異世界から来たなんてばれたら、絶対平穩生活が遠のいていく…。

異世界トリップかぁ…。いつもネットで読んでましたよ。ええもう大好物でしたよ！！

『そうなの？』

なんか異世界にいきなり召喚されて勇者になって世界を救ったり、巫女になって崇められたり、突然王子様の部屋とかに出てきて、恋愛感情が芽生えて結婚しちゃったり、良い女や良い男に囲まれて『えーっ』みたいになったり……。そういうのが定番だよね。

『そうなの？』

だけど自分がトリップするのはお断りだ！！

世界を救う勇者や巫女なんて10代がやれば良い。おばさんが世界を救う話って…ちよつと読みたいかも。けど私はしないよ！！

この世界で恋愛するつもりもないからね。良い女や良い男がいても、私は遠くから見て「目福だなあ〜」程度でいいのさ。つまり「余計な事に巻き込むな」、です。

『そうなの？』

あ、けど一般庶民な平凡な主人公が過酷な状況の中で強く成長して自分の世界に帰るとかそういうタイプのもあったか。私はそっちだったのね・・・って、じゃあ私帰れるじゃん！

けど普通トリップしていきなり出会った人の前でリバーズするなんて醜態は見せないよね。もう少しマシなトリップをさせてくれ神様…。

『そうなの？』

「……………そうなの」

『そうなんだ』

「うん…」

さっきから横で『そうなの？』コールをしてたレイを見た。

全くけしからんくらい無邪気で美しく可愛らしいな！！身体大きいのにその可愛さが出せるなんて神か！！ん、神？・・・神！！！！

私はレイの両肩をガシツと掴むと、大声で聞いた。

「ねえレイ！！」

『何？』

「貴方は神ですか？！」

『・・・かみ？』

「そう神！」

『……………？』

眉毛を寄せて一生懸命考えている様子は大変可愛らしく、頬が擦り切れるまで頬ずりしたい。

「だけど今は私の死活問題がかかっているんだ！さあ答えるんだレイ！！」

『分からない』

「え？何で？」

『神って何？』

「神ってなんか世界作っちゃうような人・・・じゃないかな？」

『じゃあ神じゃない』

「うーん・・・じゃあ偉大な魔法使いか何か？」

『ううん』

「そうか・・・」

「おーい誰か助けてくれ・・・」

私はもうアホみたいに遠くを見るしかなかった。

レイは相変わらず不思議そうに私を見ている。

『どうして？』

「んー、私のいる世界では異世界に行つてその世界を救つたり、おいしいめに会う物語があるんだよー。それで異世界に行く時は大抵神様や魔法使いさんや神官さんが呼び出しちゃうんだよー。あー、あとドアを開けたり交通事故にあつたりトンネルを抜けて知らない世界に行くこともあるんだよー」

『そうなんだー？』

私の投げやりな言葉遣いを真似して語尾を伸ばすのが超可愛い。

小さい子みたい。

「・・・ってそうか！」

『？』

そうだよ私、病気持ちるよ！それで発作が起きちゃって『目が醒めたら森の中でした』だ。

そこら辺トリップ要素じゃないか！！！！

てことは、意図的に召喚されてないから勇者や巫女とかになって世界を救うという危険な事をする可能性は低い！よし！！

『良かったね？』

よく分かってないんだけどレイはお祝いしてくれた。ありがとうレイ。

…あ。だけど異世界から来たことがばれたら、結局何か特殊な状況に置かれる可能性がないとは言えないか。

結果、私は異世界から来たという事がばれてはいけない。以上！
さあ前向きに生活場所を確保するぞー！

「この森の近くに村ってあるの？」

『西に小さい村がある』

お、あるんだ！行きたい！！そして暮らしたい！！

「それって歩いてどれくらいかかる？」

『頑張れば4日』

「…頑張んなかったら？」

『一週間くらい』
「・・・・・・・・」

近くねえじゃねえか。しかも頑張って4日ってどんだけ頑張ってるんだよ。4日と一週間ってだいぶ差があるぞ。

『だけどそこが一番近い』
「わかったよ…」

そこが一番近いってことはこの森はだいぶ広いのかな…。まあここに人は住んでなさそうだね、動物とかそういうのは居るみたいだけ。

『森自体は大きいけど、神聖樹海は小さい』

「え、そうなの？」

『うん。それにここは森の最深部だから、人は入って来られない』

「え、何で？」

『辿り着く前に魔獣に殺される』

「・・・・・・・・」

だいぶ物騒だなおい。私は生きて村に辿り着く事は出来るのか？ん？だけど…

「じゃあなんでレイはここに居るの？」
『何でだろう？』

軽く首を捻るレイは真剣に考えてるけど……答えは出なさそうだね。

「まあ、やっぱりレイは特殊なんだね」

『そうなの？』

「多分ね」

まあそれが異世界トリップファンタジーだもんな。多分レイはこの世界の特別な存在なんだと思うよ。だけど今の私には関係ない。平穩に暮らせればいいんだ。それでふとした拍子に自分の世界に帰ることが出来れば万々歳だ。

「けどレイがここに居てくれて良かった」

『？』

「だって誰も居ない森の中に落ちてきたら、私は完全に野たれ死んでたよ」

『・・・・・・』

いくら私がすぐに異世界と認識してもすぐに何か出来る訳ではないし、現実主義な私は絶望していたかもしれない。だから…

「ありがとね」

レイにマジで感謝！だね！と、レイの方を見たら軽く目を見張って驚いていた。

美人だと何しても絵になるなー、と私が首を傾げると、レイの顔がだんだん笑顔になってきた。

ううゝゝ私はこの笑顔に弱いんだよ。微笑みの貴公子か！いや、微笑みの神だな。って、うおっ！！なんか急に近づいてきたと思ったら、思いつきりハグされた！…が、私は正座で尚且つひ弱なんでそのまま思いつきり後ろに押し倒れた。

「・・・痛いよレイー」

これじゃあせっかくのときめき要素が台無しだよー？

こういうときはカッコイイ男性キャラがヒロインを抱き寄せて、

『キャッ』とかなんか言ったりしてヒロインは頬を染めながらも男性に抱きつき返すみたい。間違っても『うおっ！！！！』なんて言わない、思わない。

けどそういうのを考えるとヒロインもなかなか悪だよ。恥ずかしいと思いつつもちゃっかり抱きしめて、『彼って意外とたくましい身体してたのね』とか思ってた男性キャラの身体を堪能するんだよ。

仮にこれがヒロインを押し倒した図だったとしても、

『ごっごめん！』

『う、ううんいいの』

…って言いながらピンクのほわんほわんした雰囲気になるか、

『ね、ねえ！ちよつと退いてよ！！』

『。。。俺・・・』

…みたいな感じのどピンクで、15歳未満の方はお断りか、それ以上の展開になるのは必須だろう。まあそんな状況になるのはあくまでも普通にこけてから始まるからね。

もしヨガみたいなポーズとって押し倒されたら、私はきつとムードもへつたくれもなく男性キャラを殴っているだろう。つまり今の私の体勢ですね。だけどレイの麗しい顔や身体に傷をつける訳にもいかないからこの体勢を我慢しているんだよ。あーそろそろ背骨折れるんじゃないかなー…。

『そっか』

レイは分かってくれたらしく、ようやく私を起き上がらせてくれ

うん、
た。
謝らないってことは悪気が全く無いみたいだね！

第5話：教えて 先生、痛くしないで……（後書き）

版權は伏字にしました。

一応元ネタ解説

- ・ア・ジン・世界のネズミ作品の一つ。ジー・ーはその作品に出てくる魔法のランプのジン
- ・ドラ・ンボール・原作：鳥山・。ウはその作品に出てくる魔人
- ・攻殻・動隊・原作：士・正宗。少佐はその主人公。
- ・アト・- 原作：マンガの神様。鉄腕・トムの主人公である少年ロボット。
- ・ドラえ・ん・原作：藤子・。不二雄。未来から来たネコ型ロボット。
- ・テイ・ズ・バン・ムの代表的RPGシリーズ。
- ・F・ス・エニの代表的RPGシリーズ。

…最後までさん過ぎる。笑

どこまで書いて良いのか分かりなくなりますね（へへ…）

第6話：甘いけど甘くない

「あいたたたー・・・」

やっぱりあの体勢はキツかったわ。マジ痛いし。私は一度起き上がると、腰を擦りながら地面に寝転がった。ふああーと力を抜くと、レイは目をキラキラさせて寝転がると私に擦り寄ってきた。ワンコか！！だけど美人さんとかawaiiこちゃんならウェルカムだよ。

ホントにレイは可愛かった。幸せそうに笑うから、私も自然と顔が緩んだ。

だけどそれほど喜ぶってことは、きっと今までずっと一人でここに住んでたんじゃないかな・・・。私はどれくらい一人で過ごす事ができるんだろうか・・・。

『ずっとここには住んでない』

「え？」

『色んなところに住んでいる』

「・・・そうでしたか」

じゃあ余計な心配だったか。

『だけど、森が変な感じがしたから戻ってきた』

「変な感じって？」

『何か居るって』

「・・・あーそれ、もしかしなくとも私ですか？」

『うん』

ですよね、そりゃ異世界から来たら誰でも変なやつだわ。

『だから様子を見に戻ってきたら、よろよろして歩いている人を見つけて、近づいたら「もう分かりましたごめんなさい」

『う?』

もうそれ以上は聞きたくないのでレイのお口を強制チャックしました。

あれは人生最大の汚点だよ・・・うん。ああいうのを黒歴史って言っんだね。

「まあそれで戻ってきてくれたのね。とりあえずありがとう」
『うん』

ニコニコ笑うレイの笑顔は眩しいが、私の心は複雑だった。ただ
ど...

「ねえレイ」

『うん?』

「お腹す・・・　　ぐうう・・・いた」

ナイスタイミング私のお腹。でも鳴らない方が嬉しかったよ！

『じゃあご飯を食べよう』

レイは爽やかに微笑むと、私を引っ張って食べ物のあるところに

連れて行ってくれた。湖のほとりを少し奥に進むと、そこには鮮やかで瑞々しい果実がたくさん木に生っていた

「おおー！！！！果物だー！！」

お魚天国ならぬ果物天国だ。かなりの量の果物がそこら中に成っている。

見た目は地球にもある果物とよく似ているが、ここの果物は季節、地域を問わず色んな種類の果物があった。苺、さくらんぼ、葡萄、バナナとか。あ、スイカやメロンもある。

甘いものなら何でもありなのかな？それにしてもこんな大量の果物たちは一体どうやって育っているんだろう…。それはまた後で良いか。私はこっちに来てから何も食べてないからかなりお腹空いてるんだよ。・・初日に胃の中を空っぽにしたしね。早く食べたいよ！。

私の近くに林檎のような果実があったので、一つ採るとレイに駆け寄って聞いてみた。

「これ食べられる？」
『うん』

がぶっ・・・うん、林檎！しかも蜜いっぱい甘いやつ！！

「おいしい！ねえねえこれの名前は何ていうの？」
『リンゴー』
「・・・」

ほとんど名前同じじゃん。しかも少しも捻りがない！！なんかリンゴってマンゴーの親戚みたいだな。まあいいや、美味しいし。

私はお腹が空いていたので、その辺に成っている果物を手に取ると、口や手が汚れるのを気にせずにバクバク食べた。レイも近くで私を見守って（観察？して）いたけど、もうリバーを見られたんだから果汁が滴るのを見られても全然平気。むしろこっちのがマシだよ。

こういう開き直りは女としてどうかと思われるかもしれないけど、私には関係ない。それよりレイは人の観察をしてないで自分の果物食べた方がいいぞ。

…はあーうまかったあー！やっぱり空腹を満たされるだけで気分は違いますなあ。服の袖で口元をぬぐい満足してレイの元へ行くと、レイは微笑んで迎えてくれた。うん、腹も心も満たされたわ。

『おいしかった？』

「うん、おかげでお腹いっぱいになったよ」

へへっと笑うとレイは微笑み返してくれたが鼻をくんくんし始めた。あ、臭いかな？昨日お風呂に入ってないし、たった今も盛大に汚しまくったし…。

『臭くないよ。いい匂いがする』

「へ？」

レイはくんくんすると、匂いの在り処を探し始めたので私も一緒にくんくんして探し始めた。

そつえば鼻をくんくんする絵本があつたなあ、変哲の無い絵本だったけど小さい頃は何度も読み返したよ。そんなことを考えてい

ると、レイは私の手を取りくんくんした。あー、なるほど。

『いい匂い』

「さっきの果物の匂いだよ。果汁を気にせず食べたからね。べとべとしてるから触らない方がいい・・

ペロッ

舐めた！！触らない方がいいって言ったすぐ側から舐めた！！！
レイは目を細めて嬉しそうに微笑んだ。

『甘い』

「こらっ！ダメでしょ！！」

めっ！と私は母親の如く叱り、レイが握っている手を振り払うとレイは口を尖らせて拗ねたような顔をして私を睨んできた。：ダメよ私、いくら可愛いからって甘やかしちゃ。こういうことはちゃんと躾けなくちゃ！！

『どうして？』

「べとべとしてるからばっちいでしょ！衛生上良くないからレイがお腹壊しちゃうかもしれないし」

それでもむうつとしているレイ。お、お母さんはそんなに甘くはない！！！！

『手を舐めちゃいけないの？』

「だめ」

『どうしても？』

「だめ」

私は目を吊り上げてレイを睨んだ。レイのそんなかわいこちゃん睨みなんかには負けないんだから！上から睨んだってかわいこちゃん結局可愛いんだもん！！

「甘いのが食べたいんだったら、あそこの果実を食べなさい」

『お腹は空いてない』

「なら我慢しなさい！」

『嫌』

・・・ああ言えばこう言うってこういう状況のことを言うんだね。さつきまで素直ないい子だったのにいつから反抗期に入っただよ！はぁ・・・と溜息をついてると、急にレイに引っ張られた。

『じゃあこっち』

「は？」

レロ

「っ！！」

『ん、こっちのが甘いし柔らかい』

おかああさあああん！！今、私、唇、お付き合いしてない人に、舐められたああ！！！

思わず固まっちゃったけどこれはダメ！絶対！！確かにレイは美形で異世界の住人だけどダメなんだ！！小説を読むのはいい、だけど私にこんなフラグはいらない！！

私はまだ舐めようとしてくるレイの口を、無理やり両手で押し返した。またレイは不服そうに私を睨んでいる。きっと私の顔は赤くなってるだろうけど負けない！

「舐めちゃダメって言ったでしょ！」

「手は舐めてない。だから口」はもつとだめえ！」「
『どうして？』」

どうしてって・・・この子教育指導者出て来いよ！一体どういう教育してるんだ！！

普通分かるもんでしょうが！・・・ん？普通？いや、レイは特殊だから知らないのか。うん・・・そうだねきつと。だからそれを私が教えるのか。：仕方ない、お母さんは頑張るよ！

私は落ち着いてレイに説明をした。

「レイ、口は特別でね、好きな人としかしちやいけないんだよ。だから舐めちゃダメなの。分かった？」

『・・・分かった』

「よしっ！いいこだ！！」

はぁーお母さん頑張ったよ。レイが聞き分けのいい素直な子で良かった。これで一件落着だ。私はようやくレイに押し付けていた手を離してあげた。

「口に手を押し付けてごめんね？けどこれは大切な事だから」
『うん』

レイも微笑んでくれてるし、仲直りもできてよかったよかった。

けど久しぶりにキ・

レロ

・スウウウー！！なんでこの子分かってないの？！さっき『分かった』って言ったじゃん！！！

『沙恵は好きな人と良いと言っていた。私は沙絵の事好きだからしても良い』

爽やかに何言ってるのこの子——！！！？あなたの『好き』は違う『好き』でしょうが！！！ベクトルが違うのよ！！

それでも舐め続けるレイから離れようと胸板を押すが…動かない。がつちり頭と腰を押さえつけていやがる！！くっそおおこんな時に男の力に女は勝てないのか！！！

レイは私の心の叫びを無視して、口の周りを楽しそうにぺろぺろと舐めていた。

何で私はこんな所でベロチューされてるんだ。ベロチューと言ってもホント唇を舐めるだけのベロチューだけどき。さっきからレロレロレロレロ…ってお前は花●院か！！！！

…はあ、だけどこの子は純粹に舐めたいだけなんだよね。本能で動いているようなもんなんだよ。ホントワンコだな。こんな状況なのに私の頭は冷静に働いている。

だってワンコ相手にときめかないし。やっぱり身体だけじゃだめなんだね。

レイは唇をはみ、口の中まで舐めようとしていたが、私はレイの侵入を拒み、しっかり歯を食いしばって突き飛ばすとうやくレイから解放された。舐めることに集中していたレイの力は弱くなって

いたからこんなのは容易いのさ!!

レイはむうっと物足りなさそうに私を見ていたが、そんなの関係ない。私は怒っているのだ。

『どうして沙恵は怒るの？好きなら良いってさっき言っていた』

「ええ、好きならしてもいいよ。だけどレイの言ってる『好き』と私の言ってる『好き』は違うの」

『何が違うの？』

レイは不思議そうに私を見てくる。ああ、本当に分かってないんだね。

なんだか怒りを乗り越して悲しくなってきた。

「あのね、レイの『好き』は親愛の情なの。友達が好きとかいうそういう『好き』。私が言ってる『好き』は恋人に対しての『好き』って意味。分かる？」

『分からない』

即答された。ですよね…。うーん、何て言おうかな……。

「恋人の『好き』は、何ていうかもうその人の事を考えるとドキドキして、ずっとずっと

傍に居たい！愛してるー！！って感じ」

『愛してる……』

「そう、愛してる」

レイは真剣に考えてくれているけど、ちゃんと分かってくれるかな？

「…んー、まあ今のレイには難しいかもしれないけど、そのうち分かるよ。とりあえず今のレイの私に対しての『好き』は、それじゃないからやらないでね。私もそうだから」

『うん、分かった』

「じゃあ私戻るから、そこでしばらく考えてみてよ」

そういうと私は足早にそこから去り、唇をぬぐった。やっぱりどんな形であれ、『好き』じゃない人とキスするのは嫌だった。

ぬぐった唇からは、甘い香りがした。

第6話・甘いけど甘くない（後書き）

元ネタ解説

・花京・ - 原作：荒木先生。ジヨジ・の奇妙な冒険の第3部の登場人物。チェリーをすぐレロレロする。気になる人は『・京院』『レロレロ』でググって下さい。笑

板井虎はジヨ・ヨ大好きです。けど友達にあまり理解してもらえないのが残念です（´・ω・｀）シヨポーン

第7話：お母さんの教育

私は湖のほとりに戻ると、手と顔を洗った。匂いが残ってまたレイに舐められるのは嫌だからね。最初は嫌だと思ったけど、なんかもういいや。だってレイは純粹に甘いから舐めてただけだし、ワンコに舐められたようなもんだと思ったら気にすることはない。

そう、大型ワンコで見た目は大人、中身は子どもという逆・ナン君症候群だからね。だけどそれが日常茶飯事になるのは嫌だ。私は元からワンコやニャンコにぺろされるのは好きじゃない。

さて、と立ち上がると、私は荷物を探した。バッグにハンカチが入ってたはず。あと財布とかケータイとかティッシュとかmp3とか色々。

…そういえばレイは最初に居たところから移動したって言うけど、もしかしてそこに置いてあるのかな？そんな事を考えているとレイが戻ってきた。ちゃんと分かったかな？

『分かんなかった』

「そっか」

『でももうしない』

「ホント？」

『うん、しない。だって沙恵が怒るし、悲しむから』

「…そうだね」

子どもってこうやってお母さんのいう事を聞くようになるよね。お母さんに怒られるから知らない人についていけない、みたいな。それが躾だよな。まあ分かってくれるならそれでいいや。レイは不安そうに私を見つめた。すごいキュンとくる顔だな！

『沙恵、もう怒ってない?』

「うん、怒ってないよ」

『もう悲しくない?』

「うん、悲しくない」

レイの表情が明るくなってきた。微笑みの神、復活だな。いいこと頭を撫で撫でしてあげたら、一瞬驚いたみたいだけどすぐに笑顔になった。うん、レイが笑顔だと私も嬉しいよ。

あ、そうそう・・・

「ねえレイ、私のバック知らない?」

『ばつぐ?』

「うん。私が最初にこの世界に来たとき、荷物を持ってたと思うんだけど・・・」

レイは首を傾けて私を見ながら考えると、思い出したのか首を戻した。

『あつた』

「なら良かった!それどこにある?」

『【オルガ】の傍にある』

「オルガ?」

なんだそりゃ?

『最初に沙恵が来た時に、傍にあった大きな樹』

・・・リバーしたことしか覚えてないよ。

「…あんまり覚えてないな。とりあえずそこまで案内してくれない？」

『うん』

レイは頷くと、私の手を取って森の奥へ連れて行ってくれた。を外を歩く時はちゃんと手を繋ぎなさいってことを分かっていたくてお母さん嬉しいよ。

・・・遠いな。けっこう歩いてるんじゃないか？時計無いから分かんないけど、1時間は絶対歩いた。太い木の根が生えているでこぼこ道(?)をしばらく歩いていくと、さすがに息が上がってきた。頑張れ私！

『大丈夫？』

「うん、大丈夫だよ・・・」

『だけど沙恵、疲れている』

私の前を歩いていたレイは振り返ると心配してくれた。やっぱり優しい子だね。

「けどもう少し頑張るよ」

『分かった』

再びレイは歩き始めたので、私もそれに続いて歩き始めた。・・・が！

「うわぁ！！！！」

私の履いていたミュールのヒールが折れた！

『沙恵！』

こけそうになった私をレイが引つ張ってくれたので、何とかこける事は免れた。ありがたやありがたや。

だけどこのミュール気に入ってたのになぁ……。ていうかミュールだと歩きにくいな。やっぱりヒールってオシャレだけで実用性はないよね。まあ森の中をヒールで歩く馬鹿はいないか。私はその馬鹿の一人だけ。

「っ・・・！！」

なんか痛いと思ったら、やっぱり少し足を捻ったか。レイは私を引き寄せると、心配そうに見つめてきた。至近距離で見るとレイってより美しいよね。こういう時は『可愛い』より『美しい』んだよ。心配そうな顔をしている美人って女性でも惹かれると思う。

『大丈夫？』

「うーん・・・大丈夫だけど、このまま歩き続けるのはちょっとキツイかな」

うん、困った。このままじゃ夕飯は食べれないな。私は苦笑いするとレイはしょんぼりした。うー、そんな顔しないでよぉ・・・。

「ちょっと足が痛いだけですぐに治るよ」

『足が痛い？』

「うん、ちよつとね」

まあ痛いけど死にはしないさ。骨折れたわけではないんだし。そんなレイはまだ心配そうに私の足を見ていたが、急に私の前に座り込み左足を持ち上げた。

「いつ!!」

『やっぱり痛い』

「そ、そう痛いから!!だから離してっ!!」

『嫌』

何でまたこんなところで反抗期いい!!足を上げられると痛いのもあるけど、スカートだからヤバいんだよ!パンツ見えちゃうよ!レイのお目汚しになるから!!

だけどレイは気にせず私に私の足を自分の方へ引き寄せた。

「・・・っ・・・!!れい・・・!!」

痛いんだってば!!私は涙目でレイを睨んでいるが、レイは聞かえているであろう私の文句をまた全部無視して、左足に掌を近づけると、淡く光る白い光りを当てた。なんだか温かい…。あ、もう痛くない。

ああ、もしかして・・・

「魔法?」

『うん』

おお・・・魔法初体験。これはゲームじゃなくてアニメみたいな感じの回復の仕方だな!。ゲームだったら一気に光りとかがピュン!って来て回復する感じがする。まあバトル中に早く回復してくれないと困るんだけどね。回復魔法の詠唱途中に敵に攻撃されて倒されるとムカつく。

レイは微笑むと私の足を優しくそつと置き、その場に立ち上がった。出来れば最初も優しく持ってほしかったな！

『痛くしてごめん』

「ううん、いいよもう気にしないで。レイのおかげで足治ったし。ありがとね」

ニツコリ笑うとレイもニツコリ笑ってくれた。…眩しいぜ。

『私が沙恵を運ぶ』

「へ？・・・うわっ」

レイは私の返事を待たずに私を持ち上げた。こういふときはお姫様抱っこが普通だろうが、残念ながら赤ちゃん抱っこだ。どうせ私は小さいですよー。にしても視線が高いなあ。

『沙恵？』

「あ、ごめんごめん。ありがたいけど私、重いから運んでたらレイがきつくなっちゃうでしょ？だからいいよ」

『平気。昨日も私が沙恵を運んだ』

「…そうでしたね」

一体この細い身体のどこにそんな体力があるんだろうね？ふう、と私は力を抜くとレイにお願いすることにした。

「じゃあよろしくお願いします」

『うん。沙恵、ちゃんと？まって』

「はい」

大人しくレイの言う事を聞いて服を握ると…一瞬で樹の目の前に来た。おい！！これも魔法か！！私の努力とミュール返せ！！

…落ち着け、落ち着くんだ私。

「・・・どういふことなのレイ？ちゃんと説明して？」

私は怒りを抑えて満面の笑顔でレイに聞いた。目が笑ってないのは言うまでも無いよ。レイは不思議そうな顔をして首を傾げた。

『オルガの傍に移動した』

「うん、それは分かるよ。…どうして最初からこれをしてくれなかったのかなあ？」

もう少し我慢して私、この子に悪気はないから…！！

『沙恵が案内してって言ったから案内した』

…私のせいかなぁあ！！なにこのやり場の無い怒りと疲労感！すぐくト●コ行進曲・オワタ¥（＾０＾）／が歌いたいよ！！

『歌うの？』

「…歌いません」

そんなキラキラと期待した目をされても困ります。こんな子の前では歌えません。

「・・・もったいいや。レイありがと。降ろしてくれる？」

『うん』

よっこいせとレイから降りると、私は左足を引き摺りながら樹に近づいた。よし、バッグ確保。とりあえずバッグが手に入って安心して余裕が出来たので樹を見上げた。

「それにしてもでっかいなあー・・・」

がっしりと太い根は地面に力強く根付いていて、丈夫そうな幹はとても固く、ぼこぼことしている。上へと伸びる枝も大きく広がり、青々しい緑の葉を沢山生やしている。下から見るとブロッコリーみたい。

その葉は日に当たり輝いているが、日の光りを遮っているので樹の麓には日陰が出来て涼しいし、雨宿りが出来そう。

とにかく生命力がみなぎっているので、この樹の側はすごく心地良い。

日の光りを浴びてキラキラしているレイが微笑みながら近づいてきた。うん、この樹があるから余計神聖さが出てるね。麗しい・・・

「この樹がオルガ？」

『うん』

「なんか、すごく力強くて心地良い樹だね。私好きだよ」

微笑みながらレイを見ると、レイも嬉しそうに微笑んでいた。やっぱり勝てないや！

レイがオルガを見上げたので私も見上げた。

『オルガはこの世界の【メージ】の源』

「明治？」

『メージはこの世界の生命力。魔法の媒体。メージがなくなると、この世界は死ぬ』

「え、それ大変じゃん！」

私のボケをシカトして説明するだけの価値はあるよ！静かに話すレイを見ると、どこか遠くを見ているようだった。

「じゃあ魔法を沢山使ったらメージ無くなっちゃうんじゃないの？」
『魔法を使っても使われたメージはまた還元されるからメージは無くない』

「そっか、だからここは神聖樹海って呼ばれているんだね」
『うん』

世界を支える樹。なんか聖・伝説みたいだな！さすが異世界、フアンタジーだね！もう不思議なことにはこれしか言えないよ！！

「ふう」

私は疲れたのでオルガの側で休むことにした。あーやっぱり心地いいわ。けど私こんな神聖な樹の下で何してんだよ。世界の生命力を生み出す樹の側でゲロ吐くとか最悪だな！

あーその事によって汚いメージが出来たらごめんなさい。

『そんな事は無い』

「え？」

『オルガは沙恵の嘔吐物を養分として吸収して浄化するから汚いメージは出来ない』

「・・・そうですか」

つまり私のゲロはオリガの肥料になった訳ね。馬糞や牛糞とかと同じもんか。まあ害が無いならいいや。それにしても心地いいから眠くなってくるな…。動きたくないや。

『沙恵、ここで休むの？』

「うん、今日はここで休ませてもらうよ。あ、けど食べ物無いからあそこに戻らなきゃダメか…。」

『私が取ってくる』

「ほんと？ありがとね」

『うん』

さすがレイ。優しくて良い子だ。不純物いっぱい私の心の癒しだ。

『じゃあ行ってくる』

「いってらっしゃーい」

そう言つてレイの背中に手を振るとレイは消えた。ホント便利な機能だな！

だけど私はもう疲れたよパト・ツシュ…。私はおやすみ3秒で眠りについた。

『…恵、沙恵』

「…ん…」

レイが帰ってきたのか。うー…っと私は伸びをすると、目を開いた。

…やっぱりレイが至近距離で見てるよ。何となくそんな気はしてたから良いんだけどね。もうレイの行動には慣れちゃった。

『沙恵、いっぱい採ってきた』

「うわー・・・ホントいっぱいだねえー・・・」

『うん』

レイの指差した方をみると、さっきの果物が山盛り積まれていた。ほんと、山盛り。公園のジャングルジムくらいの高さまで積んであるよ。

『沙恵』

「ん？」

『いっぱい採ってきた』

「うん」

…なんかね、すごい期待いっぱいのキラキラした笑顔で私を見てるんだよ。

『採ってきた』

褒めてほしいのね・・・。あなたただけワンコなんだあ！そこが可愛すぎる！！！！

「・・・たくさん採ってきてくれてありがとね。レイはいい子だね」

私は高速で『よしよしよしよし！』ってしたいのを堪えて、優しく何度もレイの頭を撫でてあげた。そんな事したらレイの頭が禿げちゃうもんね。レイは満足げに私に擦り寄ってきた。

・・・ペットに服や高価な食事や別荘を買い与える人達の気持ち

良く分かったよ。

お昼寝から起きたらもう夕方になっていたので、今日はここで過ごす事にした。だって心地良いし。私は果物をもぐもぐ食べ始めたけど、レイは一つも食べなかった。

「どうして食べないの？」

『お腹は空かないから』

何で・・・て聞こうと思ったけど、やめた。多分『何でだろう？』って返ってくるから。

レイにはレイの事情があるんだろう。深くつつこんじゃダメだ。

「じゃあ悪いけど私だけ食べさせてもらっね」

『うん』

なんかレイが嬉しそうに私の食べっぷりを見ていたが、私は気にせずに食べ続けた。

「ふえ〜」

お腹いっぱいだ。ここの果物は美味しいからついつい食べ過ぎてしまう。瑞々しいから果汁もこぼれてくるしね。レイがうずうずしてるけど私は知らんよ。けどべたべたする。手え洗いたい。ていうか風呂に入りたい。こんなところに風呂なんか無いだろうなあ・・・。うーん、湖にでも入らせてもらっか。

『湖に行くの？』

「うん、体洗いたいんだけどいいかな？」
『うん』

喋らなくても伝わるって便利だ。そんな訳で最初の湖に来たわけですが…私タオル持っていないや。それに着替えもないじゃん。嫌だよこんなべとべとの服をまた着るの。

「うーん、レイ」
『ん？』

「レイって着替えの服持つてる？」
『着替え？』

「うん、他の服」
『無い』
「ですよー」

だってレイって「汚れて何ですか？」ってくらいキレイだし。ふむ、どうしたものか。

『沙恵は、他の服が欲しいの？』
「え、うん欲しいけど…あるの？」
『今は無い。だけど沙恵が欲しいなら出す』

おお、すごいな。さすが異世界。どうせだったらシャネウイグの服を着たほうがいいか。これから森の外に出るとしたらそっちの方が怪しまれずにすむ。

「じゃあシャネウイグの一般家庭の女の子が着る動きやすい服にしてくれないかな」
『分かった』

そう言つとレイは両手を肩幅くらいまで広げると、その間が光り始めポンッ！て感じに服が出てきた。そしてふわー、とレイの腕の上に降りてきた。おおー、これなら金いらないじゃん。

『はい』

レイは微笑んで私に服を渡してくれた。それは中世のヨーロッパ風の服で、緑をベースにした町娘Aみたいな服だった。これなら目立たずに普通の生活が出来るはず！派手で綺麗で可愛いドレスは嫌なんだ。動きにくい上に機能性がない。もうミニールの件でこりごりだ。

「レイ、あと身体を拭く布と石鹸も出せないかな？」
『出せる』

また手を広げるとポンッ！て布と石鹸が出てきた。石鹸も清潔感のあるフローラルな香りがするし、布も身体を拭くには勿体無いほど滑らかな生地だった。よし！！細かいことは知らないがこれで身体を洗える！

「ありがとね！じゃあ行ってくるよ」
『うん』

私が湖の側にある気に向かおうとしたら…やっぱりついてきましたよ、このワンコ。はあ…

「レイ」
『ん？』

「私は一人でお風呂に入りたいからあっちで待ってて」

私はこことは反対側の林を指した。あそこなら見えないはずだ。

『嫌』

「なんで?!」

『沙恵と一緒に居たいから』

…なんて健気な子なんでしょう！爽やかに悪意のない笑顔で言われたら何も言えない・訳が無い!!! やっぱり男女としてこれは大切だよな。

「レイ、果物の時も言っただよね？」

『特別な好き?』

「そう、お風呂・水浴びの時もそれと一緒に、特別な好きな人じゃないと裸を見ちゃいけないの」

『そうなの?』

「うん、そうなの」

『私の好きはまだ特別じゃないの?』

「まだだね。それに私の好きも特別な好きじゃないから」

まあ間違っちゃいないよね。私のレイに対する『好き』は子どもやワンコに対する好きだから。まあ母性本能みたいなものだよね。レイは少し悲しそうに俯くと、湖から離れていった。

すまんね。よく考えておくれ、ワンコよ。私はここでフラグを立てるつもりはないのだよ。

第7話：お母さんの教育（後書き）

ネタバレ解説

・トルコ行・曲・オワタ¥（^0^）ノ・ニコ動でチェックして下さい。笑

・聖剣・説・スクエ・のアクションRPG。

・パ・ラッシュ・フランダースの犬に出てくる犬。

いつもながらのずさんな解説ですみませんorz

第8話：私の思いと大切なもの

あーさっぱり。レイの魔法のおかげで無事水浴びが出来たわ。湖の水は月明かりに照らされ淡く反射して綺麗だったし、広かったから泳いじやった。やっぱり広いと泳ぎたくなるね。調子に乗って潜水もしちゃいました。レイの出してくれた石鹸も泡がすごくきめ細かく泡が立ったのですごくスッキリした。もうベタベタどころかツルツルだよ！布も肌触りが良く、吸水性も良かったので拭いていてすごく気持ちよかった。やっぱりレイは便利だなあ。

私はレイからもらった町娘Aの服を着ると、今まで着ていた服と下着を洗濯をした。雑巾の如くぎゅーっと絞ると、皺を伸ばして丁寧にタオルの中に包んだ。ノーパン、ノーブラは嫌だけど致し方ない。このままずっと同じ下着を穿くのは・・・ねえ？入念にタオルに包んだから明日までには乾くよ。それ位このタオルはすごいものだと私は信じてる……！！

レイはちゃんと私の言う事を聞いて、反対側の林まで行ってくれた。少し遠いけど、発光しているからどこにいるかすぐに分かる。木の側にぼつーんと座るレイは、まだ難しい顔をして考えていた。…真面目だなこの子。素直で真面目で優しくて純粋なんて良い子の鏡だよ！

「レイー」

『…………』

返事がない。私はしゃがみこんでレイを覗き込むと、レイはなんだか答えが分からないのが悔しいのか、眉間にシワが寄っていた。そんな顔がなんだかおかしかったので思わずクスッと笑ってしまった。まったくこの子は…

「眉間にシワ寄せると、せつかくの美人さんが台無しだぞ？」
『・・・・』

実際レイは眉間に皺があっても美人だけだね。悩ましげな美人も
いいよね。

「レイは一生懸命考えてるけど、いま頑張らなくてもそのうち分かるって」

ね？つと頭を撫でるがレイの顔は晴れない。いつもなら喜ぶのになあー。ワシワシと撫でられていたレイは、淋しそうに私を見つめてきた。なんか男性なのに加護欲が沸くよ。

『沙恵は、私の事を好きじゃないの？』
「は？」

何言ってたんだこの子は。

『沙恵は私のことを特別に好きじゃないって言った』

あー、それですか。レイはまた寂しそうに俯いてしまった。うーん……

「確かに特別な好きじゃないけど、レイの事は好きだよ」
『ホント？』

「うん、大好き」

その言葉で安心したのか、レイはようやくぱあっと笑顔になった。うん、気分によって発光具合が違うのね。さっきまではベッドスタ

ンド並だったのに、今は蛍光灯になってるよ。最高潮はLED位に光るのかな？それとも太陽か？それは目が死ぬな。

「じゃあオルガに戻ろう？」

『うん』

レイは嬉しそうに私の手を取り立ち上がると、一瞬でオルガまで連れて行ってくれた。

水浴びから帰って来ると、もう森は真っ暗になっていた。初めて来た時には気づかなかったけど、周りには木々という大自然が広がり、澄み切った夜空には星たちが瞬いている。きつとここに来なければ一生見ることのなかった景色だよね。

そう、昨日まで自分が暮らしていた世界の事を考えると、夢のように感じる。ここにいる事が夢なのか、向こうにいた事が夢なのか分からなくなる。

だけどその答えはいくら考えても出ないと思う。夢だろうが幻だろうが脳が現実だと思ったら現実になるんだよ。だから私は今見えて、感じることを現実だと思う。

信じられなくても、それを受け止めて生きていかなくちゃ。

私はオリガの側にとずっと凭れると、隣りにレイが座った。レイはやっぱり明るくて温かいな。オルガの側だよりヒーリング効果がある。気持ち良い。だけど…

「・・・ねえ、レイ」

『ん？』

「私、明日ここを出て行くね」

レイは多分前から私の心の声が聴こえていたから知っていただろ

うけど、私が直接言葉に出して伝えた事が悲しいのか、彼の発する光りが少し小さくなった。

『どうして沙恵はここを出たいの？ずつとここに居ればいい』

「うん、そうだね。だけど私はここを出て行くよ」

『どうして？』

レイの視線が痛い。だけど私はそのまま続けた。

「私はこの世界で生きていくって決めたから」

『ここでも生きていけるよ』

「ううん、ここだと私は生きてない。生かされているの」

『・・・・・・』

「食べ物にしても、お風呂にしても、寝る場所にしても、全部レイが与えてくれたもののなの。それが迷惑なわけじゃない。むしろありがたいと思ってる。だけど私はレイが居なかったら何もできない。それが嫌なの」

『私は沙恵が望むのならずっと居る』

「ううん、だめ。それが生かされているって事だから」

もう嫌なんだ。甘えてしまうのも、心配をかけるのも、頼ってしまうのも、助けてもらうのも。

発作が起きた時、私のことを心配してくれるのは有り難いけど心狭い。友達とも仲良くしたいけどこんな気持ち悪いもの見せたくない。体調が悪くて動けないときは他人に全てをやってもらって申し訳ない。私が倒れるせいで・・・今までたくさんの人に迷惑を掛けてきた。いつもそれがすごく嫌だった。今までの私も、ずっと生かされていた。だけど今ここで私は独りだ。誰も頼る人がいない。

だからこそ今、自分の力で生きたいと思った。

そんな事を考えていたら自然と涙が頬を伝った。ああ、本当は辛かったのか。瞼を閉じると、目に溜まっていた涙が全部流れた。私は弱いな。

暖かな温もりが優しく頬を包み込んだ。レイか…。瞼を開くと、真っ直ぐ私を見つめるレイが私の涙を指で拭いていた。透き通ったトパーズの瞳が、私を真摯に見つめている。きっと私の思っていたことは全部伝わったと思う。

『森が出るのは危ないけど、それでも行くの？』

「うん・・・もう今しかないと思うから」

『・・・分かった。私は沙恵に付いてはいかない』

「うん」

『沙恵が外で暮らすのなら、私もここに居る必要は無い』

「そうなんだ」

そういえば色んなところに住んでるって言ってたね。迷惑掛けてごめん…

『迷惑じゃない』

「ありがとう」

『うん』

「ふふ、これじゃいつもと立場が逆だね」

『うん』

レイが優しく笑って頭を撫でてくれたから、私も自然に笑えることができた。

私は力を抜いてオルガに凭れていたけど、レイはそのまま撫で続け、そのうち私の濡れた髪を梳き始めた。

何だかほわほわと温かいから何だあ？と思ってレイの方を見ると、

レイの手が淡く薄黄色に光っていて、その手で私の髪を梳いていた。彼が髪を梳くことに私の髪を乾いていった。…もしかしてこの手はドライヤー状態なのか？

『ドライヤー？』

「ん、ああ。私の世界の髪を乾かす道具だよ」

『うん、今は沙恵の髪を乾かしている』

「ありがとね」

『うん』

レイが梳くごとに私の髪はさらさらと乾いていく。ドライヤーよりも髪に優しいかも。もしかしてレイの髪が美しくサラサラな理由はこれなのかもしれないね。髪を梳きながらレイは掌の上で躍る私の髪をじつと見ていた。

「どうしたの？」

『沙恵の髪の手は綺麗。赤い』

なんだか美しい髪の手を持ち主に言われると照れるなあ。

「けどこれ染めた色だから、その内黒い毛が生えてくるよ」

『染める？』

「うん」

『どうして染めたの？』

「うーん、黒の髪じゃなくなったら、何か変わるんじゃないかなって思ってた」

『変わった？』

「あんまり変わらなかった。けど、私はこの色が好きだからいいんだ」

『そう』

髪の色を変えれば何が変わるんじゃないかって期待してたけど、結局何も変わらなかった。だけど今更黒に戻すのも嫌なんだよね。初めて染めた時からずっと赤だったから、黒に戻すと逆に落ち着かない。まあ、慣れだよな。

『髪の毛がくるくるして可愛い』

「あーこれは天然パーマだから仕方ないよ」

『天然パーマ?』

「うん、生まれつきこの髪はくるくるしてるんだよ」

よく『パーマかけてるんだね』なんて言われるけど、自前だっていうとみんな驚くんだよ。それくらいクルクルしてるのさ。レイは私の髪を手にとったり放したりして楽しそうに遊んでいる。

『可愛い』

「私はレイのサラサラで真っ直ぐな髪が羨ましいよ」

レイは不思議そうに自分の髪を手にとってジーっと見ると、私に視線を戻した。

『いる?』

「いないよ!-!」

この子の場合本気で髪の毛をぶち抜きそうで怖いわ!せっかくの美しい髪が勿体無い!!

『そうなの?』

「そうなの!」

レイが笑い始めたので、私もつられて笑ってしまった。初めて会った時はこんな風な風なとは思っていなかった。何せ私の第一印象は最悪だったしね。だけど今、レイとの何気ない会話ですごく心が穏やかさを感じる。レイ、本当にありがとう。

『これは何?』

レイは髪を梳き続け、耳の近くを梳いていると私のピアスを見つけた。

「ん、これはピアス。アクセサリーだよ」

『どうやって付いているの?』

「耳に穴開けてつけるの」

『痛くないの?』

「最初は痛かったけど、もう痛くないよ」

『そう』

私は左耳に付いているピアスに触れた。私はいま右に2つ、左に3つの計5つのピアスをしている。大学に通う前に、好きな事をしようと思って耳にピアスを開けた。本当は3つにしようかと思ったけど、あいつとお揃いにするのは何だか癪だし、偶数は良くないぞーってあいつが言ってたから5つにした。ふん、参ったか！

レイはそのまま髪を梳き続け、うなじの辺りまで梳いてくれた。おー首がほわほわしてきもちー。頂の髪を持ち上げた時に、今度は私の首に掛かっているネックレスを見つけた。

『首に掛かっているのは何?』

「これはネックレス。これもアクセサリーなの」

『どうして着けているの？』

「大切な友達からもらったからだよ」

『大切？』

「うん」

私は首の部分の服を少し引っぱり、服の中に隠れていたネックレスを手にとると、奈由のことを思い出した。懐かしいな、もう4年も経つのか…。

私が初めて発作が起こした時、奈由もその場に居合わせていた。

だけど私の発作の異常さにショック受け、一緒に病院には来なかったみたい。私も後から聞いた話だけど、全身が大きく痙攣して白目を向き、口から泡を吹いていたらしい。そりゃいきなり友達がそんな風に倒れたらびびるよね。私も奈由がいきなりそんな風に倒れたらショック受けるよ。

入院してから数日経つと、奈由は花を持ってお見舞いに来てくれた。

「沙恵・・・」

「ああ、奈由。いらっしやい」

私は笑顔で迎えたけれど、奈由が私と視線を合わせようとせず、まずそうに入ってくるから、私は苦笑してしまった。

「私、急に発作が起きたみたいだね」

「うん・・・」

うーん、暗いな…。

「なんか気持ち悪いものを見せてゴメンね？」

「沙恵…」

「私もあんなの奈由に見せるつもり無かったんだけどさ、なんか勝手に起きちゃって…ごめん」

私は努めて明るく振舞っていたけど、だんだん声が掠れて目頭が熱くなってきたので思わず俯いてしまった。暗い雰囲気を変えたかったのに、これじゃあ意味無いじゃん！あー、泣くな私！！

「沙恵は悪くない！！！」

奈由はいきなり大きな声を出したので顔を上げると、奈由は目を潤ませて必死に自分の気持ちを打ち明けてくれた。

「沙恵は悪くない！悪いのは私だもん！！」

「……」

「…私、怖かった。いきなり沙恵が倒れるから、沙恵が死んじゃうんじゃないかと思った。沙恵の発作は仕方ないことなのに、その様子が怖くて、動けなくて、何も…できなくて……！！」

「奈由…」

「何も出来なくて…ごめんなさい…！」

奈由は俯くと嗚咽を漏らし、ボロボロと涙を落とした。その様子に、私も涙が零れた。

「奈由は何も悪くないよ。私がいきなり倒れたりしなければ、奈由に怖い思いをさせずにすんだのに…。心配掛けて、ごめんね…」

「だから沙恵は悪くないのー!!」

「だけど・・・」

「悪くない!!!」

「…プツ」

「沙恵!!!」

「アハハハ!ごめんごめん」

どっちが悪い、悪くないだなんて責任の押し付け合いをしているのがおかしくて、思わず笑ってしまった。奈由もだんだん落ち着いてきたのか、二人で一緒に笑い始めた。

さっきまでの暗い雰囲気なんかもうなかった。一頻り笑うと、奈由は思い出したように鞆の中から小さな箱を取り出して、私にくれた。

「はい、これ」

「何?これ」

「入院祝い」

「入院『見舞い』ね」

「あ、そうか!」

「まったく・・・祝ってどうすんの」

「えへへ・・・まあ開けてみてよ!」

「ん」

楽しそうに言うから何なんだろう?と思いながら箱を開けると、クリスタルのネックレスが入っていた。クリスタルの大きさは8cmくらいで、八角形が下に広がっていき一番太い部分がそれぞれダイヤモンド型に削られ、そこから下に尖っていた。横から見ると、少し変わった形のひし形にも見える。それを手に取ってみると、クリスタルの中で光りが反射して綺麗だった。

「クリスタルのネックレス？」

「うん！沙恵が早く元気になるように願いを込めて」

奈由は元気に答えると、私のベッドにぼすんと座った。

「クリスタルにはオールマイティなパワーがあるんだって！願望や恋愛成就、邪気払いとかね。だから私は沙恵の身体が早く良くなりますようにってお願いしておいたの。ちょっと大きいけど、大きいほうが良く効きそうでしょ？」

ふふつと少し照れくさそうに笑う奈由に、私は涙が零れそうになった。

「・・・ありがとね。大切にするよ」

「うん！私だと思って可愛がってね！！」

「自分で言うなよ」

そんな風に泣いたり笑ったりして、今まで奈由と穏やかな時を過ごしていた。

今ではもう会えないかもしれないけど、このネックレスを持っているとどんなに遠く離れていても、奈由と繋がっているような気がする。だからこれは、私を支えてくれる大切なお守り。

第9話：子育てに疲れても、育児放棄はしません

クリスタルを手に取り大事に服の中にしまうと、レイの手が止まっていた。お、髪が乾いてる。私が髪を手櫛で整えると、レイはなんか拗ねた顔でまたかわいこちゃん睨みをしてる。

『沙恵はナユのこと『好き』なの？』

「うん！大好き」

『ナユは沙恵の『特別』なの？』

「うん、特別だよ」

一番の友達だしね。あ、なんか眉間のシワが増えた。

『どうしてナユは『特別』なのに、私は『特別』じゃないの？』

「どうしてって…そりゃ奈由は私が幼い頃から一緒に、お互い支えあってきたからだよ」

今度はさらにむくれて目が釣りあがってきたよ！

『じゃあナユはサエを舐めても一緒に水浴びしてもいいの？』

「いや、水浴びは良いけどさすがに舐めないなあ…」

なんか空気が冷えてきた…。まさかこのワンコがこんなに怒るなんて…！ていうか、この子勘違いしてないか？！

「えーと…レイ？」

『……………』

完璧に拗ねてる、いや怒ってるレイは初めてだよ…。なんか空気がぴりぴりして冷たいもん。

『ナユだけずるい』

「はあ？」

『私も沙恵の『特別』がいい』

…やっぱり勘違いしてるし、なんか焼餅やいてるよ。

「ねえレイ」

『……………』

無視ですか。まあいいや。

「奈由は特別だけど、今日レイに話した『好き』とは違う『好き』なの」

『…何が違うの？』

「奈由は親愛の情での『好き』で、恋愛じゃないの。だから舐めて良いとかの時の『好き』じゃないんだよ」

ていうかもう奈由は友達の枠を超えて私の中じゃ『奈由』って枠が出来てるんだよね。それくらい奈由の事が好き。相思相愛さ

『分かんない』

とうとうレイは膝を抱えて反対側を向いた。見た目が大人で美人のかわいこちゃんが、こんな子どもみたいな事していると逆に萌えない？

とりあえずそれは置いておいて、うーん…分かんないよね。『愛

してる』って言えば確かにそうだけど、『好き』と『愛してる』の違いは何なのかって言われると説明はできない。

家族の事や友達の事は『好き』だけど、『愛してる』とも言えるから、恋愛限定じゃないんだよねあーん？恋愛限定…あ、恋か！けどその違いも私には上手く説明できないし…愛って難しいね。やっぱり感覚でしかないよ。その感覚がレイにもあれば良いんだけど…レイは恋愛感情が無いみたいだし、仕方ないか。きっとそのうち芽生えるんじゃない？今はそれが分からないから、レイは『特別』が良いのね…ふむ。

「ねえレイ」

『……』

「レイは私にとっても『特別』だよ？」

『……』

お、こっちを振り向いたな。そのまま良いから聞いておくれ。

「レイは得体の知れない私を無条件で助けてくれたし、この世界の事を教えてくれた。この世界で一番最初に『好き』になった人だよ。それって『特別』じゃない？」

だんだんこっちに向き直ってきたぞ。あともう一押し！

『私は、沙恵の『特別？』』

「うん、特別」

『本当？』

「うん、ホント」

ようやく笑顔が戻ってきたぞ！そうだレイ！その笑顔だ！！

『沙恵も私の『特別』』

「ありがとう」

ああーもう可愛いなあ〜につこにつこしちゃって！！美人さんなのにかわいこちゃんスマイルとかマジやばいよ。目福だ目福。私が男だったら嫁にしてるね！あ、レイは男か。

レイスマイルの効果で自分の世界に入っていたら、レイが擦り寄ってきた。この大型わんこめ、今度は何だよ。幸せそうにすりすりしてるから何にも言えないよ！

『サエは特別』

「うん」

『サエも特別』

「うん、そうだね」

そんなに特別が気に入ったのかこの子。まあ間違っちゃいないけどさ、こんなに喜ばれるとなんか照れちゃうよ。

『特別だから、あげる』

「え、」

何を？って聞こうとしたら…

「うわあっ！！」

レイは私の腰を引き寄せ、頭を後ろから抱きかかえると、右耳に息を吹き込んだ。

「ひゃっ！！」

な、何てことするのこの子！！お母さんはそんなこと教えた覚えはありませんっ！！しかも耳たぶを食んだ！！

「レイツ・・・！！」

私は身を振るが全く意味が無い。どこにそんな力を秘めてんだよっ！こんな15歳未満の方は（以下略）な展開はダメだ！！しかもこの体勢は昼間のベロチュー事件と同じじゃないか！！ん？ベロチュー事件と同じって事はこれも純粋にしている行動なのか！？

「・・・ちよっ・・・！！」

今度は左耳にも同じ事をしてきた。レイの吐息が優しく耳にかかり、柔らかい唇は耳を食み、耳たぶを丁寧に舐める変な感覚に力が抜けかける。思わずレイの服をぎゅっと握り締めてしまった。…私耳は弱いんだよ！そのピアスは舐めないで！！今度は一体何を求めているの？！

レイが離れた瞬間に突き飛ばそうと思ったら、逆に両手を取られ、片手で上に括られた。

「レイツ！！いい加減にしなさい！！」

『嫌』

嫌じゃねえよ！！これエロシーンの定番の体勢じゃねーか！

レイは私の首の部分の服をネックレスが見える所まで服を引っ張ると、胸元に顔を寄せてきた。ネックレスのクリスタルは少し大きめなので、丁度クリスタルが胸の谷間の部分にある。

ちよっ！！これは真面目に貞操の危機じゃない？！私は身体を振ってレイから逃げようとするが、レイは強引に顔を胸元に近づけるとネックレスの上から胸元を舐めた。

「・・・っ・・・！」

レイの温かな舌を直に感じると否が応でも身体が反応してしまう。あのベロチューとは次元が違うんだよ！今度はネックレスかつ！そのネックレスは奈由から貰ったものなんだよ！！奈由を舐めるな！！！！

「レイッ・・・！！！」

レイは丁寧に舐めあげ、最後にそこにキスをする、ようやくレイは私の腕を解放した。私は急いでレイから離れて胸元を隠した。怒りと羞恥で顔を赤くして思いつきり睨んでいるのに、レイはとっても輝かしい笑顔を向けてきた。

「いきなり何するのよ！！舐めちゃダメって言ったでしょ！！！」

しかも胸！レイが美形でワンコじゃなかったら強姦で訴えられてもおかしくないんだぞ！！

『沙恵は特別だからおまじないをしてあげた』

「はあっ？！！」

『沙恵がここから出ても安全に暮らせるように、おまじないをした』

・・・なんだよこのエンジェルスマイル！！ゴッドスマイル！！！！怒りたくても怒れないじゃないか！

落ち着け、落ち着けわたし。彼に悪気はないワンコなんだ…。私は深く深呼吸をして自分を落ち着かせた。

「・・・分かった、これはおまじないなのね？」

『うん』

「じゃあどうして最初に言ってくれなかったの？」

顔が引きつるのは仕方ない。こっちにだってそれなりの心の準備
って物があるんだ！言ってくれたら全部外して渡してあげたのに！！

『だって、言ったら沙恵は怒る。おまじないをしている時も怒って
いた』

そりゃ怒りますともおお！！

『だから怒られる前におまじないをした』

何だよこの満足気でしてやったりな笑顔！むしろ褒めてほしいみ
たいな顔してるよ。おまじないはありがたいけれどもッ！……
・もういいや。こんなんじゃ怒れないよ。まともに相手していても
自分が疲れるだけだな…。

「はあ……」

私がおでこに手を当てると、レイは可愛い笑顔をしながら嬉しそ
うに聞いてきた。

『沙恵は怒っていたけど、少し気持ち良さそうだった。嬉しい？』
「レイッ……！！」

こんのナチュラルエロスめ！！私はグツと拳を握ったが、それを
解くと盛大な溜息を吐き、夜空を見上げた。

私は異世界に来て一日しか経ってないのに、今までの世界のこと
がすごく前のことに感じるよ。それは隣にいる神の如く美しく可愛
い大型ワンコのせいだ。

身長も大きくてありえないほど美形なのに、中身が子どもとい
うかワンコみたいなんだよ。彼の本能で動く不思議な行動にすつ
つっごい振り回されて、なんか子育てに疲れたお母さんのようにな
ってしまったよ。お母さん、今までわがまま言っでごめんなさい。
今ならお母さんの気持ちがよく分かるよ。

お母さん、私は明日には森を出ます。私はもう異世界戸にトリッ
プした事を理解しているし、これからここで生きていくと言う事を
受け止めているからここに居る長居する必要は無いんだよ。ここは
居心地いいけど、レイ意外誰も居ない。だからレイに頼りすぎてし
まうのが嫌なんだ。今までも、周りに頼りすぎていた。独りになっ
た今、自分の力で生きていこうと・・・ていうかこういう台詞は
異世界で何日も過ごして成長してから言う主人公の台詞だね。三
日目でこの台詞ってどうよ。まだどこにも行っていないのに成長の展
開早すぎるだろ。

…まあもともとから考えていた目標を達成するって事で許してよ。明
日ここ出て行くから体力温存したいし、疲れたからもう寝よ。

私が木の下に寝転がると、レイも寝転がった。子どもってよく親
の真似するよね。

「レイおやすみ」
『おやすみ』

最後まで最高に美しい微笑みだよ。私はころん、とレイに背を向
けるように反対側に寝転がったら、レイもころん、と私のほうに転
がってきた。

「……………」

そろつと後ろを見ると、レイと目が合い可愛らしい笑顔を見せた。
うん、和むけどね。なんで近寄ってくるかな？

『沙恵と一緒に居たいから』

……最高に可愛いこと言うじゃないか！恋人だったら最高の
口説き文句だね！！その美貌で言われたら落ちない女はいないよ！
！！

だけど残念ながら私は彼がお子様なワンコということを知っている
ので、女性としてときめきません。むしろ母性本能がくすぐられます。
……ん？それは私が女じゃないって事になるのか？

『沙恵は女』

レイの笑顔に私は苦笑すると、レイの頭を撫で撫でて再びおやす
みを言った。これでいい子なら寝るよ。という訳でおやすみ。寝
ようとしたらレイが後ろから抱きしめてきた。…どこまで甘えんぼ
さんなんだ！！

「レイ、寝にくいから離して」
『嫌』

私が離れようとすると、もっときゅーっと抱きしめてきた。

「レイ、ちょっと苦しい」
『……………』

そう言うとき少し力を緩めてくれたが、腕を解いてはくれなかった。

なんかまた不貞腐れてるっぽい。はあ・・・。

「どうしたの？」

振り向こうとしたらそのままぎゅっとされて向けなかった。本当に何がしたいんだろう・・・。

『沙恵が森から出て行ったらしばらく会えない』

「・・・・・・・・」

『だから沙恵の匂いと感触を覚えておく』

なんかホント恋人みたいなこと言うけど、動物っぽくもあるよね。可愛いワンコ、本当に甘えん坊さんだね。もう抱き枕だろうがなんだろうが好きにおし。今日だけ特別だよ。

そのことが伝わったのか、レイは力を緩めると、健やかな寝息をたて始めた。やっぱりお子様だよ。静かに寝てくれ。

夜の森は冷えると言っていたけど、レイが居るから寒くなかった。暖房代わりだな！

そのとき何となく、レイに初めて触った時より身体が少し硬くなっているように感じけど、疲れていた私はあまり深く考えずに寝た。

朝日が昇り始め、周りが明るくなってくると、私は眩しくて目を覚ました。

「・・・んー、おはよーレイ・・・」

まだはつきりしない頭でレイに朝の挨拶をすると、そこにレイの姿はなかった。

「レイ・・・？」

何でレイは居ないんだ？・・・もしかしてトイレか。ああ、確かに昨日レイは用を足してなかったからね。そのうち戻ってくるか。お、下着ちゃんと乾いてる！さすが魔法のタオルだ。呑気にそんな事を考えていたけど、しばらく経つてもレイは戻ってこなかった。

仕方ない、先にご飯を食べるか。私は昨日レイが山ほど採ってきた果物を食べ始めたけど、食事が終わってもレイが戻ってくる気配はなかった。日が高く昇るまでオルガの側に居たけど、やっぱり戻ってこない。

「どうしたんだろう・・・。あ、」

『沙恵が外で暮らすのなら、私もここに居る必要はない』

昨日レイはそう言ってたじゃないか。もしかしてレイはこの事をもう実行していたのか？

…別れるときくらいちゃんと行ってよ！なんか寂しいじゃないか！けどレイは元から色々なところに住んでたって言うし、あんまりそついうの気にしてないのかも・・・。また今度会ったらちゃんと教えておこう。

第10話：凡人の冒険〜チートへの目醒め〜

「さて・・・」

私は旅に出かける準備をし始めた。いつまでもここにいても始まらないしね。

まずは食料。これは大切だね。レイが採ってきてくれた果物があるから何とかなるか。あ、バナナ持ってこ。確か栄養分が豊富だったはず。少し固めのを持っていけばその内熟すだろうし。確か近くに大きな葉っぱがあったから、それに包んでいくか。

あと水。うーん、なんか入れ物ないかなー。あ！私ペットボトル持ってたわ。奈由とカラオケに行く予定だったから持ち込もうと用意してたんだよね。コンパクトな1？が2本だから2？。フリーだと結構飲むからね！その水が無くなったら旅の途中で補給するしかないか。大切に飲もう。

靴はどうしよう…。片っぱはヒールが折れてるしな。うーん、やっぱり素足で歩くのは危ないから、もう片方のヒールも折って履くしかないかな。さようならヒールよ・・・生きるために犠牲になつてくれ。思いつきり地面にガンツとぶつけると、あっさり折れた。君も寿命だったんだね、安らかにお逝き。

あとは懐中電灯とか欲しいけど、これはケータイのライトを使えばいいか。電池無くなっちゃうから貴重に使わないとね。

他には・・・あ、ナイフかなんかあると便利そうだね。サバイバルしてる人とか持ってそうだし。だけど刃物なんか持ってないよ。普通遊びに行くのにそんな物騒なものは持ち歩かない。ふむ…あ、バッグにオロナンコが入ってるわ。瓶を割れば刃物の代用になるか微妙だけど、後でやってみよ。

よし、旅の準備は完了ー。いざ行かん、西の天竺へー！…なんちゃ

って。

一人旅初日。

道はよく分らないのでまず湖の近くの場所へ戻ってから出発しよう。あそこでレイに西の村を教えてもらったから、そこでレイが指していた方角に向かって歩いていけばそのうち着くはず。だけどあそこまで行くことすら大変だったからなあ・多分4日じゃ着かないね。けど歩くしかないか。自分で生きていくって決めたんだから。

やる気を出して歩き始めると、初めて来たときよりも早くに湖に辿り着いた。もしかして昨日歩いたから体力がついたのかな？それに今日は身体も軽く感じる。元気なうちにさくさくと歩きますか！私は余裕ができたので歌を歌いながら歩き始めた。

「あーるーこー♪あーるーこー♪わたっしはげんき♪」

この歌覚えやすいよね。もちろん映画の方も大好きさ！ちっちゃいトト●を飼いたいと思ったよ。私はト●ロメドレーを歌いながら樹海を歩き続けた。

しばらくは結構平らな道のりだったけど、お昼過ぎくらいから木々の根が地面から飛び出すくらい力強く根付いていたり、大きな石の段差があつたり、地面に苔が生えていたりして扱けそうになつた。さすが樹海だ…。そんな感じでえっちらおっちら歩き続けていたら、辺りが暗くなり始めたので今日は歩くのをここまでにした。夜の森って危ないって言うしね。魔獣が出るかもしれないし。

私は大きめの木の根元に凭れると、持ってきた果物を食べた。うん、甘くてうまい。果物は疲れた身体に染み渡るように私の体力を回復させた。食べ物ってすごいな。

私は果物を食べると早々に寝た。明日も沢山歩くんだから体力を回復させなきゃね。明日筋肉痛になりませんように…。

私は寝ようと思ったけど、やっぱり夜の森は冷えた。登山で遭難した人の一番の死因は確か凍死だった気がする。…私の旅は一日目で終了なのか？あー…さむ。私が両腕で身体を包むと、不思議と身体が温まり始めた。こんなに温まるものなのか？なんかぼーんとして感じに温かいんだよ。そう、レイに包まれている感じ。…もしかしてこれがおまじない効果か！おお…レイありがとよ。おかげで凍死しないで済みそうだね。

私はレイに感謝しながら眠りについた。

一人旅2日目。

たつぷり寝たおかげで全く昨日の疲れも全く出ず、筋肉痛にもならないで朝から絶好調！朝ごはんはバナナを食べて、やる気を出して樹海をもりもり歩いていたら、お昼頃には湖を発見。貴重な水も手に入るし、身体も洗えてスツキリさ！もう服と下着は諦めたヨ…乾かないと動けないし。

湖の周りには、ススキみたいな草が風に揺られて綺麗だった。日の光を沢山受けて、それを吸収しているようにススキもほわほわと光っているように見えた。不思議な光景だなー。

それからは●の谷のナウ●カメドレーを歌って歩いた。あれも良い映画だよ。私もナ●シカみたいにメーヴェに乗りたいな。慣れる前に墜落死しそうだけど。

昨日はぼこぼこした道だったけど、途中から割りと平坦な道になったので歩きやすかった。昨日と同じように暗くなってきた頃に私は足を止め、木の側に座って休んだ。

ふえー、今日もよく歩いたなあ。今までじゃ考えられないくらい歩いてるよ。向こうにいた時は運動もあんまりしてなかったから、

持久走したくらいで筋肉痛になったもんだ。それなのに今はサバイバルしても平気にだからね。おまじない効果か…。

だけどこれってやつぱりチートだよ。レイが『魔獣が居る』って言うってんだけど、私はまだ一度も遭遇してないし。もしかしたらこれもおまじない効果かもしれない。他には何の効果があるんだろう？ちゃんと聞いておけばよかった。

一人旅3日目。

今日も森を歩き続けていると、川を見つけたのでそこで水分補給。体を洗ったけど、川の水が冷たくて気持ちよかった。すっかり自然に順応してきたな自分。川から上がると私は川沿いを歩く事にした。もしかしてこの川に沿っていけば村に着くんじゃないのかなあって思っ。よくあるよねそういうの。文明が発展したのだから川の側の地域だった気がするし。もうあんまり覚えてないけどね。頭は使わないとどんどん衰えていくんだよ…。

まあそんな訳で私は川沿いを歩いていくことにした。この川はとても澄んでいるので、川の生物がちらほら見えた。魚やウーパールーパーみたいな生物や、亀に魚の尻尾が付いたような生物も居た。うーん、ファンタジー！なんか可愛いな。

気分がノってきた私は、今日はもの・け姫メドレーを歌いながら歩いていった。もの・け姫には沢山動物が出てくるけど、私は山犬やヤツクルに乗りたいたいと思った。乗るのがすごく楽しそうだもん。可愛いし。あ、コダマも可愛いよね。頭をカクカクさせるけど、どういう原理なのか知りたい。

辺りが暗くなると、川の近くにある林に入り、そこで休むことにした。今日もよく歩いたなあー。結構頑張ってるから、もしかして明日くらいには村に着くんじゃないかな？よし！明日のためにも早く寝よう。

森が静まっている頃、犬の遠吠えのようなものが聞こえて少し目が覚めた。うつらうつらしていると、小さくガサガサッと音がした。

・・・もしかして、魔獣？えええ！？わたし武器持っていないよ！オロナ●ンCならあるけど、元氣ハツラツにはなっても武器としては小さすぎて役に立たないよ！！

私は念のために自分の荷物に手にとり逃げる準備をしていると・・・やっぱり出てきた！！

うつわ・・・まさにモンスターだ！！木の間から出ている姿を見ると、全体的には狼なんだけど、頭には牛のような角が生えていて、目が赤く光り、牙が少し口からはみ出している。魔獣はこういう強面が普通なのかな...って呑気に考えてる場合じゃない。逃げよ！

荷物を持って走り始めると、魔獣も追いかけてきた。一生懸命走るけど、人間が狼型モンスターの足に敵う訳が無い！！走ってすぐに狼が息をする音がすぐ後ろまで聞こえてきた。

ヤバイこのままじゃ私、食い殺されちゃうよ...。自分で生きるって決めたのにこんな所で野たれ死んでたまるかあ！！もっと働け私の足いいっ！！

そう思っていたら、急に身体が軽くなり、走るスピードも速くなった。え？何で？？

・・・まあいいや後で考えれば。今は逃げることを考えなくちゃ！！

走っている最中に服やバッグが草木に引っかかりたり、枝で身体を傷つけながらもがむしゃらに走り続けると、いつの間にか魔獣は見えなくなっていた。もう大丈夫かな...？魔獣が追ってくるような感じもしないので、私は走るのをやめたがいつ来るか分からない不安に駆られ、森を歩き続けた。服や身体はボロボロだけど、幸いまだ歩くだけの体力は残っていた。

さっきのだけど、やっぱり魔法だよ。だって今まで重かった体が急に風に乗ったみたいに軽くなったし。あれは車並みの速さで走ってたよ。

試しに私は体が軽くなるイメージをしてみた。だって魔法の使い方なんて分かんないもん。イメージしかないっしょ。そしたら…ホントに軽くなった。その場でジャンプしたら、木を突き抜けて空に跳んでいた。

…すげえ!!!これってなんかNAR・TOみたいだ!!私忍者になれるよ!!あー、けど痛いのだし、殺しとかマジ無理だからいいや。同じ忍者だったら忍・ま位がいい。毎日ほのぼのして平和だ。

私はもう一度ジャンプをすると、森を一望した。お!あそこで木が途切れてる!!じゃあもう少し…あ。落ちた。私は着地すると、もう一度確認するためにジャンプした。今度は宙に浮くイメージをしながらジャンプしたら…浮いた。

こ…これは武空術!修行もせずに使えるようになるのかガチでチートだ!!私は周りをよく見渡して、木の途切れている方向を確認すると、ゆっくりと着地した。

レイのおまじない効果すごいな…。有り難い、有り難いけど…!!これは祀り上げられる可能性が増えてしまったんだよ!!!うーん、他の魔人がどの程度できるか分からないけど、私のやる事が魔人以上にすごい事だったらヤバイな。その内ばれるかもしれないけど、極力抑えておこう。私は納得すると、魔法で体を軽くするイメージをしながら歩き始めた。意識して使えば便利だな。他にも色々できるかもしれないけど、私は平和的な魔法だけで十分だよ。

森を歩き続けると、だんだん空が白み始め、私はようやく森から抜け出す事ができた。森の下には遠くに小さな村があるのを発見し

た。

ああ、ようやく村が見えた…。頑張ったんだね私。4日で着くのかよ！！とか思ってたけど、本当に着いちゃった。これで私も頑張った一員になれたよ！

私は森を疲れきっていたが、ふらふらしながら気力で村まで走っていた。いくら魔法で身体を軽くしていても、ずっと歩いていれば疲れは溜まる。それに、早く安全な場所で休みたい。やがて私は無心で村を目指して走り続けた。

着いた…。ようやく…。人の居るところに…。来れた……

朝早いせいか誰も居なかったけど、小さな村まで来て安心した私は、急にどっと疲れが出てその場に倒れた。

第10話：凡人の冒険〜チートへの目醒め〜（後書き）

一応伏字&元ネタ解説

- ・オ●ナミンC - 元氣ハツラツになる栄養ドリンク。
- ・トト● - スタジオ●ブリ作品の『となりのト●ロ』に出てくるキヤラクター。
- ・風の谷●ナウシカ - スタジオジ●リ作品。
- ・ナウ●カ - 上の作品の主人公
- ・も●のけ姫 - スタジオジブ●作品。
- ・NA●UTO - 人気忍者マンガ。
- ・忍た● - ほのぼの忍者マンガ。個人的にアニメの印象の方が強いです。
- ・武空術 - ドラゴン●ールより。空中に浮く術。

はい、雑な説明でごめんなさい。だけど説明無くても分かるものばかりですね。笑

第11話：捨て人間です、誰か拾ってください

「・・・い、おーい、大丈夫かー？」

うー、何だようるさいな。こっちはヘトヘトで疲れて眠いんだ。邪魔しないでくれ。

「おーい、死んでんのか？」

眠ただけで生きてますよー…。あー、すみません。起きるので顔をぺしぺし叩くのをやめてください。

「ん・・・」

「あ、生きてたか」

「どうしたのジャック？」

「ああ、アンヌか。村の前でボロボロの女が倒れてたんだよ」

「まあ！大変じゃない！！彼女は大丈夫なの？」

「一応生きてるぜ」

うつすら目を開くと、二人の男女が私の事を見ている。どうやら村人に発見されたのか。運良いな自分。だけど疲れてるからぶっちゃけ起きたくないんだよね。歩くのもめんどくさいし。あー、この

まま村に運んでくれないかなあー・・・。

「あの、大丈夫ですか？」

栗色の髪をおさげにしている、少しそばかすのある女の子が心配そうに見つめている。北欧系の外人さんだけど普通の人だ。良かった、もう眩しくないよ。外人だから年齢が良く分らないけど、多分10代だろうなあ。有名な魔法学校に居そうな顔だもん。ちなみに私は大家族の双子と不思議電波な女の子が好きさ。あれ？俳優さんたちはもう成人してたっけ？多分主要メンバーはそうなんだろうな。役やって長いからね。

まあ私の外人の年齢見極め技術なんて映画やドラマくらいでしか知らないのさ。

関係ないことを考えてボーっとしていると、アンヌと呼ばれている子は私がよほど重傷だと思ったのかとても有難い事を提案してくれた。

「ジャック、この人を私の家まで運んでくれない？」

「ええー？何でだよ」

「こんなにボロボロな子を放っておくなんて可哀想じゃない！」

お、いいぞアンヌ、そのままジャックとやらの私を家に運ばせるんだ！

「けどこんな容姿のやつなんて今まで見たことねえぞ。それにこんなバッグも見たことねえし。もしかして外国から来たんじゃないのか？」

当たらずとも遠からずかな。外国と言うより異世界から来ました。

次元の壁を越えて君に会いに来ましたよ。なーんつつてな。

「そうかもね。見たこと無い容姿と持ち物、そして今は傷だらけだけど可愛い顔をしているし…」

おいおい私が可愛いとか相当目がイカれているな。是非とも眼科をオススメしたい。だけど多分外国人だからそういう風に見えるんだろっね。私も外国人の小さい子はどんな子でも天使に見えるわ。にやけが止まらない。傍から見たら変質者だけどね。

アンヌは神妙な面持ちで考えていたが、分かった！という感じにぱつと顔を上げた。

「きつと外国の貴族様なんだわ！」

「はあ?!」

どうしてそこに辿り着くんだ。私とジャックが眉間に皺を寄せてアンを見ていると、アンヌは熱を込めて語り始めた。

「国が襲われ、家族は命の危険に晒されながらも、『せめてこの子だけでも逃がさなければ…!!』と、家族が彼女を村娘に扮装させて国から逃がすのよ。そしてこの子が一人必死に逃げている最中に野党か魔獣に襲われながらも家族のためにも何とか生き延びてようやくこの村に辿り着いたのよ！」

…なんだその設定。そこまで細かに設定付けられるとは、この子もなかなか妄想・想像力豊かだな。熱く語り一人納得しているアンヌを、ジャックは呆れたように見ていた。

「それなら余計にやつかいじゃねーか。逃がしたって事は罪人の可能性だってあるだろ。外国の罪人を匿っていることがばれたらオレ

達も共犯だと思われろんだぜ」

ジャックは顔をしかめて明らかに嫌そうにアンヌを見た。ごもつともです、ジャック君。私が倒れている人を見つけても、素通りするか警察が救急車を呼ぶだけで、その後の事には係わりたくないです。

「そうじゃなかったらきつと物珍しいから外国から売り飛ばされっ
てしまった子よ。可哀相に…」

そういうパターンもありましたか…。アンヌは薄目で白けている私を見ると、意識が飛びかけているように見えたのか、同情した目で私を見ると、ジャックに向き直った。

「どちらにしてもまだ生きているって事は、きっとジース様のお導
きよ」

「…じゃあお前最後まで面倒見ろよ」

「もちろんよ！」

アンヌ、よく頑張った。なんかよく知らないけど神らしき者の導
きで私は拾われたのね。この子が信心深くて助かったわ。ジャック
は深い溜息を吐くと私を背負い、アンヌ家へと連れて行ってくれた。
結局きみも面倒見いいんだね。

私がジャックの背中の上でしばらくぐったりしていると、アンヌの
家に着いた。

「ただいま」

家の中に割腹の良い赤茶色の髪の毛のおばさんが料理を作ってい
た。多分アンヌのお母さんだろう。台所にガスコンロや水道とはち

よつと違うけど、火も水も使っている。あれも魔法かなあ？仕組みが気になる。

「おかえりアンヌ…てどうしたんだい？！その子」

「ジャックが村の前で見つけたの。それで余りにも可哀相だから私の家に運んできてもらったのよ」

「それにしても、ずいぶんボロボロだねえ」

「きつと国を追われた外国の貴族様なのよ。必死で逃げてきたから怪我しちゃったんだと思う」

そっちの設定だったのか。そんなの信じられる訳ないと思うんだけどなー。

「まあ・・・可哀想に」

…簡単に信じちゃいますか。さすが親子だね。

「けどまだ貴族って決まったわけじゃねえだろ」

「そうだけど、とりあえずジャックはこの人を私のベッドに連れてって」

「・・・わかったよ」

「お母さんは何か食べやすいものを作ってくれる？」

「はいよ」

アンヌはてきぱきと仕切ると、私を自分のベッドに寝かしてくれた。とりあえずお礼を言わなくちゃね。アンヌが立ち上がった時に、私は小声だけとお礼を言った。

「・・・ありがとうございます」

アンヌは一瞬目を見開いて驚くと、はじけるような笑顔を私にくれた。うん、女の子は笑顔が一番だ。

その後アンヌは部屋を出ると、水桶と布を持ってきて、私の顔や身体に付いている汚れを拭いてくれた。大体の汚れが取れると、アンヌは何かをぶつぶつ言い始めた。…もしかして私が汚すぎたとか？ごめんよ汚くて。

ぶつぶつを言い終わると、アンヌの手がぼわーんと淡く光り始め、その光りを私の手の甲にある切り傷に当てた。これ…魔法だね。前にレイが似たようなことやってくれたもん。

予想通り傷口はどんどん塞がっていき、最初よりも小さくなった。やっぱり魔法って便利だ。地球の最新医療技術なんて齒が立たないよ。ふうっとアンヌは一息吐くと、苦笑しながら私に謝った。何で？

「ごめんなさい、まだ私にはこれくらいしか出来ないんです。やっぱり回復魔法は難しいですね」

…あー、傷口を完全に治していないから謝ってんのね。いやいや塞いでくれただけでもありがたいっす。

「お気持ちだけでも嬉しいです。手当てまでしてもらって有難うございます」

私が笑顔でお礼を言うと、アンヌはぽかーんとしていた。一応礼儀正しく言ってみたつもりだけど、敬語の使い方が間違ってたかな？昨今の若者は言葉が乱れてるからなあー。私もその一員さ！

「あの…」

「あ、何でもないです！ほ、他の傷も治しましょうか！」

「ありがとうございます」

アンヌは顔を赤くして慌てて手当ての続きを始めた。そんなにぽかーんってしてたのが恥ずかしかったのか。面白い子だな。

そんな感じで傷の手当をしていると、アンヌのお母さんが食事を持ってきてくれた。ほんと至れ尽くせりで申し訳ないっす。

「あの、起きられますか？」

「はい・・・」

よっこらせーっと！・・・ああ、節々が痛いよ。昨日は長距離全力疾走したからね。いくら魔法で身体を軽くしていたとはいえ、疲れたしだるい。打撲やら切り傷もキツいっす。アンヌは私が起き上げるのを支えてくれた。きつとアンヌは看護師や介護士とかが似合うよ。

「私はアンヌ。アンヌ・ラウムです。こっちは私のお母さんの力カ
ンヌで、こっちの男の子がジャック・リール。あなたを見つけて運
んでくれた人です」

「どうもありがとうございます」

「別にいいよ」

私はジャックにお礼を言ったが、ジャックはふんっ、と無愛想に返してきた。そういうお年頃なのかな？アンヌは私の事を貴族だと勘違いしているので、丁寧に話してきた。

「あなたが村の外で倒れているのを見つけたので、私の家に連れて
きました。傷だらけでしたけど、大丈夫ですか？」

「はい、アンヌさんたちのおかげで少し楽になりました。見ず知ら
ずの私に、ここまで親切にして下さって本当に感謝しています。あ
なた方に発見されていなかったら、きつと惨めに野たれ死んでいた
と思います。助けてくださって有り難うございます」

私は笑顔でお礼をいうと、アン又達は嬉しそうに微笑んでくれた。ほんわかしているとそれを見守っていた力カン又さんが近づいてきた。

「とりあえず話はここまでで良いだろ？この子も今まで倒れていたんだから疲れているだろうに。アン又も回復魔法を使って疲れてるだろう？」

「そうね」

「ごめんなさい…」

魔法ってやっぱり使うと疲れるのか。私なんかのために申し訳ない。MP回復アイテムをあげたいけど、残念ながら持ってないんだ。謝ると力カン又さんは苦笑した。

「気にしないで良いんですよ。この子がやりたくてした事なんですから」

「しかし…」

「それよりお腹空かしていると思ってとりあえずご飯を作ったんですが、食べられますかね？」

力カン又さんは私に気を使ったのか、話を逸らした。

「はい、大丈夫です。本当に何から何まで申し訳ありません」

「何言ってるんですか！困った時はお互い様ですよ。早く元気になり下さいな」

「ありがとうございます・・・」

「じゃあ食べ終わったらその棚の上に置いてゆっくり休んで下さいね」

「はい」

そう言ってアンヌ達は静かに部屋を出て行った。

さっきまで都合の良いことばかり言ってごめんなさい。自分の力で生きていくって決めたのに、やっぱり私は生かされている。ううん、この人達の場合は助けられた、の方が近いかな。私だったらジヤックみたいな反応をしてしまうと思う。見ず知らずの人にこんな風に優しくできないよ。

カカンヌさんの作ったリゾットみたいなものを食べると、身も心も満たされた。

よし、早く元気になって彼女たちに恩返しをしよう。それが今の私の目標だ。私は食べ終わると目標を達成すべく、静かに休み始めた。

第11話：捨て人間です、誰か拾ってください（後書き）

一応元ネタ解説

- ・有名な魔法学校 - 丸眼鏡をかけて額にイナズマ形の傷跡を持った少年の通う学校
- ・大家族の双子 - 上の少年の親友の家族
- ・不思議電波な女の子 - 上の少年の学校の生徒

他にもありますが、別にネタが分からなくても差し障り無いので解説なしです。笑

第12話：真実はオブラートの中に

目が覚めると、もう日が落ちていて星が輝き始めていた。結構寝たな。おかげで身体もだいぶ楽になったよ。

私が起き上がったって伸びをしていると、ドアのノックオンが聞こえた。

「はい」

「アンヌですけど、入ってもいいですか？」

「どうぞお入り下さい」

「よつと！」

ドアが開いたと思ったら、薄い赤茶の髪色をしたクセ毛の男の子が元気良く入ってきた。

「あ、こらー！」

「いいじゃん僕だって気になってたんだから」

「けどねー、彼女は怪我人なのよ！あなたみたいに煩かったら気が休まらないでしょ！」

その光景に思わず笑みがこぼれた。微笑ましいなあこついうの。一人っ子だからこついう兄妹喧嘩みたいなのは少し羨ましい。

「私は構いませんよ」

「ほらね！姉ちゃんは頭が固いんだよ」

「ロン！」

ロンかー。魔法を使う世界だから、やっぱり丸眼鏡をかけた有名な男の子の親友を思い出しちゃうよ。この子の名字がウィーズリー

じゃないのが残念だ。あー映画全部見切れてないなあ。最後までやってまとめるのか気になるぜー。

「なんだい騒がしくして！怪我人に迷惑が掛かるじゃないか」
「そうだぞ、静かにしなさい」

プリプリ怒る力カン又さんと栗色で短髪の男性が二人を注意しながら入ってきた。

「あ、お父さんお母さん」
「おや、起きてたんですね。身体の方は大丈夫なんですかい？」
「はい、おかげ様で随分回復しました。有り難うございます」
「さっきも言っただじゃないですか！困った時はお互い様なんだから気にしないで下さいよ」

明るく笑う力カン又さんの言葉が心に沁みた。そしてこの主人であろう男性が私に向かって笑顔で近づいてきた。

「初めまして、ラウム家の主人のダンです」
「初めまして」

ゆっくりと差し出されたダンさんの手を握り握手をした。ダンさんの手にはマメができていて、節くれだって遅しい手だった。素朴な感じでよく日焼けもしているから、きっと畑仕事でもしているんだろうな。平和な村だし。ダンさんは椅子を持ってくると、私の前に置き、そこに座った。

「体調が良くなったようですし、あなたの事を聞かせてもらってもいいですか？」
「はい」

皆の視線を浴びながら、私はベッドの上で皆の方に向き直ると自己紹介をした。

「私の名前は沙恵・天野です。今まで名乗らずにいて申し訳ありませんでした」

一応名前、名字の順番にしておいた。皆そうだし、その事で大分怪しまれるのも…ねえ？

「いいよ気にしなくて。えーと、サーイエ・アマーノウで良いのかな？」

「サエ・アマノです」

「サー…イエ？」

「アマノオ？」

皆頑張つて言おうとしているが、なかなか言えない。うーん、やっぱり発音が難しいのかな？私は思わず苦笑がもれた。仕方ないか、外人さんだし。

「サーイエで構いません。好きにお呼び下さい。それから私に氣を使って喋らなくて結構ですよ」

「すまないねえ。あたしたちはあんまりそういうのに縁が無いから喋りづらいんだよ。それでサーイエはどうしてボロボロで村の側に居たんだい？」

まずそこからですよー。さあ、どうしよう？うーむ、本当の事を話そうかな…。けどレイは異世界に来たのは私が初めてって言うてたし、多分異世界から来たなんて言ったらややこしくなると思う。

信じてもらえず頭がイカれていると思われるか、特別な存在だと思われる祀り上げられる可能性もある。

信じてもらえないのは悲しいが、祀り上げられるのはマジ勘弁だわ。平穏生活が出来なくなる。それだけは絶対に阻止せねば！どここんなに親切にしてくれた人達に嘘つくのも心が痛むし……。うーん難しいなあ。

私が黙って考えあぐねていると、アン又が心配してくれた。

「サーイエ、大丈夫？もしかして何か辛いことがあったの？」

「あ、大丈夫です。私自身も混乱しているので、どう説明すればいいのか考えていただけです……」

「サーイエ……」

うん、嘘は言っていない。じゃあもうこれで行くしかない。定番の記憶喪失設定！

分からない事があつたら『知らない』『覚えていない』『分からない』で通るからな！そしてそれは今の私にとってあながち嘘ではない。実際何も知らないからね。けどこの人達に嘘を吐くのは良心が痛むので、嘘は吐かない。だけど全て話さない。それがお互いにとって一番安全なんだよ。名づけて『オブラートで包みまくってクスリ苦くないよ！』作戦！！

私は意を決すると、皆がだいぶ心配して私を見ていた。ちょっと考える時間が掛かりすぎたね。

「無理しなくてもいいんだよ？辛いのなら私たちも無理して聞くことはしたくないし……」

「いえ、大丈夫です。皆さんにはお話しておきたいので。ただ……私も（この世界の事は）よく分からない事が多いので、そこはご理解下さい」

「分かったわ」

よし、作戦開始！！！！

「私は、気が付いたらあの森の中にいたのです」

「あの森って、【護神の森】ごしんのもりにかい？！」

私の一言にラウム家の皆さんは一斉に驚いた。…そんなにまずいこと言ったのか？ていうかあそこをレイは神聖樹海って言うてなかったっけ？

「…そう、呼ばれているのですか？」

「ああ。とても深い森でね、最深部にある神聖樹海を守るように広がっているから、そう呼ばれているんだ。あそこの魔獣は強力で、森に侵入した者を片っ端から食い尽くすとそうだ。そこから生還できるなんて…アンタすごいな」

「そうなのですか…」

ダンさんに褒められて正直困った。あそこってそんなにすごい所だったのか！レイが周りに森が広がっているって言うてたけど、それは護神の森の事を言っていたのね。確かに魔獣に食い殺されるとも言っていたけど、そんな強力な魔物が住んでいたとは…。よく生きて森を出てこれたな私！！きつとこれもレイのおまじない効果だね！

「けど何であそこに？」

「分かりません…。目覚めたらあそこに居たのです。そこで魔物に襲われて無我夢中で逃げていたら…ここに辿り着きました。それでようやく森から脱出することが出来て、村が見えた事に安堵して倒れてしまったんだと思います」

「そうか…。じゃあ故郷や家族の事は覚えているかい？」

「…家族と故郷（の事は覚えているけど、そこに戻れるかという事も分かりません）」

今でも今まで自分の居た世界の事を思い出すと、何とも言えない気分になる。もうこの世界で行きたく事を決めたから思い出すのが辛いつて訳じゃないけど、やっぱり寂しいと思うのは仕方ないよね。

そんな私の言葉にラウム家の皆さんは同情していた。あー、多分アンヌの設定を信じているんだろうなあ…。

「そうかい…。辛いことを聞いてすまなかったね」

「いえ、気にしないで下さい」

私が苦笑して答えると、なんだかカカンヌさんに余計複雑そうな顔をされた。だから私はそこまでの小公女じゃありませんよー。

「じゃあ、自分の年齢は分かるかい？」

「……………」

私は黙って俯いた。ここは実年齢言っちゃいけないと思う。レイが魔人は人間より長生きするって言うていたから、実年齢を言ったら人間だという事がすぐに分かってしまう。いくら人種差別が軟化しているとはいえ、この人達が人間を嫌っていたらすぐに追い出されてしまう。また黙った私を見てダンさんは苦笑していた。

「覚えてないみたいだね…」

「…ごめんなさい（言いたくないんです）」

「いや、良いよ気にしないで。見た目からだと…」

どうせ若く見られるんだろう。それが西洋人と東洋人の違いさ。

「多分サーイエは50代だろう」

…はい？え、私なんか聞き間違えた？私は思わずそのまま固まった。普通外国（北欧系）にトリップしたら若く見られるんじゃないや、落ち着け私。ここは異世界、しかも魔人は長生きなんだから動揺するな！！

私は何とか不思議そうな顔を装い、ダンさんを見つめた。

「そう…なのでしょうか？」

「多分ね。ちなみにアンは今72歳で、ロンは32歳だ」

「そうですか…」

えー…私の外人年齢極め技術はかなり未熟ですが、大体の予想だとアンの外見年齢は17、8歳位で、ロン君は10歳位かなあ…。それで私は二人の中間位だから…13、14歳位か？それならまあ若く見られているな。多分まだ私は子供だと思われるから、子ども設定も付け加えておかなきゃね。だけど子供とはいえ、恩を返さないのはいけないと思う。というか私の気がすまない。

「あの、ダンさん」

「うん？なんだい」

「私に、恩返しをさせて頂けませんか？」

「恩返し？」

みんな訳が分からないという顔をしている。…そんなもんなのかな？とりあえず自分の気持ちを伝えなくちゃ！

「私は、家族と故郷（の所に戻る方法）が分からないので戻ることもできません。森で魔獣に襲われた時、私はあそこで死んでしまう

のではないかと思いました。しかし私は生きて森から出ることが出来、運よくジャックさんに発見されてラウム家の方々が手厚く看護して下さいました。このまま何もせずに出て行くのは忍びありません。お金はありませんが、私にできる事なら何でも致します」

私は深く頭を下げた。絶対に、恩は返さなくちゃ。頭の上からダンさんの困ったような声が聞こえる。うーん、ダメかな…。

「サーイエ、顔を上げてくれ」
「・・・はい」

ダンさんは苦笑していたけど、優しい声で諭すように話してくれた。

「私達は別に見返りが欲しくて君を助けたんじゃないよ」
「・・・」

「助けたかったから助けたんだ。だから恩返しなんて考えなくていいんだよ」

「しかし、それでは私の気がすみません！」
「けど特にして欲しい事も無いしなあー・・・」

ダンさんは困ったように頭を掻いていた。私は助けてくれた人にとただのお礼だけで済ませたくないんだ。それとも、こういう事が逆に迷惑なのかな…。

「・・・では、ご迷惑にならないよう、明日にはこの家から出て行きます」

「アンタ何言ってるんだい！そんな身体じゃどこにも行けないだろう」
「しかし、いつまでもここに居たら皆さんにご迷惑を掛けてしまします」

恩を返したいのに、何もできない、迷惑を掛けるだけの存在はもう嫌だ。私が俯いていると、ロン君の明るく提案した。

「サーイエがここに住みこみで働けば良いじゃん！」

「え？」

「ああ！良い考えじゃないか、ロン」

「いいわねそれ！」

「ロンもたまには良いこと思いつくじゃないか！」

「へへへ〜ん！」

なんかラウム家の方々は明るく話し合っているけど・・・いいのか？

「しかし私が居たら、皆さんの負担になってしまうのでは・・・」

「私達は君が居ることを迷惑に思っていないさ、なあ？」

ダンさんが家族に尋ねると、皆快く同意した。

「うん！」

「もちろんよ！それに一人妹が増えたみたいで嬉しいわ」

「そうだね、歓迎するよ」

「君は帰る所もないなら丁度良いじゃないか。家族や故郷が分からないなら、これからはここを君の家にして生活すれば良い」

皆さん…

「建て前は私達の生活の手伝いをする、それが恩返しじゃダメかい？」

なんて優しい人達だろう。なんで得体の知れない私にこんなに優しくしてくれるんだろう？この世界の人はみんな優しいのかな？それとも私の運が良いだけ？どちらにしろ、この人達が良い人ってことには変わらない。

「どうだい？サーイエ」

ダンさんの朗らかな笑みに、私も釣られて笑顔になった。

「はい・・・」

「じゃあこれからよろしく、サーイエ」

「よろしく」

「よろしくね」

「よろしくー！」

「はい、よろしくお願いします！」

私は涙を堪えてラウム家の方々にお礼を言った。そしてラウム家の方々と和やかな雰囲気を感じていて、カカンヌさんに提案された。

「じゃあ早速だけど、その喋り方をやめてくれないかい？」

「え？」

「さっきも言ったけど、私達はそういう喋り方に慣れてなくてね。家の中でもそんな喋り方は堅っかしいし、あんたも疲れるだろう？」

その事には全員賛成のようだ。

「これから一緒に暮らしていくんなら、気を使わないよ」

「はい、分かりました」

「『分かった』だろ？」

「・・・うん、わかった」

「それで良いのさ」

カカン又さんの明るく大らかな笑顔はすごく安心する。

「じゃあ今日はもう休みな。明日体調が良いようなら、簡単な事から手伝っておくれ」

「うん」

「じゃあおやすみー！」

「おやすみ」

「おやすみ。ちゃんと休むんだよ」

「うん、おやすみなさい」

パタンとドアが閉まり、アン又以外の人は全員出て行った。皆が部屋から出ていった後も私の心は温かかった。こんな人達と生活することが出来るなんて、私は本当に幸せ者だ。これもレイのおかげなのかな？そうだとしたら感謝してもしきれないよ。また会ったら沢山ありがとうと言おう。

部屋に残ったアン又の方を見ると、アン又は自分の押入れから、服を取り出し私に差し出してくれた。

「これ、私が4、50代の時に着てた服なの。お古で悪いんだけど、これ良かったら使ってね」

そうだよ。私の身長は162cmだけど、アン又の身長は私より10cm以上高いから今の服は貸せないよね。アン又がくれた服は、ベージュが基調の地味な色合いの服で、シンプルだけど女の子らしい服だった。これ重ね着したら大分可愛くなるだろうなあ！。

まあそのほかの服がないから無理だけどね。

「ありがとねアンヌ」

「良いのよ。こっちが下着ね、はい」

私がアンヌにお礼を言うと、アンヌは私に下着を渡してくれた。
…が、パンツしかない。しかもかぼちゃパンツ。超シンプルなかぼ
ちゃパンツ。まさにお前こそがかぼちゃパンツみたいなかぼちゃパ
ンツ。

おいおいこれじゃあブルマの方が下着としては活用的だよ。あー、
けどちび●るちゃんの体操着はこんなブルマだったかも。だけど
かぼちゃパンツってさ…お尻垂れない？

実際穿いた事無いから何とも言えないけど、私の知ってるかぼち
やパンツは普通のパンツの上に穿くものだと思うんだけど。ほら、
メイド喫茶のメイドさんとか、ゴス系な感じの子がスカート下に穿
いてるようなやつだよ。それをダイレクトに…うーん、だけど中世
のヨーロッパの女性の下着は半ズボンくらいの長さのやつだったか
ら、まあそれに比べればマシか。それにしても…

「下着ってこれで全部？」

「うんそうよ。足りなかった？」

「え、ううん。こんなにたくさん貰っちゃって悪いかなあって思っ
て…」

「良いのよもう着ないし」

アンヌはニコニコして答えてくれたけど、私は苦笑いしか出来な
かった。

だって…ブラが無いんだもん！ヌーブラどころかノーブラだよ！
ブラが無いとかそれこそ乳が垂れる！！まだ若いのに垂れたくない
！！！！

…仕方ない、もうこれは洗濯の仕方を聞いて、自分でこつそり洗おう。

私はばれない様に溜息を吐くと、明日のお手伝いに備えて基、現実逃避のため早く寝た。

第12話：真実はオブラートの中に（後書き）

一応元ネタ解説

・ちびま●こちゃん - 静岡県出身でおかつぱ頭の小学3年生。

基本的にシャネウイグの人達は大きいです。

成人女性の平均身長は175?。成人男性は185?です。

第13話：村デビュー

「サーイエ、朝よー・・・」
「うー・・・」

アンヌの眠そうな目覚ましを聞いて私は起きた。くうあく眠い。アンヌはパジャマから服に着替え始めたけど、私は恥ずかしいから…とか言ってアンヌに先に行ってもらった。

だってブラとパンツを見られたらヤバイでしょ。ここに無い下着だし。結局普段の下着の上にかぼちゃパンツを履いた。あー、それにしてもかぼちゃパンツにブラを着けた姿って…何だかまぬけっぽいな。

まあとりあえず身体も快調だし、皆にお世話になったんだから気を取り直してお手伝いに行きますか！

「おはようございます！」

私が元気良く台所に行くと、すでにアンヌとカカンヌさんが朝食の準備をしていた。

「おはよう」

「おはようサーイエ、身体はもう良いのかい？」

「はい！あ・うん、おかげですっかり元気になったよ、ありがとうねカカンヌさん」

「いいいいいよ。それじゃあ早く起きてきたんだし、朝食の準備を手伝ってくれるかい？」

「うん！」

「じゃあこの野菜を切ってサラダを作っておくれよ」

「うん」

私はカカンヌさんに頼まれて野菜を切ることになったが…名前が分からない。

見た目はキャベツ、ニンジン、トマト、タマネギなんだけど、前にリンゴそっくりの果物の名前が『リンゴー』だったから、きっとこの野菜たちも形は似ているけど違う名前なんだろうな…。

うーん、今聞いておいたほうが後々役立つよね。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って言っし。またオブラート（以下略）で色んな事を教えてもらおう。

「あの・・カカンヌさん」

「なんだいサーイエ？」

「この野菜の名前、何て言うの？」

「はあ?!」

「ええっ?!?!」

アンヌとカカンヌさんは自分の作業を止めて、私を見て目を見開いて大きく口を開けていて固まっていた。…そこまで驚かなくても良いのに。

だけどこんな顔リアルに見たのは初めてだよ。少し面白い…と、そんな事考えてないで言い訳しなくちゃね。

「覚えて（ないと言うか知ら）ないんだ…」

「……………」

「家族の事や故郷の事は思い出せるんだけど、他の（というよりこの世界の）物が一切分からないの…」

嘘は言っていないぞ、嘘は。ただ全部言っていないだけで、言い方を少し変えただけさ！

「そうかい・・・」

「うん、言ってなくてごめんなさい。昨日言った『混乱している』っていうのはこの事だったの。と言えば分からなくて…。だけど、ここ（の世界）で生活していくんだから、色んな事を知りたいの。面倒かもしれないけど、私に生活に必要な事は教えてください！」

アンヌとカカンヌさんは私を哀れむように見つめ返した。

「そうだね、記憶が無いなら仕方ないね。きっと怖い目に遭って記憶が飛んじやったんだろう。私達に出来ることなら何でも手伝うから、遠慮せずに聞きな！皆にも言っておくからさ」

「私も手伝うわ！今日はサーイエのために色んな事を教えてあげる！」

カカンヌさんは優しい笑顔で私の頭をくしゃくしゃと撫で、アンヌは笑顔で賛同してくれた。嬉しいんだけどなんだか少し複雑な気分だよ…。自分の中で嘘は吐いてないんだけどね、ただ（）の中に色々隠れているだけでありまして…。

「ありがとう、二人とも・・・」

「いいよいよ。それよりまず野菜の名前だね。右からキャベツ、ニンジニ、マトマ、タマギネだよ」

「…分かった」

うわーお・・・、やっぱりそんなに名前は変わらなかったよ。

キャベツ〃キャベツ、ニンジニ〃ニンジン、マトマ〃マトマ、タマギネ〃タマネギ…でした。この調子ならすぐに覚えられそうですよ。だけど『沙恵』は言えないのに、ニンジニが言えるのが不思議だな。そっちの言いにくいわ。

私の居た世界にもあったもの、包丁や皿とかは同じだった。おそらく前の世界に無い物の名前が違うんだろう。それなら結構楽だね。二人の食材講座を聞いていたけど、その間に二人は朝食を作り終えていた。すごいな二人とも。私は戦力外だよ。

ダンさんとロン君が起きてくると、皆で朝食を食べ始めた。

うん、やっぱりカカンヌさんのご飯は美味しいな。お袋の味って感じがするからすごく心がほかほかするよ。

ちなみにうちのお袋の味は砂糖入りの卵焼き。いつも朝ごはんとお弁当に必ず入ってる。お手軽で弁当の場所を埋めるには最適なんだとか。別に良いんだけどね。ただ何となく理由は聞きたくなかったな！

食事の最中にダンさんとロン君に事情を話したら、二人とも私に色々な事を教えてくれる事を快く承諾してくれたので、私は片づけが終わったらアニーとロン君と一緒に村を案内してもらおう事にした。まだこの村、世界の事を全然知らないから、少しでも知識を増やさなきゃ平穏生活は出来ないからね。早くこの村の一員になりたいな。

「サーイエ！こっちこっち！！」

「わぁ！つとと」

「こらロン！そんなに引つ張ったらサーイエが扱けちゃうでしょ！」

「うん、知ってる」

「わざとか！！」

アハハと楽しそうにロン君に引つ張られながら、アンヌの村紹介が始まった。

「まずこの村はね、【イセア】って言うの。首都の【ライログリア】から大分離れた田舎なの。村人は40人くらいでホント少ないけど、とても平和で良い所よ」

「田舎過ぎてほとんど誰も来ないけどね」

「そうなの？」

「ええ。だからこの人は国の情勢や、流行とかに疎いのよ。情報が入るのは主に農作物を売りに行く時や、商人が来たときくらいかな」

「へえー」

「だけど私はこの村が好きよ。自然豊かで平和なもの」
「うん」

私もそう思う。村は夢で見た通り、中世ヨーロッパの世界観が出ていた。生い茂る森に、どこまでも続いていくような緑の平原、数は少ないけど連なる石造りの家々。それぞれの家に綺麗な宝石のような物がはめ込まれているので、ファンタジーの世界だなぁって思った。

緑の多いこの村は自然と共存している感じがする。雰囲気的にはイギリスに近いかな？イギリスの田舎に住んでみたいと思っていたけど、こんな形で似たような事が実現するとは思ってもいなかったな。

「それにここは護神の森の麓にあるから、おいしい農作物が良く取れるのよ」

「護神の森が近いのと農作物に何があるの？」

「うん。昨日お父さんも言っていたけど、護神の森の奥にはね、神聖樹海と呼ばれている場所があるの。そこにあるオルガっていう樹がメージを作り、世界を支えていると言われているわ。だから護神の森の近くにあるこの村は、メージが豊富だから良い農作物が取れるの」

「そうなんだ…」

メージは野菜の肥料にもなっていたのか…。だから樹海の果物も美味しかったんだね。

「ねえねえアンヌ。質問なんだけど、イセアは良質な農作物が取れるのにどうしてこんなに村が小さいの？沢山のメージがあるなら、もっと人口が増えてもおかしくないと思うんだけど…」

「普通はそうだと思うんだけど、この村は危険なのよ」

「危険？」

「うん。昨日もお父さんが言っていたけど、護神の森は神聖樹海を守るように出来ているのよ。昔はこの辺りを首都にしようとしたらしいけど、町が活性化し始めると森の魔獣が人を襲うようになったの。多分、人が住むことによって自分たちの住処が奪われると思って襲うようになったんじゃないかって言われているわ。それでここにはほとんど住む人が居なくなり、小さくて少人数の村になったの」

「へえ、そうなんだ…」

あの魔獣さん達か。森を守るため・…ていうか、生きるために人を食い散らかしていたのね。そりゃそうか。それが自然の摂理だし。君たちの住処に入ってすまなかった、だがわざとじゃないんだよ。分かっておくれ。

「だからサーイエが森から来たって言うからびっくりしたのよ。私、初めて森から生還した人に会ったわ！」

「僕も僕も！」

「あー、そうなのね。だけどアンヌ、私が森から生還したって事をあまり言わないでね」

「え、どうして？」

「その…そんなすごい森から出てきたなんて言ったら、きっと珍しがられて色々聞かれるんじゃないかなって思つて。私、記憶が無い（つて言うより何も知らない）のに聞かれても困るし…」

何よりそれが崇められる要素になりかねないからな！！！それじやあせつかくの平穩ライフが台無しだよ！私が俯いて悲しそうな顔をしたら、アンヌは苦笑をして頷いてくれた。良かった…。

私達の住む住宅地を出て、次の住宅地に行く途中に村人に遭遇。どうやら畑仕事に出かけるようだった。

「やあ、アンヌ、ロン」

「おはよう、フェズおじさん、ルエおじさん、シャイクさん」

「ああ、おはよう。あれ？その子の…」

「少し、変わった容姿をいているね」

「ああ、今まで見たこと無いな」

みんな不思議そうに私を見ている。…気まずいな。

「この子はサーイエよ。昨日倒れているのを見つけて、ジャックに運んでもらったのよ。ジャックから聞いてない？」

「あー、聞いた聞いた！へえー、この子だったのか」

一人のおじさんが納得したようにこつちを見てきた。…とりあえず笑っておけ。笑っておけばなんとかなる。

「初めまして。私はサーイエ・アマーノウと申します。今日からラウム家に住まわせて頂く事になりましたので、どうぞこれからよろ

しく願います」

私は栄業スマイル（・・・とは言っても実際栄業したことないけど）で挨拶すると、おじさん達にぽかーんってされた。昨日アンヌ達にも同じ事されたな。うーん、この喋りがいけないのかな？

「あの…」

「ん、ああ！すまない。昨日ジャックが、アンヌが拾った人の事を勝手に貴族だって呼んでるって言ってたけど…髪の毛が赤いし、もしかしたら王族なんじゃないか？」

「え？」

巫女じゃなくて王族設定ですか？何そのＴ・Ａみたいな設定。

「ダン達はどう言っているんだ？」

「お父さんもお母さんも、何も分からないなら家にいれば良いって言っていたわ」

「そうか…」

スマートなおじさんも真面目にアンヌに問いかけた。

「本当に、この子は大丈夫なのかい？」

「ええ、大丈夫！サーイエはきっと外国人なのよ！外国じゃあれが当たり前なのかもしれないわ」

アンヌの何故か自信満々な意見におじさんは溜息を吐いた。

「分かったよ。ラウム家はお人好しでこういう事には何を言っても聞かないしな」

「・・・確かに」

「そうだね」

おじさん達は小さく笑い始めた。やっぱりラウム家は特別お人好しなんだね。

「とりあえずヤン婆ばあの所には行きな」

「うん！わかった」

アンヌは明るい笑顔を返すと、私におじさん達を説明してくれた。

「サーイエ、この人はフェズおじさん。あなたを運んでくれたジャックのお父さんよ」

「はじめまして」

「ああ」

茶髪の髪を中肉中背のおじさんが声を掛けてくれた。私はそれを笑顔だけで返した。フェズさんは目がジャック君に似てるかな。

「それでこっちがルエおじさんで、私の友達のミーナのお父さん」
「はじめまして」

次に薄い金髪の背の高いスマートなおじさん。きっとミーナは可愛い子なんだろうな。

「ミーナには後で会わせるわね。それでこの人はシャイクさん。私の家のお向かいさん」
「よろしく」

アッシュがかった茶髪の男性がお向かいさんね。二人に比べて若いシャイクさんを『おじさん』と呼んでいないから、多分そんなに

年はとつてないんだろうな。

「サーイエはどこから来たんだい？」

「それは分からないの。サーイエは記憶が無いから」

「そうなのかい？」

「はい、残念ながら……。しかし、ラウム家の方たちが温かく迎えてくださったので、私は辛くありませんし、彼らのご厚意を本当に有り難く感じています」

残念どころかむしろ私は幸せ者だよ。ほんとラウム家の方々には頭が上がらない。おじさん達は微笑むと、優しい言葉を掛けてくれた。

「記憶が無くて大変だろうが、これからは頑張れ」

「俺たちも力になるから、困ったことがあったら何時でも言いな！」

「他の村人にも言うておくよ。新しい村人が増えたって。きっと皆喜ぶよ」

「はい、皆さん有り難うございます」

田舎の人達って本当に素朴で、他人に対しての思いやりが他の地域に比べて強いと思う。きっと村人の人数が少ないから、この村全体が家族みたいな気持ちなんだろうね。いいな、そういうの。

「だけど、その喋り方は村の中でしないほうがいいと思うぞ」

「そうだな」

「確かに」

「え？何故ですか」

「「「こんな田舎だとみんな貴族だと勘違いするから」」」

おじさん達の息ピッタリの言葉に、私達は大声で笑った。

第13話：村デビュー（後書き）

しばらく村紹介が続きます。

第14話：嫌じゃない疲労

おじさん達と別れると私達は再び次の団地に向かい歩き始めた。村の住人は少ないけど、広範囲にぼつぼつと家が固まっているので全部の家に行くのには時間が掛かるみたい。だけど私が分からない事や村の話を聞いていたので全然苦にならなかった。

私達の住んでいる団地から歩いて約10分、ようやく次の団地に着いた。この団地にはさつき会ったおじさんの娘のミーナって子とジャック君が住んでいるらしい。

「ミーナー！」

アンヌが洗濯物を干している子と呼ぶと、私達に気づいた女の子は穏やかな笑顔で迎えてくれた。

「おはようアンヌ、ロン。この子は？」

「紹介するね！この子はサーイエ。今日から家に住むことになったの」

「まあ、そうなの。初めまして、ミーナです。アンとロンの友達よ」

金髪で少し垂れ目が印象的なミーナは、少しおっとりとした口調で自己紹介をしてくれた。

「はじめまして。ラウム家で暮らさせてもらっ事になったので、これからよろしくお願いします」

「ええ、よろしくね。だけど、どうしてアンの家で暮らす事になったの？」

ミーナは不思議そうにゆっくりと頭を傾げた。

「昨日サーイエが村の近くで倒れているを見つけたから家で看病したんだけど、サーイエは記憶もあやふやだし、帰る場所が無いから家で一緒に暮らす事にしたんだ」

「まあ、そうだったの…大変ね。私にもできる事があつたらいつでも言つてね？」

「うん、ありがとね。色々分からない事があつたら教えて欲しいのもあるけど、仲良くしてくれるのが一番嬉しいかな」

少し照れ笑いしながらミーナを見ると、彼女は優しく微笑んで頷いてくれた。ああ、和み系だ。

とりあえずミーナとはそこでお別れをして、次はジャック君の家へ向かった。ちょうどジャック君は両手にバケツを持ってどこかに出掛けようとしていた。

「ジャックー！」

ロン君はジャックを見つけると大声で呼んだ。

「ああ、ロン。アンも。あと昨日の…」

「サーイエです。ジャックさん、昨日は運んでくれてありがとうございます」

丁寧にジャックにお礼を言うとアンヌとロン君が爆笑した。

「…プツ！アハハハ！！『ジャックさん』だって！！ジャックに『さん』なんか付けなくていいよ！」

「おい、それどういう意味だよ！」

「そのまんまの意味よ！」

ジャックは怒っているが二人はなかなか笑いならなさそうだった。仲いい友達の中身を知っていると、こういうのウケルよね。

「えと、じゃあ・ジャック、これからよろしくね」

「…おう」

「ジャック、そう少し愛想良くしなさいよ！人見知りが激しいからってサーエに失礼じゃない」

「いーじゃねーか別に！」

「良くない！」

「いや、私は気にしないから…」

私も基本的に人見知りするからジャックの気持ちは良く分かるよ。けどこんな事でケンカして欲しくないので私は無理やり話題を変えた。

「そういえばジャックはどこに出かけようとしてたよね？どこに行こうとしてたの？」

「ん、ああ。水石の残量が少なくなってきたから水^{みせき}を汲みに行くんだよ」

「みせき？」

何だそれ？早速異世界用語が出てきたね。ジャックは心底驚いていた。アンヌ達は私が分からない事を知っているから苦笑していた。

「お前：水石知らねえのか？！」

「え、あ…ごめん」

「ジャック、サーエは記憶がほとんど無いの。だからそんなに言わないで」

「あ、ああ」

アンヌが真面目に説明すると、ジャックは私の記憶喪失の重症さを分かってくれてらしい。記憶と言うより知識が無くてすまんね。

「けどほとんど無いってどれくらい無いんだ？自分の出身地も分かんないのか？」

「うん、本当にほとんど無いの。物や食材、土地とかも全然分かんないんだ」

「けど私達がこれから教えてあげるからいいの！」

「僕は先生だしね！」

「そうだね」

アンヌとロン君の頼もしい言葉に、私は安心した。ジャックもその様子を見てやる気を出してくれたらしい。

「よし、俺も手伝ってやるよ。これから水汲みに行くからその後に水石を見せてやるよ」

「うん、ありがとう！じゃあ私も水汲みを手伝うよ」

「じゃあ僕もー！」

「私も手伝うわ」

「おう、助かる」

私達はジャックの家からバケツを借りて、水を汲みに私達は村のすぐ側にある川に向かった。

水を汲みに行った川は普通の川だった。周りは緑に覆われ、自然が豊かだからすごくカントリーな感じがする。スナ・キンが釣竿を

垂らしてそう。

さて、水汲みますか。よっこーらせーっと！あー、水を汲んだのは良いけど、両手にバケツは運動不足にはキツイわ。

「サーイエ、無理しなくて良いんだよ？まだ病み上がりなんだから……」

「大丈夫だよアンヌ、ちゃんと持つてくから。それにこれからここで暮らすんだから、これ位出来なきゃね！」

心配してくれたアンヌに笑顔を返すと、アンヌは苦笑してそれ以上は何も言ってこなかった。水は重たいけど、やっぱり戦力外は嫌だし、病み上がりって言っても昨日の疲れは全く無いからね。水がいっぱいのバケツを持ってジャックの家に戻ると、ジャックは台所へ行き水洗い場の下にある棚を開けた。

「これが水石だ」

「はぁ・・・」

棚を開けると、その中には30cm位の高さの薄い水色をした六角柱のクリスタルがあった。ジャックはそのクリスタルを棚から出すと、バケツを一つ手に取り、上からゆっくり水を掛け始めた。

「え?!」

そんなことしたら水浸しにな・・・らなかった。なんと水石はバケツの水を吸収していた。まるで喉が渴いているようにどんどん水を吸い上げていく。生き物みたいだ。

「全く……ここまでギリギリまで使わなくても良いじゃない」
「いいだろ別に」

「そうやってまだ大丈夫ーとか思っていると、前みたいに夜中に水を汲みに行く事になるわよ」
「うるせえな」

ジャックはアンヌにお小言を言われながら次々とバケツの水を水石に掛けていった。全部の水を掛け終わると、水石は最初に比べて青みが強くなっていた。

「まだ5分の1位か…」

「サボっているのがいけないのよ。次は一人でやりなさいよね」

「ね！」

「二人してうるせえ！」

「あのー…ちよつといい？」

「あ？」

「水石は、水を貯める石なの？」

「そうだよー。ここに水を貯めると、家の中で水が使えるんだよ！」

ロン君が得意そうな顔で説明してくれた。つまりこれは貯水タンクな訳ですね。だけどこの流し台には蛇口はあるけどバルブが無い。それでどうやって水を出すんだ？

「ここで貯めた水はどうやって他の場所で使うの？」

「それはこの流動石じゅうどうせきに魔力を流して台所や洗面所で使えるようにするのよ」

そう言ってアンヌは流し台の蛇口の上についている丸い青い石を指差した。

「これ？」

「うん」

ただの飾りかと思ってたら、それが流動石だったのか。アンヌが流動石に指を乗せると、蛇口から水が出てきた。そしてまた指で流動石に触れると水が止まった。これがバルブ代わりだったのか。ポタン式なのね。私が感心して見ていたら、アンヌに提案された。

「サーイエもやってみて！」

「え?!」

「触ればメージが石に伝わって水が出るの。簡単だから。ね？」
「……」

ね? って笑顔で言われても…。私メージなんて無いんですけど。人間なもの。

「ここに触って水出るって思えば出るよ」

「…分かった、やってみる」

「あんまり出しすぎるなよー。また水汲みに行くの面倒だからな」
「うん…」

あー…断りたい。水が出なかったら人間だという事がばれる可能性があるんだよ。多分ないと思うけど、もし皆が人間を差別しているならグッバイ平穏生活、だ。だけどここで断ったら不信に思われるよねー。やるしかないか! 私は恐る恐る流動石に触れて念じた。出る、水が出る、!

私は強く念じながら恐る恐る流動石に触れた。するとものすごい勢いで水が流れ出てきた。

「うわああ!」

「お前何してんだよ! さっさと止める!」

「え、あ、はい!」

私は急いで流動石から手を離すと、水はピタッと止まった。何だ、何であんなに水が出るんだよ！ダムが決壊したような勢いで出てきたよ！！何で？！

私が混乱していると、跳ねた水にぬれたジャックが半切れで怒ってきた。

「お前出しすぎるなって言っただろ！！水浸しじゃねえか！！！！しかも水石の残りも大分減ったぞ！！」

「ご、ごめん！けどやり方がよく分かんなかったし…」

「ジャック！仕方ないんだからそんなに怒らないでよ」

「それにしてもすっごい水出たね！！あんなに勢いよく出るのは初めて見た！！！！」

怒るジャックをアンヌが宥め、ロン君は呑気にあははと笑っていた。私も一般家庭であんなに沢山水が出たのは初めて見たよ。よく蛇口壊れなかったな…。

「普通はあんなに出さねえからな！」

「…すみませんでした、また水汲むの手伝います」

「あー、もういい。今度はもう出すなよ！」

「はい…」

その後、私達は水浸しになった床を拭き、お詫びとしてまた川とジャックの家を何回も往復してジャックの家の水石を満タンにして、お昼ご飯を食べにラウム家に帰った。

私がしょんぼりしながら帰路についている間、アンヌとロン君は励ましてくれた。

「二人ともごめんね…。水浸しにしちゃうし、二人にも水汲みも手伝わせちゃって…」

「仕方ないわよ、サーイエは覚えてないんだもの。誰にでも失敗はあるわよ」

「そうそう！それに水浸しになったのは面白かったし」

「これからはもっとちゃんと使えるように頑張るよ」

「うん、帰ったら色々練習しよう？」

「うん、ありがとね」

「「「ただいまー」」」

「おかえりみんな。…どうしたんだいサーエ、何だか疲れた顔をしているけど大丈夫かい？」

「…うん、なんとか大丈夫だよ」

「？」

「サーイエが水石の流動石を使ったんだけど、ちよつと失敗しちゃってジャックの家の台所を水浸しにしたから落ち込んでんの！」

カカン又さんは私を哀れむように見てきた。何度こんな目で見られる事になるんだか…。

「どうやら石も使い方覚えてないようだね…」

「ごめんなさい…（知らないんです）」

「そうかい…じゃあ家で特訓しな！」

「…いいの？」

「これからここで生活するんだろ？人様の家で迷惑掛けるよりかずつと楽だと思っただけだねえ？」

カカン又さんの温かい目を見ていたら、やる気が出てきた。
何事も慣れたからね。よっしゃやるぞ！

こうして私は皆の力を借りて石の使い方を学び始めた。

時間が掛かるかと思っていたけど、私はすぐに流動石を使えるようになった。メージがどうか考えなくて、もうスイッチだと思えば楽勝。流動石スイッチを押してこれ位使いたいって想像したらそれ位の量が出た。

他には光りを出す光石ひみつせき。これは電灯代わりでした。冷蔵庫には冷やす事ができる氷石ひつせき、そして風石ふうせきは風が出るので換気扇やエアコン代わりになっていた。結構そのまんまの効果だよね。

ジャックの家で水が大放出したのは、私がとりあえず出るゝ出るゝ！って強く念じていたのが原因っぽい。だけどそれって私にメージがあるってことだよな？これもレイのおかげですか。あざっす。
一通り石の使い方を勉強したら夜になり、私達はアンヌの部屋で寛いだ。

「今日は疲れたー・・・」

私はアンヌの部屋の床に引いた布団の上にぼふん！とダイブした。マジ疲れた。筋肉痛になりそう。

「お疲れさま、サーイエ。石を使うのがそんなに大変だった？」

「いや、あれは理解すればすぐに出来るから問題ないよ。疲れたって言うのはジャックの家の水汲み。正直しんどかった」

「まあ、あれは結構量が多かったわね。私も疲れたわ」

「ぼくもー！」

「ほんとに私が失敗せいで付き合わせちゃってごめん・・・」

「いいのよ。私達が手伝いたかっただけなんだもの。」

「サーイエはまだ何にも知らないから仕方ないしね！」

「・・・二人ともありがとね」

「「どういたしまして！」」

二人はキレイにハモると、お互い顔を見合わせてくすくすと笑った。

ああ、やっぱり良いよこの雰囲気。なんか久しぶりな感じがする。奈由にも兄がいるからよくそんな光景を見てたんだ。会ってないからこういう事がこ久しぶりに感じるのか。みんな元気かな・・・。

「あ、そういえばヤン婆^{はあ}に会ってなかったわね」

「そーだね。ていうかヤン婆の姿を見かけなかったんだよね」

「どこに行ったんだろう？」

「さあ。もう帰っているかしら？」

「分かんない」

「あのー・・・」

「ん？」

「ヤン婆って誰？」

二人ともきょとんと私の方を見ているけど、私のほうがきょとんって感じですよ。

「ああ、ごめんね。ヤン婆はこの村最高齢のおばあちゃん、村の長みたいな人よ」

「へー、その人っていくつなの？」

「えーっと、1500歳くらいって言われてるけど、本当かどうかは分からないわ」

「・・・」

どれだけ長生きなんだよ。今からその時を遡ったら日本ってまだ

古墳時代じゃないか！私はにわと円墳しか覚えてないよ！！

「すごいね……」

「うん、みんな困った事があつたり何かあると大体ヤン婆のところに相談しに行くんだ」

「へえー」

そりゃ挨拶に行かなきゃね。一体どんな人なんだろ？話を聞いとると良い人っぽいけど、村人からそんなに信頼の厚い人だったらそんなに心配しなくてもいいかな…。

「じゃあ明日はヤン婆に会いに行こうか」

「うん」

「明日も色々分からない事があつたら教えてあげるね。じゃあおやすみなさい」

「おやすみー」

「うん、おやすみ」

ロン君が部屋を出て行くと、アンヌが明かりを消して私達は眠りについた。今日子の村を周って思った事は、この村の人達はお互いに強力をして助け合い、日々楽しく暮らしているという事。そんな村に暮らせるなんて幸せじゃないか。こんな日々がいつまでも続くと良いな。

第15話：特殊設定なんかありません

次の日、私達はヤン婆の家に訪れた。ヤン婆の家はラウム家から結構離れていたので行くのに時間が掛かり、40分くらい歩いた。ようやく林を出ると、一軒のこじんまりとした家が木に囲まれていた。

「あそこがヤン婆の家よ」

「へえー」

なんか7人の小人が住んでそうな家だな。私たちはヤン婆の家のドアの前に行くと、アンヌがドアをノックした。

「ヤン婆ー。アンヌだけど入っていい？」

「・・・ああ、お入り」

「お邪魔しまーす」

「まーす」

「お邪魔します・・・」

囁れ声の許可を得ると、私達が部屋に入った。部屋の中は薄暗く、ソファの上には編み物をしているよぼよぼのおばあさんがいた。

この人がヤン婆か……。こげ茶色のローブを着ているので、白く染まった髪が目立っている。うつすら目は開いているんだろうけど、編み物をしているから俯いていて目が閉じているように見える。その手も細くて骨がしっかり浮き出ている位に年老いている。

いかにも魔女って感じのおばあちゃんだなあ。

「久しぶりヤン婆、元気にしてた？」

「ああ、大丈夫じゃよ」

「そう、なら良かったわ。あ、紹介するわね。この子サーイエって言うの。昨日村の外で倒れていて行き場所が無いから私の家で暮らすことになったの。これからよろしくね」

「どうぞよろしくお願いします」

ヤン婆は編み物をソファの上に置きゆっくりと私を見ると、ヤン婆は閉じていたような目をいきなりカツと大きく見開いた。何だよ怖いな。目玉飛び出すぞ。

ヤン婆は目を見開いたまま思い切り眉間に皺を寄せて私を見てきた。

「お前さん…一体何者じゃ？」

「え？」

「赤い髪に黒い瞳…」

「………」

髪と目がどうした。赤い髪は王族って言うのは聞いたぞ。黒もって事はまた特殊設定の追加か。もう勘弁してくれよ…。

「…何か問題でもあるの？」

アンヌは恐る恐るといった感じでヤン婆に問いかけた。ヤン婆は私から目を逸らさずにその質問に答えた。

「赤は、生の象徴と秩序を司る色」

「………」

何だか随分格好いい意味ですねー。きっと私の世界でそんな意味

が知られていたら厨房の人達には赤毛が多かっただろうよっ！

「そのため、赤髪は王族のみに引き継がれている」

「……」

へえー、だから王族の髪は赤な訳ですか。だけどこの髪は染めたから赤くなっているだけで、そんな意味は無い。伸びれば黒髪が生えてくるけど…ヤン婆のこの反応からするときと黒は悪いことだろう。邪悪な存在とかなんだとか。

「そして黒は」

ヤン婆はそこで言葉を区切ると、私を少し恐れているように睨みつけると言葉を吐き出した。

「死の象徴と混沌を司る色」

「え…？」

その一言で部屋の空気が変わり、アンヌとロン君の顔から笑顔が消えた。

これも厨房が好きそうな意味だな。まさにカオスだよ！！

「わしはこんな目の色…いや、こんな容姿をしたものは見たことが無い」

全員が揃って私のほうを見るので視線が痛い。ラウム姉弟は不安そうに私の方を見つめている。私は二人を見ると、視線を落として床を眺めた。

そりゃこんな得体の知れないやつが同じ家に住んでたら不安だよな。私は皆が怖がるならすぐに家を出て行くよ。迷惑掛けたくない

から。はあ、もう普通の生活は諦めた方が良かった。

「だけど…」

アンヌは不安そうにしながらも、しっかりとヤン婆を見つめて言った。

「だけどサーイエは自分の事が何も分からないのよ？それに私達もサーイエの事はよく分からない。私達まだ会って間もないけど…一緒にいて悪い人には見えなかったわ」

「うん、ぼくもサーイエのこと悪いやつには見えないよ」

アンヌ、ロン君…。まだ会って間もない私の事を信用してくれてるんだね。ありがとう。

「じゃがその者が神聖な存在か邪悪な存在か分からぬ。いずれこの村に何らかの災いを齎すかも知れん。その前に、この村から出て行ってもらったほうが良いだろう」

ヤン婆の枯れた声が諭すように聞こえた。素性も分からず特異な容姿を持っているなら、そう思われても仕方ないよ。

「皆さんに迷惑が掛かるようでしたら、私はこの村を出て行きます」

「サーイエ！」

「だめよサーイエ！」

「だけど…」

「まだ悪い存在って決まったわけじゃないわ！もしかしたら何か呪いが掛けられているかもしれないじゃない」

「そうそう！僕もサーイエが村から出て行くのは反対！」

一生懸命私を引き止めてくれる二人の姿に、私の目頭が熱くなった。

「ねえヤン婆、良いでしょ？」

「・・・・・・」

アンヌが必死でヤン婆に頼んでいるが、ヤン婆は鋭い視線で私を見極めようとしている。怖いけど、ここで目を逸らしたら負けのよ
うな気がする。私が負けじとヤン婆を見つめっていると、ヤン婆は静かにソファに凭れ掛かった。

「聖なる者が邪悪な呪いを掛けられていられるのか、それとも悪しき者が聖なる者に化けているのか、わしにも分かん」

「・・・・・・」

ヤン婆は目を伏せそう言つと、編み物に手を伸ばし先程と同じように編みかけの物を編み始めた。

「これから、この村で生活するんなら村人の手伝いを良くするんじやよ」

「ヤン婆・・・！」

「やったねサーイエー！！」

「うん、ありがとね二人とも。ありがとうございます、ヤン婆さん」
「・・・・・・」

：良かった。私は安堵の溜息を吐いた時、もうヤン婆は私達の方を全く見ていなかった。この人はちよつと・・・いや、かなり怖い。私の平穩生活が壊されるかもしれない。あんまり関わんないようにしよ。

私達は家に戻ると、晩御飯の時ダンさん達にヤン婆に会った事を報告したら、二人とも私がここで生活する事をヤン婆に認めてもらえて安心していた。

みんな面倒な事に巻き込んでごめん。私もそんなに面倒な設定があるとは思わなかったよ。異世界なら特殊設定はあるとは思ってたけど、いきなりロイヤルファミリーに行くとは思わなかったわ。トリップだったら恋愛結婚とかで王家に入る事はあるけど、まさか元から王家の血筋とかマジない…。

私、冒険も嫌だけどお城暮らしも嫌なんだよ。どうせ美形に囲まれて優雅な日々の中にしようもない陰謀に巻き込まれたりするんだろ。

はつきりと言おう。面倒くさい。

そんなのは可愛くて純真で守りたくなるような女の子がやれば良いんだ。あ、ちなみに10代ね。やっぱり一般的な萌えて10代かそれ以下じゃないかな。そこでウハウハな青春生活でも送ってくれ。私は自活がしたいんだ。

そして黒目。『死と混沌』、ねえ？さらに面倒くさい設定だよ。もし私が髪を染めずに黒髪のままだったら、邪悪な存在として村を追放されてたんだろうな。・・髪染めてて良かった。

私は溜息を吐くと、無事に平穏生活が送れますようにと普段信じてもない神に祈った。…困った時は神頼み、だよな？

第16話：平穩生活万歳！

グランイースに来てから4ヶ月、私の切実な祈りが届いたのかめ
ちやくちや平穩ライフを送っています。

この4ヶ月の間にここでの生活の仕方や仕事、生活に活用できる
初歩的な魔法も教えてもらった。

魔法には属性があつて、火、水、風、土、氷、雷、光、闇。呪文を
唱えると魔法が出る。ファンタジー要素全開だね。

魔法にはそれぞれ素質があるので得意、不得意があるみたいだけ
ど、生活には必要最低限の簡単なものだから誰でも使えるらしい。
だけど簡単なものでも光と闇は素質がないと覚えるのは難しいんだ
とき。

ちなみに私は…全部使えました。あ、けど皆の前では見せてな
いよ！後でこっそりやったら出来ちゃった。はい、チートですよ。
今まで魔法なんぞ2次元のものだったのにいきなり全属性の魔法が
使えるとかガチでチートだな。さすが特殊設定。普通は喜ぶだろう
けど私にはいらぬオプシオンです。普通が一番良いんです。

最初に教えてもらった火の魔法の呪文を唱えた時は、火が火炎放
射器の如く出てきたからビックリした。ジャックに燃え移るところ
だった。ジャックって貧乏くじばかり引いてるよね。注目される
のは嫌なので（特にヤン婆）、それ以来は必要最低限の魔法しか使
ってないし、とりあえず私の素質は『炎』『水』『風』にしておき
ました。

ここでの生活は毎日朝早くに起きて、ご飯を作り美味しく頂いて、
掃除、洗濯、それから畑の手伝いをしたり、自然と戯れたりして家
に帰ると美味しい食卓待っており、そしてお風呂に入って体を癒す

と布団に入ってぐっすり眠り、また朝が来る。

・・・最高じゃねえーのッ！！そうだよこれ！私はこういう生活に慣れていたんだ！！煩わしい喧騒も無い、村人も優しい、そして豊かな自然に囲まれていてホント平穏な生活だよ。平穏生活万歳！！

今日は午後からみんなで護神の森に薬草摘みに行った。みんなって言うてもラウム姉弟、ジャック、ミーナ、私の5人んだけどね。イセアには子どもが私達しかいなかった。

何故かと言うと、まず魔人は人間に比べると子供の出生率が低いという事。そしてイセアがかなり田舎で村人が少ないと、いうのが原因らしい。だけど皆はそんなに気にして無いから良いんだとさ。私も平穏に暮らせるならそんな事はどうでもいい。

それから護神の森には魔獣が居て危険だって言われているけど、そんなに奥まで行かなければ大丈夫みたい。だから私達は適度に森の中を探索する事にした。

子供たちだけで森に入るのは今回が初めてらしく、みんな面白そうに森を見回していた。きっと彼らからしたら冒険みたいなものなんだろっね。

私はそんな皆を見て楽しみながら森林浴しているからとても清々しいよ。マイナスイオンー。

歩きながらこの草は何だ、とかどうとか言って談笑しながら森に生えている植物を摘んでいると、少し道が開けてきた。何だろっと思議に思いながら進んでいくと、そこには広い花畑が広がっていた。

「わあー！すごい！！」

「森にこんなところがあったんだね！」

「こんなにきれいな花畑、森の奥の方じゃないと見れないと思って
いたわ」

目の前に広がる花畑は、まるで春のように満開に花が咲き誇って
いた。広さ的には…サッカーグラウンドくらいかな。

こんな満面に花が咲いているのは初めて見たよ。手入れされてい
ないからこそその美しさがある。自然の力ってすごいわ。

ロン君が一番に花畑に駆け出すと、アンヌとミーナもそれに続く
ように笑顔で花畑に向かっていった。あー子供らしくて可愛い
な。私は歩いて向かうよ。

…べ、別に年のせいじゃないよ！ただのんびり花を観賞したいだ
けなんだから！勘違いしないでよねっ！！…一人ツンデレは寂しい
な。ていうか年齢的に厳しいな。

とろとろ歩いていると、ジャックは一人だけしゃがみ込んでいた。

「お、これリツクルじゃねーか。ラブーまであるし！」

「…ジャック何してんの？」

「あ？何って薬草摘んでんだよ。ここらに来たこと無かったから知
らなかったけど、結構貴重な薬草が生えてるぜ！この薬草は街で売
ると結構高値で売れるんだ」

「へえー、そうなんだ」

どつりで生き生きとした顔で薬草摘んでいたのか。

「お前も集めろよ！そして俺に渡せ」

何？このジャイアニズム。

「さあーで、花でも愛で行こー」

「おいっ！」

「頑張つてねー」

私は手をひらひら振りながら花畑の方に向かって行った。何で私がジャックの金儲けのためにただ働きしなきゃいけないんだよ。

それにしても本当に綺麗だなあー。やっぱり森はメージが豊富だからか。メージって大切なんだね。

「サーイエも来なよ！すごくキレイな花ばっかりよ！」

そう言つて私を呼んだアン又たちは花畑ではしゃぎまわつて遊んでる。そりゃこんだけ綺麗な花が咲いてたらテンション上がるよね。

「うん、今行くよ！」

何だかまた青春時代に戻つたようで、少し照れくさく感じながらも懐かしいような気分で私はアン又達の方に向かった。

「そつえばさー」

「ん？」

「サーイエって護神の森から出てきたけど、ここは通らなかったの？」

「あー・・・」

一生懸命薬草を採っているジャック以外の全員で遊んでいると、ふと思い出したように頭の上に花の輪を乗つけたロン君が聞いてきた。だけど正直覚えていない。だって走りまくってたし。逃げるの

にいつぱいいつぱいさ。

「ごめん、覚えてないや。逃げるのに必死だったから。けどもしかしたら通ってたかもしれないね」

「そっか…」

「ちょ、アン又達そんなに心配しなくても大丈夫だよ！記憶が無くても私は十分幸せだから！！」

どうしても記憶がないと言つと皆がしょげるので、毎回同じ事を言つてゐる気がする。そこまで気にしなくても良いのに。

「本当？」

「本当」

「それなら良かったわ」

ふふつと柔らかくミーナは笑つと、私の頭に桃色の花の輪を置いた。

「あ、ありがと・・・」

「どういたしまして」

「ん？どうしたのミーナ」

「サーイエの髪の毛が、黒になってきてる・・・」

「え？」

「ウツソ！見して見して！！」

ラウム兄妹は身を乗り出すと私の髪を見に来た。何だか頭皮チエツク受けてゐるみたい。まだ禿げてないよ。

「ホントだ！」

「サーイエ、大丈夫？最近体調が悪いとか・・・」

「いや、特に何も無いよ」

ただ地毛が生えてきただけです。だけど髪の毛の伸びはここに来てからだいぶ遅いんだよね。4ヶ月経ったらいつもはプリン状態なのに、今はまだ1cm位しか伸びてない。きっとこれも何かこの世界に関係してるんだろうな…。

「・・・何かの、病気がしら？」

「分からないわ。もしかしたらヤン婆が言ってたみたいに呪いが進行しているんじゃない？」

「後でヤン婆の所に行つて聞いてみようよ！」

「そうね、後で…て、あつ！もうこんな時間！！」

「日が傾いてきてるよ！」

「ほんとだー」

ようやく皆が私の頭を解放してくれた。気がつけばもう日が傾いていた。おー、もうそろそろ夕飯の時間だ。

「遊びすぎて薬草摘むの忘れてた！！」

「そつだよ！どうしよう…」

そういえばそうだね、忘れてたよ。ロン君たちはあたふたしているけど、私はそんなに気にしていなかった。だって…

「おーい、お前らそろそろ帰るぞー」

「ジャックどうしよう！薬草あんまり摘んでないよー！！」

「はあっ？！そんなの知るかよ。自分のせいだろ」

「だけどー！！」

ロン君は少し泣きそうになりながらジャックにしがみついた。今

子供供たちで森に生かせて貰ったのはちゃんと薬草摘んでくる事が条件だったもんね。そりゃ焦るわ。カカン又さんは怒ると怖いし。その必死な様子に思わず苦笑がもれた。

「ロン君、そんなに慌てなくても大丈夫だよ」

「え？」

「私達の代わりにジャックが大量に取ったから分けてもらえば良いんだよ」

「はっ?!」

みんな黙ってジャックの方に期待を込めてジーンと見つめていると、ジャックの顔は引きつり笑いになってきた。

「…冗談だろ?これは俺一人で摘んだんだぜ」

「そうだね、お疲れさま。だけど今回全員が薬草を持って帰れなかったら、連帯責任でジャックもここに子供だけ来る事が出来なくなるよ。それでもいいの?」

私は笑顔で言うと、ジャック眉間に皺を寄せ始め、皆の顔も輝いてジャックを見つめていた。これは結構キツイよね。ジャックは険しい顔をして頭を抱えて悩んでいるけど、多分いける。

「あー、もう!!仕方ねえな!今回だけだから!!今度は絶対えー分けてやらねえから!!」

ほらいけた。ジャックは何だかんだで優しいからね。

「やったジャック!ありがとう!!」

「良かったわね、これで怒られずにすむわ」

「たまには役に立つじゃない!」

「…お前らホントに感謝してるのか？」

「まあまあ、暗くなるとみんな心配するから帰ろうよ」

「うん。あーサーイエ、ヤン婆の所には明日行こう」

「分かった」

またあそこに行くのか…。正直いやだなー。だけど皆が心配してるし仕方ないか。

「ただいまー」

「おかえり。ずいぶん帰って来るのが遅いじゃないかい」

カカン又さんがちよつと怒ったように私達を見た。そう、実はあの花畑は村から離れていたのだ。行く時は森に興味津々で冒険気分だったから気がつかなかったけど、帰るのに時間が掛かってしまい、村に着いたのはいつも夕飯を食べる時間より少し遅くなってしまったのだ。

「あー…。ちよつと薬草を摘んでたら夢中になっちゃってね」

「へえー、そうかい。それじゃあ沢山採れたんだろうね」

「うん！見てよ！！こんなにリックルやラプーが採れたんだ！」

「へえーすごいじゃないか！」

「うん、私達もビックリしたわ」

「ねえ、その薬草って何なの？」

さっきから皆はしゃいでるけど、私は金になる薬草という事しか知らないんだ。もう少し説明が欲しいよ。

「あー、これはリックルとラブーという薬草でね、体力を回復する薬の材料になるんだよ」

「そうなんだ…」

「うん。でね、この薬草は他の薬草より回復効果が大きいから高値で売れるのよ」

「なるほど」

回復アイテムの原料か。ポーションは安いけど、ハイポーションになると値段上がるからね。私は旅の最初の方は回復アイテムを使うを渋るタイプ。最初は手に入らないし高いから。だからケチって回復キャラを多用してMPが底をついたらようやくアイテムを使ってみたな。けどMPが無いのもけっこうキツイよね。…て、こんな事今は関係ないか。

「じゃあ今度作物を出荷するときに一緒に売ってきてもらおうか」
「うん！」

おー、それでラウム家の生活が潤うなら何よりだ。私もジャックの手伝いをすれば良かったな。だけど薬草がほぼ皆無の状態からの大量に横領したので良いとしよう。

「みんなお疲れさま。それじゃあご飯にするよ」
「うん！」

私達は手を洗つてくると、カカン又さんが準備してくれたご飯を食べ始めた。

今日はパンと野菜サラダとミネストローネ。カカン又さんの腕が良いのもあるけど、ここの野菜はめっちゃ美味いんだよ！サラダもドレッシング無しでも全然OKなくらい味がある。あー、美味しいも

のを食べるって至福だね。やっぱり食べ物って生きるためには重要だ。

そんなご飯の味を噛み締めながら食べ終わると、食器洗いを手伝った。

ここに来る前は面倒くさがって全然家の手伝いなんてしなかったけど、誰かと話しながら洗うのって結構楽しいね。…もつとお母さんの手伝いをしてあげれば良かったな。

こういう生活の中の些細な事で私の世界の家族や友達の事を思い出す。前はこうだったなあとか、こういう事してたなあとか。その事を思い出すと寂しくなるけど、ラウム家の人、この村の人の笑顔を見ていると気持ちが安らぐから大丈夫。私は、この村で平和に暮らす事ができて本当に嬉しいよ。

第17話：突然の災害

「みんなー！！バルフだ！バルフが来たぞー！！！！」

私達が楽しく食器洗いをしていると、突然外から大声が聞こえてきた。

「え、どうしたの？！」

私達は皿洗いをする手を止めると、ダンさんとロン君が窓に駆け寄り外を覗いた。

「・・・バルフだ！」

「え？！」

「何だって！？」

「バルフが村に下りてきてる！」

カカン又さんとアンヌも急いで窓に駆け寄るので私もそれに続いた。バルフって何だ？

「あつー！！」

あれ森にいた魔獣じゃん！！

「どうしたんだいサーイエ？」

「私あの魔獣に森で襲われたの！」

「あんたバルフから逃げる事ができたのかい！？」

「え、あ、はい・・・」

チート能力のおかげだけだね！

「サーイエは本当にすごいね…。バルフは足が速いの」

「…そう、なの？」

「ああ」

みんなが驚いて目を見張っている。…言わない方が良かったですか？それにしても、森では単体だったのに今回は…いちー、にー、三匹か。マウンテンバイク位の大きさの狼型魔獣。

そんな話を話している間に、バルフという魔獣は徐々にこちらの方に近づいてきた。

「俺はシャイク達と一緒にバルフを追い払いに行ってくるから、お前達はヤン婆の所に行ってこの事を伝えるんだ」

「うん、わかった！」

「だけど父さん…」

アンヌは心配そうにダンさんを見つめると、ダンさんは優しくアンヌを抱きしめた。

「バルフを追い払ったら俺達もヤン婆の家に行くから心配するな」

「…うん。早く来てね」

「ああ」

ダンさん優しく答えると、そっと離れた。ラウム家はこういう事が自然に出来るから良い家族だなあって思う。

「じゃあ力カンヌ、子供たちを頼む」

「分かった。無茶するんじゃないよ」

「ああ。じゃあ行ってくる」

カカン又さんの言葉にダンさんは苦笑すると家から出ていった。
カカン又さんはダンさんの奥さんのはずなのにお母さんに見えるよ。確か男性つてマザコンが多いんだっけ？だから恋人や奥さんに母親を求めるといふか…

「さあ、じゃああたし達も急いでヤン婆の所に行くよ！」

「うん！」

「お、おおう・・・」

びつくりしたー。こんな時に関係ない事を考えてちゃいけないね。という訳で、私達はヤン婆の家に向かった。

ヤン婆の家に向かう最中、アン又はダンさんの事が心配なのかどことなく沈んでいた。やっぱり心配だよな。

「カカン又さんはダンさんの事が心配じゃないんですか？」

「え？ああ、心配って言えばそうだけど、ダンさんはバルフにやられるほど柔じゃないからね。だからきつと大丈夫さ」

カカン又さんは明るい声と優しい笑顔が、ダンさんへの信頼を感じた。やっぱり奥さんだ…。

「それにしても、どうしてバルフが村に？」

「それはあたしにも分からないよ。後でヤン婆に聞いておくれ」
「…うん」

ヤン婆の家に着くと、そこには既に数人の村人が来ているのが見えた。

「ミーナ！」

「アンヌ！！」

私達が到着すると、ミーナが心配そうに駆け寄ってきた。

「良かった無事で…。アンヌ達の所にもバルフが来たの？」

「うん。ミーナの所にもバルフが？」

「うん…。私の所には4匹くらい襲ってきたから、男の人達が村に残って、私達はヤン婆に伝えに着たんだけど、まさかアンヌたちの所にもいるなんて…」

「じゃあジャックは…」

「うん…」

ミーナは気まずそうに頷いた。やっぱり男の子だから戦わなくちゃいけないのか…。だけどジャックはそんなに弱くないはずだ。前に魔法を教えてもらう時にジャックの魔法を見せてもらったけど、結構大きい火を出していたから多分殺される事はないと思う。

アンヌは少し俯くと、ぱっと顔を上げた。

「ジャックも男なんだから、しっかり戦ってもらわなきゃね！」

意外にも明るい反応のアンヌにびっくりした。ダンさんの時はそんなに心配そうだったのに、ジャックの時は異様に明るい。もしかして、私達に心配を掛けないように空元気を出してるのかな…。

「ヤン婆はどうしてるの？」

「いま王都に連絡を取っているみたいよ。だから騎士団の方達が救

助に来てくれると思う」、

「そっか。騎士団が来るならもう心配は無いね」

「良かったー！」

みんな騎士団と聞いて少し緊張が解け、ロン君にいたってはかなり喜んでいる。不謹慎だけど実は私も内心少しワクワクしてる。騎士団ってきつとあれだよな！鉄の鎧兜着て剣やランスを持って戦う人達。中世ヨーロッパパー！すごい見たい！ああー早く来てくれな
いかなー！！

私達がヤン婆の家の前で待っていると、少しずつ村人が集まりだし、お互いの無事を確認しあった。みんな安心してきたのか、おばさま達の世間話で少し賑やかになった。やっぱり女って話すの好きだよな。

それにしても少しずつだけどどんどん人が集まっているって事はそれだけ広範囲にバルフが降りてきているって事なんだろうか。何でなんだろう…。魔獣が過去に襲ってきたのは人口が増えた時で、それは自分たちのメージが取られると考えていたから。だけど村には私以外増えていないからメージを思いっきり消費する事はない。それでも魔獣、バルフが襲ってくるという事は…

「ちよつとごめん、安心してきたせいか、トイレに行きたくなっちゃった」

「え？」

私が考え事しているとアン又は少し照れたように言った。

「もうアン又つたら！」

「アハハごめんごめん！ちよつとヤン婆の所にトイレ借りに行ってくるね」

「うん、いつてらっしゃい」

私とミーナは苦笑してトイレに向かうアンヌを見送った。周りは暗かったからアンヌの姿はすぐに見えなくなった。

「ねえ、ミーナ」

「なあに？」

「大丈夫かな？」

「え？・・・ああ、ここなら安全よ。サーイエは知らなかったかもしれないけど、ヤン婆って村で一番の魔術師なの！」

「へえ・・・そうなんだ」

「うん！だから心配しなくて大丈夫」

ミーナが優しく教えてくれたけど、私が聞いたのはその事じゃない。アンヌの事。

普段から明るいアンヌはとても情が深い。見ず知らずの私を捨てて家に置いてしまうくらいに。そりゃカカンヌさんも情が深いけど、ダンさんを信頼しているし、母は子供を守るためなら強くいられる。ロン君はまだ子供だからあまり危機感が無い。

だけどアンヌは違う。丁度その中間の一番不安定な位置にいる。そこまで強くもなければ楽観的に考える事が出来るわけでもない。そのアンヌが家族や友人が危険な状況にいるのに、彼女は平気でいられるのだろうか？

ミーナも安心してみたいだから、また不安にさせたくなかった。なので私はその事を言わなかった。

「・・・アンヌ遅いね」

「そうね、お腹でも痛いのかな？」

「・・・」

本当にミーナは天然だな。20分過ぎて出てこないなんてどれだけ大量の排泄物を出してるんだよ。それとも便秘か。何だか嫌な予感がする…。

「ねえミーナ、私もトイレに行きたいんだけど、トイレってどこにある？」

「ここからじゃ見えないけど、ヤン婆の家の隣にある、少し木に覆われた所にあるわ」

あー・・・確かに見えないね。

「ありがとね。・・・じゃあアンヌの様子見がてら行ってくるわ」
「うん」

「さて・・・」

トイレの前まで来た訳ですが、アンヌはいるんでしょうか？
私はドアをノックしてみた。

「アンヌ、大丈夫？」

…応答なし。

「・・・アンヌ？」

嫌な予感がどんどん大きくなってきた。私がトイレのドアを押すと、キィッと音を立てて簡単にドアが開いた。

居ない。念のためあんまり行きたくないけどヤン婆の家も覗いてみるか。仕方なく私は隣のヤン婆の家のドアをゆっくりと押して家に入った。

「失礼しますー・・・」

私はドキドキしながらヤン婆の家のドアを開けると、ヤン婆がこっちを振り向き私を確認すると、まるで憎んでいるかのように私を睨んできた。…やっぱり嫌われてるなあ。まあそれは仕方ないでしょう。今の問題はこんな事じゃない。

「あー、アンヌを見てませんか？」

「来ておらん」

「そうですか。では失礼します」

「・・・」

私はアンヌが居るかを確認すると、さっさと家を出た。こっちだつてヤン婆に係わりたくないし。

それにしても面倒くさいことになったなー・・・。アンヌは多分村に行つたね。アンヌが私達に断りも無く外に出て行くわけが無い。私達にそれを言わない。何かやましい事、隠したい事があるつてことでしょ。ダンさんやジャック、他の村人が心配だつたんだろうけど、行こうとすれば周りから反対される事が分かってるからこつそり一人で出て行つた。アンヌの事だからそんなところう。だけど…ねえ？

私は深く溜息を吐くと、ミーナの元へと戻った。

「あ、おかえりサーイエ。アンヌは？」

「その事なんだけど…ミーナ。ちょっとこっちに来て」
「え、うん・・・」

私は不思議そうな顔をしているミーナを家から離れた薄暗いところに連れて行くと、小声で話しかけた。

「静かに、落ち着いて聞いてね」

「・・・うん」

「アンヌが居ないの」

「えっ?!」

「しーっ!」

「ご、ごめん・・・」

ミーナは謝りながらすごく不安そうな顔をしていた。

「トイレに行ったけどそこに居ないし、ヤン婆の家を覗いてみたけど見当たらない。多分アンヌは、村に向かったんだと思う」

「そんなんっ! どうしよう・・・アンヌはあんまり攻撃魔法使えないのに・・・」

「どうして?」

「使いたくないんだって・・・」

アンヌらしいな。確かにアンヌが攻撃魔法を使っているのは見たこと無い。いつも生活に役立つものか、回復魔法を使っている。きつと優しいから、魔獣であろうと傷つけたくないんだよね。それは良いことだけど、今はそれが裏目に出ている。

「うーん、じゃあアンヌは少し回復魔法が使えるから、皆のサポートをするために戻ったのかもしれないね」

「そんなんっ! サーイエどうしよう・・・!!」

「……」

はぁー・・・、どうしようと言われても。アンヌがサポートに行つたとしてもどれだけの回復魔法が使えるかが問題だな。大体ゲームでも結構白魔法が使えるような良いんだけど、あんまり使えないとなるとぶっちゃけ足手まといだ。

私が怪我をした時に治療をしてくれたのはアンヌだけど、あの傷を治すだけで疲れていた。しかも完全にでは無い。失礼だけどその程度だったら戦闘で使えるわけが無い。まあ敵の強さにもよるけどね。アンヌの事と村で戦っている皆のためを思うと、ここは私が連れ戻すしかないか…。

「ミーナ、わたし村に行くてくるよ」

「だけどそれじゃあサーイエも危ないわ！それにアンヌが村にいるかはまだ分からないし、やっぱりヤン婆に伝えた方が…」

「それはだめだよ。ヤン婆はここを守っている。それにここにいて皆もヤン婆が守ってくれていると思っっているから安心していられる。だからヤン婆がここからいなくなることは皆を不安にさせてしまうし、アンヌが居ないという事が知られても皆の不安を仰ぐだけになる」

「だけどサーイエ…」

ミーナは不安で泣きそうな顔をしているので私はぽんつとミーナの頭に手をのせて笑って見せた。

「大丈夫！実は私、森でバルフに襲われたけど逃げてくる事が出来たんだもん。足には自信があるから、ちゃんとアンヌを連れて帰って来るよ！」

「……」

ミーナが俯いたけど、ここでのんびりしている訳にはいかない。

「じゃあミーナ、私行ってくる。この事は皆に言っちゃだめだよ」

「・・・サーイエ、無事に帰ってきてね」

「うん、分かった。じゃあいつてきます！」

私はミーナに別れを告げると、私は前のように体を軽くして村へと全力疾走した。

第18話：それぞれの大切なものの守り方（前書き）

この話はグロテスクな表現が含まれています。苦手な方はご注意ください。

第18話：それぞれの大切なものの守り方

アンヌどこだー？出来ればまだ村に到着してくれないと良いんだけど…。ここからだとジャックの家のほうが近いな。そっちにも寄ってみるか。

ジャックの家のある区域に着くと、村人達はバルフと戦っていた。ミーナは4匹とか言ってたけど、彼女が逃げてからまた続々増えたようだった。いま襲ってきているバルフの数は少ないが、10匹くらいは地面に倒れている。暗いのでその姿をはっきりとは見えなかった。

「サーイエ！何でここに・・・オラア！！」

ぼーっとそれを見ているとフェズおじさんはバルフを鍬でぶっ飛ばして、炎の弾を喰らわした。うわ、すごー・・・！

打撃と炎を喰らったバルフは呻きながら炎に包まれてもがいている。なんかアン・リーバボーで流れてそんな光景だな。

もがいていたバルフはまだ燃えている炎を身に纏ってよろよろと森のほうへ向かおうとしたのか、歩き始めた瞬間にフェズおじさんが鍬を振り下ろした。私は思わず目を瞑った。

「・・・っ！！」

「キャンッ！！！！」

悲痛な叫び声が聞こえた後に恐る恐る目を開けると、横たわっているバルフの首から血が流れ、ゆっくりと地面に広がっていった。

広がる血を目で追っていると、周りに倒れている他のバルフ達も目に入ってきた。暗いのに目が慣れ始めてきていたので、さつきとは違つてはつきり彼らの姿を見る事ができた。体が焼けて黒ずんできたり、切断されて中身が見えているものもある。現実味を感じない光景に、私は何とも言えなかった。

「ほら危ないから早くヤン婆の家に行け！」

「え！？あ、ああ……」

ビックリした……。フェズおじさんはお冠だけど、おかげで正気に戻ったわ。

「フェズおじさん、私アンヌを探してるんだけどここにアンヌ来てない？」

「え……。ああ！ジャックがアンヌを見かけたからあいつが追いかけて行つたぞ」

グッジョブジャック！多分ジャックの足ならアンヌに追いつけるから少しは安心だな。

「じゃあアンヌとジャックと一緒にいるのね？」

「多分そうだと思うが……。なっ！！」

「うわあっ！！」

話している最中にさつきとは違うバルフが私達に襲い掛かってきた。しかしその前にフェズおじさんが思いっきりバルフを打ち飛ばした。ナイススウィングです、フェズおじさん。ファーストゴロ辺りかな。バルフはその強いスウィングにノックアウトされて伸びていた。

「ふう…。あー、全く何でこんなにバルフが出てきやがったんだ！」

「・・・周りを見る限りだと結構の数のバルフが来たみたいだね」

「ああ。今はもうだいぶ倒したから落ち着いてるが、さっきまで次から次へと出てきて大変だったんだ」

そういつて頭をガシガシ掻くフェズおじさんは疲れているようだった。

「そつか・・・。けど無事で良かったよ。じゃあ私はアンヌを探しに行かなきゃ」

「お前一人じゃ危ねえだろ。俺もついていく」

「だめだよフェズおじさん。疲れてるんでしょ？それにまだここも安全とは言い切れないし、怪我をしている人達もいる。私よりもまずその人達を助けてあげて」

「だけ・・・」

「私なら大丈夫！逃げ足は速いから危なくなったらすぐに逃げるし、少しは攻撃魔法も出来るから怯ませるくらいは出来る。帰りはジャックもいるから少しは安心でしょ？」

「・・・」

ニコニコしながら一気に捲くし立てた。さっきもミーナに似たような事を言ったな。フェズおじさんは顔を顰めて考えてると、ようやく折れてくれた。

「はあ・・・。危なくなったらすぐに逃げろよ」

「うん。じゃあ行ってくる。フェズおじさんも無茶しないでね」

「そりゃこっちの台詞だっつーの。じゃあな」

疲れて顔をしているフェズおじさんに別れを告げると、私はまた

村に向かった。

暗闇の中で一人走っていると、さっきのバルフの事を思い出したんだん怖くなってきた。多分さっきは驚きで心がついてこなかったんだと思う。

焼かれて毛も無くなりバランスの悪い黒ずんだ体。首を切りつけられてぱっくりと開いた頭と胴体。そこから静かに地面に広がっていく血。だらしなく開いた口から力なく垂れている舌。殴られたときの衝撃で飛び出た目。何も写さない、瞳。

ぞっとした。まるで映画のような事が現実で起きている。今まではお菓子やジュースを飲みながら視聴していた立場だったが、今はその逆だ。視聴している時に時折スリルを感じる時はあったが、それなんかとは比にならない。全身に張り詰める緊張感の中、呼吸はいつもよりやたらよく聞こえるし、心臓を打つ鼓動も早い。走っているせいじゃない事はよく分かっている。とにかく今は早く明るい場所に出て誰かに会いたかった。誰でもいい。独りにしないで。

私がかむしやらに林の中を走っていると、二つの影が見えた。ようやく見つけた！

「アンヌ！ジャック！！」

「サーイエ！？」

「何でお前まで！！」

アンヌは目を丸くし、ジャックは驚きの中に苛立ちが伴っていた。

「無事で良かったー・・・」

ほんと良かった。誰かに会えた事、アンヌの無事が確認出来ると安心して肩の力が抜けた。今まで緊張しっぱなしだったからね。安心したせいか何か精神的な疲れが出てきたよ。

まったく…こんなに大量にバルフがいる場所に向かうなんて無茶すぎるでしょ。サファリパークでバスに乗らずに周るのと同じようなもんだよ！私だったら絶対にしない。

「アンヌがヤン婆の家から姿が見えなくなったから探しにきたんだよ」

「だとよ、アンヌ」

ジャックがアンヌを睨みながら嫌味たっぷりに言うと、アンヌは申し訳無さそうにうなだれた。

「ごめんなさい…」

「うん、だけどアンヌが無事ならいいよ」

「ったくよー、お前たちバカなことすんじゃないよ」

「ごめんごめん」

私がアハハと笑うと、ジャックは疲れしたように溜め息を吐いて頭を掻いた。さっきのフェズおじさんみたいだ。やっぱり親子だね。

「あ、そう言えば…」

「なんだよ」

「さっき来る途中にジャックの家の方に寄ったんだけど、私が行った時にはほとんどのバルフを退治出来てたよ」

「そうか…」

ジャックはほっと安心したようだった。そりゃ自分の家族の事は心配するよね。

「じゃあお前らは戻れ」

「えっ！？」

「えっ！？じゃねえよ！」

「そうだよアンヌ、戻ろう」

「だけど・・・ジャックはどうするの？」

アンヌは不安そうにジャックを見つめた。

「オレはダンさん達の様子を見てからそっちに向かう」

「私も一緒に行くわ！」

「だからさつきからダメだって言ってたんだろ！」

やっぱりアンヌは家に行く事を諦めていなかった。

「どうしてよ！」

「危ないからに決まってるんだろ！」

「だったらジャックだって同じじゃない！！」

「違えだろ！だいたいお前は戦えないだろ！！」

「白魔法が使えるから平気よ！！！！」

「だからって「あーもー！いい加減にしなよ2人とも！！」

私が一喝すると2人は息を巻きながら睨み合った。あー言えばこう言うとはまさにこれだよ！一体何回ビックリマーク使ってると思っただんだ！！

「今は痴話喧嘩してる場合じゃないでしょ？」

「「痴話喧嘩じゃない！！」」

2人はタイミングぴったりで言うと、お互いを睨んでからふんっ！と顔を背けた。こんなに息が合っただからやっぱり痴話喧嘩ですよ。

「じゃあそれでいいよ。とにかく今は自分のやるべきことを考えてよ。ジャックはダンさん達の安全確認、私達はヤン婆の所に戻る、いいねアンヌ」

「でも・・・」

「ジャック、アンヌは私が連れてくから早く村に行つて」

「おー、頼む」

「うん」

「ジャック・・・!!」

ジャックは私にアンヌを任せるとさっさと村へ向かった。私がアンヌの腕を掴んでいると、アンヌは私の方を向き訴えてきた

「お願いサーイェ行かせて！」

「駄目」

「そんな・・・」

「ジャックも言つてたでしょ。危ないって。そんな所に戦えない私達が言つても邪魔になるだけだよ」

「・・・」

「心配なのは分かるけど、今はみんなを信じて待とうよ」

私がアンヌの両肩に手を置きじつと見つめていると、アンヌは静かに俯いた。

「じゃあ・・・行こう」

「・・・」

私達がヤン婆の家に戻ろうとした時、背後が光った。

「・・・何？」

振り返ると村から大きな炎が上がっていた。それは燃え移っているわけではないが何者からか攻撃を受けているかもしれない。

「お父さん・・・」

その炎を見たアンヌは再び村へと走りだそうとしたが、私は強くアンヌの腕を掴んで引き留めた。

「放して！！」

「駄目だってば！！危険すぎる！」

「どうしてよ！何で分かってくれないのよ！！！！」

アンヌは苛立ちが溜まりどんどんヒステリックになってきた。

「アンヌ、さつきも言ったけどここは危ないの。私達が居ても邪魔なだけだよ。皆のために出来ることは逃げて皆をバルフ退治に集中させる事。そしてこの事をヤン婆に伝える事が私達に出来ることだよ」

「・・・・・・・・」

ようやく納得してくれたかな？と思ったけど、アンヌは思いきり腕を振って私から離れると、顔を歪めて私を睨んだ。

「確かに私に力はないし、出来ることは少ないかも知れないけど・・・それでも皆の役に立ちたいの！私だって皆を、村を守りたいの！！」

そう叫ぶアン又は赤い顔をして肩で息をしていた。完全に頭に血が上ってる。面倒な事になったな……。ここで揉めてる場合じゃないのに。

「アン又落ち着いて……」

「危ないのは分かってるよ！けどそんな危ない中で戦っている皆だって危ないのは一緒じゃない！！だったら私だって一緒に戦う！！」

「だけどアンヌ！今は我慢して。私達はこの事をヤン婆に伝えなきゃいけないの。だから」

「サーイエには分からないわよ……」

「え？」

さっきまで声を荒げていたアンヌが低く静かな声で呟いた。そして拳を握り締めると震える声で叫んだ。

「サーイエに私の気持ちなんて分からないよ！！大切な人を失うかもしれない気持ちなんて分かるはずないわよ！！！！」

アンヌは涙を流して悲痛に叫ぶと駆け出していった。私はその背中を、呆然と見つめる事しか出来なかった。

大切な人を失う気持ちが分からない？そんなの……嫌というほど分かっているよ。

私は今まであったものの全てを失ったんだ。家族、友人、生活、……

私の、世界。もう手に入れる事は出来ないんだ。それを認めたくないから現実逃避したりしたけど、結局何も変わらなかった。

全てを失った私は何？全てが無いなら私も無いも同然。

だけど、私はここで前向きに生きようと思った。今までのものと引き換えに、前では出来なかったことをしようと、自分の力で生きようと思った。そうしないと、何か目標が無いとやっていけなかった。その目標どおり前向きに生きたら、大切な人たちが出来た。だけどまた大切なものを失いかけている。もう失いたくない。失いたくないから、守りたいから逃げていたのに…どうして、分かってくれないのかなあ…？

「キヤアアアア！！！」

アンヌの叫び声で我に返った。ボーっとしてる場合じゃない！全速力で村に向かうと、そこには巨大バルフがいた。

「何あれ・・・」

普通のバルフはマウンテンバイクくらいなのに対し、巨大バルフはトラックくらいある程の大きさだった。歩くたびに爪が地面に食い込み、呼吸をする度に口から炎がゆらゆらしていた。火炎放射器みたい…。

巨大バルフは余裕なのか襲い掛かるどころか品定めをする様に周りを見ていた。男性人は遠くから囲み攻撃すタイミングを考えあぐねていると、巨大バルフはふと、何かに気付いたように私達を見てきた。え、何？

そして体の向きを変えると私達の方向へ寄ってきた。マージーでー・・？

「二人とも逃げろ!!」

私は呆けているアンヌを引っ張った。

「アンヌいつまで固まってるの!!」

「え、あ・・・」

「逃げるよ!!」

私達が走り出すと、巨大バルフも私達に向かって走り出した。私はアンヌの腕を引っ張って逃げようとしたけどすぐに追いつかれてしまった。

「ちっ!」

「サーイエ!!」

もしかしてこれがバルフのボスなの?こんな村人が戦うレベルじゃないよ!!勇者来いよ勇者!!!ていうか騎士団何してんだよクソ!!!

巨大バルフが噛み付こうとした時、ジャックが炎の玉を飛ばして巨大バルフを攻撃した。攻撃は全然効いていないようだが、巨大バルフの狙いが私達からジャックの方へ向かった。ジャックが巨大バルフの気を逸らしてくれたのだ。サンクス!!しかしそれは無駄に終わった。

「ジャック!!」

バルフがジャックの方へ向かうとした時、アンヌが大声でジャックの名を叫んでしまったのだ。そのせいで巨大バルフの気を再び私達の方へ戻してしまった。

「ちっ！」

せっかくジャックが気を逸らしてくれたのに！私は体を軽くしてアンヌを引つ張り走り出した。当然巨大バルフは私達を追ってきた。あーもうこの状況で一体どこに逃げれば良いのよ！こうなったらヤン婆の家にも戻れないし、村にもいけない。

苛立ちながら暗い林の中を走っていると、アンヌの呼吸が激しくなっている事に気がついた。体を軽くしているとはいえ、走り続けるのはキツイ。それにどうやら私より体力の消耗が激しいようだった。このままじゃまずいな…。食べられる前にアンヌが死んじゃう。村にも戻れないし…。仕方ない。アンヌとここで別れよう。その方がどちらにとっても安全だ。

私はスピードを落とすと、アンヌと茂みの中に入った。

「アンヌ、大丈夫？」

顔をのぞき込むと、アンヌはただゼゼエと喘いでいた。やっぱりこれ以上走るのは無理そうだ。

「・・・アンヌはここで隠れてて」

「・・・・・・・・？・・・」

彼女は返事をせずに、苦しそうに視線を私に寄越した。

「私はあの巨大バルフをここから引き離すから、その間にヤン婆の所に戻って」

私がそう告げるとアンヌは弱弱しく私の腕を掴んだ。どこまでも他人の心配をする彼女に思わず苦笑した。

「大丈夫だよ。戦うことはしないから。ほら私、足速いでしょ？前も逃げ切れたし。騎士団の人達が来るまでの間のただの時間稼ぎだから心配しないで」

「だけ・・・ど...」

アンヌが泣きそうな顔をして何かを言おうとした時、巨大バルフの足音が大きくなってきた。

「お願い、この事をヤン婆に伝えるために逃げて。逃げることは悪い事じゃないの。あなたが逃げることで私達が助かるかもしれない。それはダンさんもジャックも思ってたことだと思う。だから逃げて」
「サー・・・イエ...」
「さ、早く早く！」

私は明るくアンヌの背中を押した。

「じゃあよろしく頼んだよ」

笑顔でアンヌにお願いすると、彼女は意を決したようで力強く頷き、少しよろけながらも走ってヤン婆の家へと向かっていった。

これで一安心、かな。私はアンヌが走り去るのを見届けると。ズシンと響く足音のする方へ、体を軽くしながらゆっくりと向かっていった。

第19話：ようやく来たか！（前書き）

この話には若干グロテスクな表現が含まれています。苦手な方はご注意ください。

第19話：ようやく来たか！

本当は、怖い。心臓はドクドクと脈打つ音がやたらよく聞こえ、緊張で体も少し震えている。だけどみんなのためにもやらなくちゃ。ただ騎士団が来るまで引きつけていればいい。元から私はここにいなかった存在だから死んでもいいの。今までだって迷惑ばかり掛けてきた。だからそう、死んでもいいの…。

私は自分に言い聞かせた。死んでもいいと思うと、だんだん気持ちが悪くなってきた。今なら何でも出来そうなのがする。開き直りつつやつか。よし、やるぞ私。気合いをいれて前を見ると、低い唸り声と赤い目が暗闇の中でぎらついていた。

「さあ、来なよ。クソ犬野郎」

私はニヒルに笑って挑発した。口が悪いのはご愛嬌。もうこれは直らないんだよね。直す気もないけど。巨大バルフは挑発が分かったのか知らないが飛びかかってきた。

「ほらほらこつちだよ！」

巨大バルフは唸り声を上げながら私を捕まえようとしている。私は村に近づけないように、やつの周りをうろちよろして気を引くことにした。うろちよろする私を捕まえようとするが、私はそれをふわりと交わす。今回のイメージは『羽』。必死に掴もうとすればする程、羽は手をすり抜けてしまう。力づくで私を捕まえようとする巨大バルフには、私を捕らえることは出来ないだろう。

だんだん魔法を使う事になれてきた気がする。呪文を唱えなくて

もイメージするだけで魔法が使えるなんて便利だね。さすがチー
ト。体を軽くするのは『疾走』、宙に浮く時は『無重力』、そして
今回は『羽』のイメージ。想像通りに出来るなんて、なんて楽なん
だ。普通だったら必死で避けてるところだろうけど、今の羽のイメ
ージではあんまり体力を使うことがないからかなり楽だ。ふわふわ
ふわふわと勝手に避ける。傍から見たら犬が一匹でおもちゃで遊ん
でるみたいな状況だね。巨大バルフもかなり必死だし。ほーれ捕ま
えてみなさーい。

かれこれ10分になるかな？体感だから分からないけど結構長い
間こいつの相手をしていると思う。だけど騎士団はなかなか来ない
何してんだよ騎士団。そんなに国の平和は守れるのかよ。という
か早く見たいんですけど。やっぱりヨーロッパっていったら騎士で、
日本だったら忍者と侍でしょ。ここまできて来ないとかマジありえ
ないからね！

余裕こいて考え事をしていたら、巨大バルフは私を捕まえられな
い事に痺れを切らしたらしく、大きく唸ると私に向かって思いつき
り炎を吐き出した。

「うわあっ！！！」

危ねえー！！羽みたいにしておいて良かったー！

巨大バルフは炎を吐き出したが、熱風も強かったので私は吹き飛
ばされて炎が当たることはなかったのだ。だが炎は周りの木々に燃
え移ってしまった。うわーどうしよう…。これはマズいぞ。熱いし
周りに広がったら危ないじゃん！私が考えている最中にも巨大バ
ルフは炎を撒き散らしながら捕まえようとしている。かーなーり不
機嫌だね。だけどちょっと鬱陶しいな。

私はジャンプすると巨大バルフも一緒にジャンプした。けど私はそのまま空中に留まったので届かない。私がさらに届かない場所に移動したため、巨大バルフはより大きな炎を吐きまくって大暴れし始めた。そのせいでより広範囲に炎が広がってしまい、この短時間でもう半径500mくらいに広がっている。このままではみんながいる方にも燃え広がってしまうだろう。だからと言って今更私が巨大バルフの所に行っても手遅れだろうし。

もしかなくともこれは私のせい？…やばいな。何とかしないと。まずはこれ以上広がらないように消火を…て、ん？

燃え広がっていく炎を目で追っていると、光っている何かが移動している。

…もしかして騎士団！？ようやく来たのか！来るの遅えよ！！あれ、なんか光りが分裂した。・・どうやら消火係と退治係に別れたっぽいな。片方のグループが炎をちまちま消し始めて、もう片方はそのままこちらに向かって進んで来ている。けどそのまま来るのは危ないよ。焼け死ぬ。それでも平気そうにしているって事は魔法を使ってんのかな…。こういう時魔法は便利だね。騎士団なのに魔法ばかり使って…ハリ・タか。

彼らが巨大バルフを退治してくれるなら、私は燃え広がっていく炎の消火をしよう。今のペースを見る限り、消火係の騎士たちでは時間が掛かってしまうだろう。

どうやって消火しようかな…。火事って言えばやっぱり水かな。大量の水を一気にぶっかければ大丈夫か？けどそれじゃ今度は水害になるか。騎士達が水流に巻き込まれたら、彼らが危ないし。うーんじゃあ凍らすか。そうすれば彼等が水流に巻き込まれることは無いだろうし。属性的にも火の反対は氷だからね。氷をイメージしなきゃ。イメージはそうだな…『瞬間冷凍』。

私は周りの炎を見渡し、目を瞑った。一瞬で冷凍するんだ。炎だけを。

ゆつくりと目を開けると、今まで燃えていた場所に炎は無く、焦げて黒ずんでいる痕があった。やった成功！！これでひとまず安心だ。

私は胸をなでおろすと再び周りを見渡した。騎士団の人達の方を見ると、どうやら戸惑っているようだった。まあいきなり周りの炎が消えたらビックリするよね。だけど消えた理由が私だと知らない……というかまだ私の存在に気付いてない。……まあいいや。私の事に気付いて揉めるの嫌だし。遠くで最後まで見届けたらヤン婆の家に行こう。私は気付かれないように更に高い場所に浮上した。高さは大体ビルの5階くらいの高さだ。見守るならこれくらいが一番見やすい。

巨大バルフの方を見るとさっきのように暴れ回っていないかった。

急に炎が消えた事に対し警戒しているようだ。炎が消えた事により見通しが良くなったので、騎士団が正確に巨大バルフの位置を捉えた。数人の騎士達が走り出すと明かりと殺気に気付いたのか、巨大バルフも騎士団のいる方角へと体の向きを変えた。

巨大バルフの元へと辿り着いた騎士達は、果敢に切りかかるが巨大バルフは攻撃が当たる前に騎士たちを風ぎ飛ばした。そして次から襲い掛かってくる騎士たちに向かって炎を吐き出した。うわー大丈夫かなあ……あ、大丈夫だ。

炎が当たったので焼け焦げてしまふんじゃないかと思ったが、魔法が施してあるのかそんなに酷い火傷には至らなかったようだ。また巨大バルフが追撃をしようとした時、数本の氷柱が飛んできてやつに刺さった。おおー！初ヒット！！

後から追いついてきた消火係の騎士たちと合流した。騎士達は黒い鎧と白い鎧の騎士と2種類いた。うむ、黒騎士と白騎士か。やっぱり能力が違うのかな？

黒騎士がバスケットボールくらいの大きさの炎の玉を飛ばすとそ

のまま巨大バルフに突っ込んでいた。巨大バルフはそれを尾で払い退けると、向かってきた黒騎士に炎を吐きかけた。黒騎士は炎に怯まずそのまま突っ込むと、淡い黄色の光を纏った剣を振り下ろした。斬りつけられた巨大バルフは一瞬体の動きが止まり、背後から別の黒騎士が淡く白い光を放つ剣でやつの体を斬りつけた。奴の傷口はどんどん凍り始め、その範囲はかなりゆっくりだが徐々に広がっていった。巨大バルフは暴れながら炎を撒き散らしていると、奴の足元が急にぬかるみバランスを崩した。

そこを狙って上から氷柱が降りかかり、巨大バルフが倒れた瞬間に最後一撃、大きな剣を持った黒騎士がそれを振り下ろし、奴の喉元を完全に断ち切った。巨大バルフはくぐもった唸り声を上げると、血飛沫を上げてドスンと地面に倒れた。

…凄い。それしか言えない。彼等の動きや攻撃を見てもゲームのような激しいアクション。ただど一番の違いは、迫力。ゲームじゃ味わえない緊張感。ぞくぞくした。もちろん良い意味じゃない。その光景に残酷に思う反面、仕方がないという諦めが混同している。さつきと同じだ。生きるためだからと言えばそうだけど…何だかやるせない。

冷めた気持ちを抱えながら私はヤン婆の家に戻ろうとした時、騎士団のもとにダンさんとジャックが走りながらやってきた。

「騎士様ありがとうございます！」

ダンさんが大きな剣を持った黒騎士に駆け寄った。黒騎士は剣を片手で持つて一振りすると、剣は一瞬で消えた。・・すげえ。持ち運びに不便そうか思ったけど、それなら全然楽じゃん。

「礼には及ばない。お前たちがダンとジャックか？」

「はい。そうですか…」

「お前たちの事はアンヌという娘からヤンデール様の家で報告を受けた」

「そうですか・・・」

ヤンデールってヤン婆の事か？へえーそんな名前だったんだ。初知り。それよりアンヌが無事にヤン婆の家に着いてよかった。

「あとサーイエという者がいると聞いたんだが・・・」

ん？私？

「サーイエ？あの子はアンヌと一緒にではなかったんですか!？」

「ああ。彼女が言うには騎士団が来るまでバルファアを引き付けておくと言っていたらしい」

「そんな...じゃあもしかしてサーイエは・・・」

「ダンさん、ここにいますよ」

私は空から声をかけた。ここで出て行かないと心配してるダンさんが可哀相だからね。

「サーイエ!!!!」

「おま・・・っ!!」

私が無事だった事に驚いているのか、それとも空から降りてきたことに驚いているのか分からないが、皆とにかく驚いていた。騒つく中に私が降りてくると、騎士達は自然と場所を開けた。・・・何か嫌な感じだ。気味悪がり、異様なものを見る視線。確かに私は皆と比べると変わっているかもしれないけど、やっぱり気分が良いものではない。私は内心ため息を吐き、それを無視して私はダンさんとジャックの元へ向かった。

「二人とも無事でよかったよ」

「あ、ああ。サーイエモな…」

「お前・・・なんで空に?…」

二人は驚きと戸惑いが入り混じったような顔をしていた。あー・・・
もしかして武空術はここでは無いんですかねー?

「・・・お前がサーイエ・アマーノウか?」

背後から低く落ち着いた声が聞こえた。振り向くと、さつき巨大バルフを倒した黒騎士が立っていた。背が高く多分180後半で、顔は冑を被っているから分からない。だけど多分団長かなんだろう。鎧が他の黒騎士に比べて装飾が多くてかつこ良い。できれば素敵なおっさんがいいな。だけど声的にはおっさんじゃない。良い声だけとおっさんじゃない。仕方ないからイケメンで妥協してあげるよ。ていうか私、真面目に質問している団長に対して色々失礼だな。

「はい、そうです・・・」

「捕らえろ」

「はっ!」

「はあ?!」

何だそれ!関係ないこと考えてた罰ですか!?後ろに控えていた騎士は命令を受けるとすばやく私を取り押さえた。両腕を後ろで取り押さえると縛られた。手首がなんかぴりぴりして軽く麻痺している。そして首も押さえつけられるとひんやりとした感覚がした。金属か何か付けられたみたいだった。・・・すごい嚴重だな。

「サーイエ！騎士様、一体これはどういうことなんですか！？」

「ヤンデール様から命令を受けている。彼女を発見したら捕らえるように、と」

「どうして彼女が！」

「詳しい事はヤンデール様から伺え」

「そんな！」

ダンさんは必死で団長に詰め寄るが、黒騎士はそれ以上答えようとしなかった。

「ダンさん、私なら大丈夫です。戻りましょう、ヤン婆さんの家へ」

「サーイエ……」

私が落ち着いて笑顔を返すと、ダンさんはそれ以上何も言わず大人しくなった。

「・・・行くぞ」

これからどうなるんだろう。けど捕まえるって事はあんまり良いことじゃないよね。さっきのヤン婆の態度から見ても分かる。期待しないほうが良いだろう。

私は溜息を吐くと、黒騎士の指示に従って私達はヤン婆の家に向かった。

第20話：さよならイセア

ヤン婆の家までの道のりはとても空気が重苦しかった。多分私の扱い方が良く分らないんだと思う。実際私の両隣の黒騎士の態度・というか空気が変。まあ、仕方ないか。自分で言うのも何だけど、外見的にも能力的にもまったくの未知数だからね。あー、こういうのほんと嫌。面倒くさい。私の事が気味悪いならいつその事一人で歩かせてくれ。・・って言える立場じゃないか。そんな空気の中黙々と歩き、ようやくヤン婆の家に着いた。

「ダン！サーイエ！！」

「ジャックも！無事でよかったわ」

「ほんと…」

カカン又さんを始め、ロン君やミーナ、他の村の皆も到着した私達を見て嬉しそうに迎えてくれたが、捕まってる私の姿を見てみんなは騒ついた。

「サーイエどうしたんだい！？」

カカン又さん達が私達の所へ来ようとした時、ヤン婆の家の警護をしていたであろう騎士が引きとめた。

「なにするんだい！」

「カカン又、それ以上サーイエに近づいてはならん」

皆の後ろに控えていたヤン婆はゆっくりと前に出てきた。そして

団長の前に来ると御礼を述べた。

「ヤン婆・・・！？」

「騎士団の方々、ご苦労じゃった」

「いえ、駆けつけるのが遅くなり申し訳ありませんでした」

ホント遅いよ。もうちょっと早く着てくれたらみんなが戦わずに済んだのに。

「サーイエ・アマーノウは如何なさいますか？」

「…始末しなさい」

始末。殺せて事か…。何でいきなり始末されなきゃいけないんだよ。具体的にご説明頂きたい。

「どうしてだよヤン婆！！！！」

「この者は魔者^{まもの}じゃ」

「こいつが魔者・・・！？」

まもの？マモノ？魔物？…魔者？何それおいしいの？…って今更か。もう驚くのも面倒くさいよ。ヤン婆は重々しく口を開いた。

「護神の森から出てきたと聞いた時から不思議に思っていたんじゃ。今まで森から生還した者は居ないからのう。そして実際にお前に会って、疑問は疑念となった」

…そうですか。

「赤と黒の髪、そして何とも知り得ない不思議な力を持っている。神聖なる存在か、それとも悪しき存在か図りかねていたが…今日で

それが明確になったわい」

… そうですか。

「お前たちも見たじやろう。バルファアのような凶暴な魔獣を従え遊び、空を飛ぶような者をワシは見たことも無い」

… そうですか・・て、え!?

「お前は神聖な者などではない! 愚かにも神聖な色を纏った魔者じや!!! これ以上この村に災いを撒き散らす事は許さん!!! 早く消え去れい!!!」

消え去れい!!!・・ってかなり怒ってるけど、私遊んでないよ! 真面目に引き付けてただけじゃん! やっぱり傍目から見たら遊んでるようにしか見えなかったのか! それに武空術も無いのか。はあ、DBの世界だったら良かったのに・・ていうか何でヤン婆は居なかったのにその事知ってんの? やっぱり魔女だからか、そうなのか!

「ヤン婆なんて事言うの! サーイエはそんなじゃないわ!」

「そうだヤン婆、サーイエは私達のために一人で頑張っていたのに・・」

「頑張っていたじゃと・・? あやつがバルファアを村に連れてきたんじゃない!」

「なっ!!!」

「あやつが居なければ村が襲われる事も無かった! 誰も傷つく事は無かったんじゃない! 全てあやつのおかげじゃ!!! 早く・・早く始末するんじゃない!!!」

「・・・・」

アンヌとダンさんがヤン婆に講義するけど、ヤン婆は全く耳を貸さない。それどころか逆に興奮して私を恐ろしいほどに睨みつけてきた。ヤン婆は私のせいにしないと気がすまないらしい。・・・仕方ないか。

集団生活の中で異質は気味悪がられる。自分たちと同じけど・・・違うから。だから嫌悪を抱き排除する。それはどこの世界でも・・・一緒なんだね。

それなら・・・もういいや。終わりにしよう。

「分かりました。どうぞ私を始末してください」

「ええっ!？」

「そんなっ・・・」

「サーイエー! お前は何を言ってるんだい!？」

「お前は何も悪い事はしていない、そうだろ?」

必死になるラウム家の皆には申し訳ない。だけでもうこれ以上みんなに迷惑掛けるのは嫌なんだ。

「実際はどうなんだ」

黒騎士の団長が私の前に立ち、静かに尋ねた。団長の一言で周り
は自然と静かになった。ありがとよ団長。

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれません」

「・・・どういう意味だ」

「バルフが何故村に来たのかは私にも分からないからです。偶然かもしれないし、私がいるせいかもしれません」

「・・・」

皆が黙って私の話を真剣に聞いている。本当、何でなんだろうね？私はいつでも迷惑を掛けることしか出来ない。前の世界でも、今の世界でも。

「理由が分からずとも私が居るせいで揉め事を起こすなどの問題を起こし、ご迷惑を掛けてしまいました。私はもともと皆さんに迷惑が掛かるようでしたらここを出て行くつもりでした。そしてこのような結果を招いてしまいました。だから私はどのような処罰でも甘んじてお受けいたします」
「.....」

私は団長を真っ直ぐ見据えると、はつきりと断言した。団長は何も言わず黙って私を見下ろしている。

「サーイエ、私達は・・」

「分かった」

「騎士様!？」

ダンさんの言葉を遮り黒騎士は返事をする、後ろへ振り返りヤン婆のほうに体を向けた。

「ヤンデール様、サーイエ・アマーノウは城へ連行致します」

「なんじゃと？」

ヤン婆がいかにも不服そうに眉間に皺を寄せて団長を睨んだ。

「何故すぐに始末しないのじゃ!!こやつは魔者ぞ!!」

「そうかもしれませんが、今はまだ断言できません」

「今日のこやつの行動を見れば分かるじやろう！それにこの目、この髪、見たことも無い容姿！！この世の者とは思えん！！」

…そりやこの世界の住人じゃありませんから。私が内心ツツコンでいると、今度は後ろから白騎士が出てきた。

「しかしヤンデール様、彼女は赤い髪をお持ちです。何かしら王族に関係性があるかもしれません。それに特殊な力を持っているよなので、ここで勝手に始末をして後に問題が起きるといけません。そのような危険が伴う問題は、私どもでは判断を致しかねます。国王陛下のご意見をお聞きしたのち、彼女の処遇を後ほどご連絡させていただきます」

ずいぶん饒舌だなこの白騎士…。それに喋り方が上品。声も高過ぎず低すぎず聞き取りやすい良い声だ。団長にしろこの白騎士にしろ、何で騎士なのにこんな良い声をしているんだ。声優になれよ。

「それでよろしいですか？ヤンデール様」

白騎士はヤン婆に了承を求めたが、これは了承と言うより決定事項だろ。なかなか黒いな。

「…分かった」

「ご理解頂き有り難うございます」

すげえこの白騎士！あの煩いヤン婆を丸め込んだ！やっぱり騎士じゃなくて政治家とかになりなよ！

「では彼女は私達が責任を持って連行致しますのでご安心下さい」
「……」

一応了承したけどヤン婆は不服のようだ。まあそりゃそうか。死刑になるはずだった奴が生きてるんだからね。そんな不機嫌なヤン婆に白騎士は優しく話しかけた。

「どうやら今日のヤンデール様はお疲れのようにお見受けいたします。貴方様の魅力である冷静さと聡明さが薄れているように感じます。少しこの問題の事から離れて、どうぞごゆっくりお気をお安め下さい」

「…もう良い。早くこやつを城に連れて行け」
「御意」

そう言うつとヤン婆は家の裏へと消えていった。

すげええこの白騎士！アフターケアもばっちりだ！！あんたやっぱり騎士じゃなくてホストになりなよ！タラシっぱいし。私が感心して白騎士を見ていると、白騎士と目が合った。その時何故か笑われた感じがした。…なんだこいつ失礼だな。やっぱりホストじゃなくて結婚詐欺師とかの方が良いかもしれない。

その間に黒騎士団長はそして良く通る毅然とした声で指示を出した。

「一番隊は俺と一緒に城に戻るぞ。残りの黒騎士はロイスの指示に従って怪我人の救護、及び破壊された村の修理を手伝え」

「はっ！」

「じゃあロイス、あとは任せた」

「ああ」

団長は側に居た黒騎士に声を掛けると、さっきの白騎士がやって

きた。

「じゃあ私たち白騎士は怪我人の治療をするよ」

「ああ。よろしくな」

この白騎士は団長だったのか。言われて見れば確かに黒騎士団長と同じく鎧の装飾がかっこいい。まあそれくらいじゃないとヤン婆の前に出る事は出来ないよね。一人納得している間に、騎士達はそれぞれの仕事を始め始めた。その様子を見ていたら、横から出てきた黒騎士に麻袋のような物を被せられた。

「うわ!」

「被っている」

「え?」

「いいから黙って被っている」

「…はい」

黒騎士団長に言われてしまったので私は大人しく言うことを聞いた。幸いこの麻袋には目の部分に穴が開いていたので前を見る事は出来た。はぁ・被ってやつても良いけど、せめて説明してくれてもいいんじゃないですか?そんな文句を考えていたら両隣の黒騎士に引つ張られ歩き出した。その時アンヌが私を呼び止めた。

「サーイエー!!」

「アンヌ…」

アンヌはまた泣きそうな顔をしていた。今日はそんな顔してばかりだね…。アンヌに続き、他の人達も私の元へ行こうとしたが、やはり騎士に止められてしまった。

「騎士様お願いします！サーイエを連れて行かないで下さい！！」

「あの子は本当にいいこなんです！」

「騎士様！！」

みんなが必死に訴えかけている。私のために。

「…すみません、ここからでいいので少し話をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

ここでみんなの声に答えない訳にはいかない。私がじつと目で訴えていると、団長は黙って止まってくれた。

「数分だけだぞ」

「有り難うございます」

数分でもいい。多分ここに居られるのは今日で最後だろう。ちゃんとお別れしなきゃね…。

「ダンさん、カカンヌさん、アンヌ、ロン君。私を家族のように接してくれてありがとう。村のみんなも今までお世話になりました。

私は少しでもここで暮らす事が出来て幸せでした。何も知らない私に親切に一から教えてくれて、本当に嬉しかったです」

「サーイエ……」

「こんな風にみんなに迷惑掛けてごめんなさい。私はもう村には戻れないけど、みんなの事は絶対に忘れない。今までありがとう」

目頭が熱い。視界がだんだんぼやけてきた。

ここでなら平穏生活が送れると思ったけど、いつまでもここで平和に過ごせるとは思って無かったよ。こんな特殊設定まみれの私が

いつまでも村で平和に過ごせるわけがないって。だけどダンさん達の仕事の手伝いをしたり、カカン又さんやアン又とご飯を作ったり、みんなと遊んだりして過ごす日々がすごく楽しくて…一日一日を平和に過ごせた事に幸せだった。だからいつもこの生活が続くように祈ってた。平穏な日々が続きますようにって。だけどやっぱり…無理だった。

「・・・じゃあね」

これでみんなと、この村とはお別れだ。私の言葉と共に目から流れ出た涙は、ごわついた麻袋に沁みこんでいった。

「サ－イエー!!」

アン又が悲しみに顔を歪めて私の名を叫んだ。

「ごめんなさい! さっきは・・・酷い事言ってごめんなさい!...!!」
「アン又...」

アン又はぼろぼろ涙を流しながら謝った。きつとさっきの事を言ってるんだろう。

「大丈夫だよ」

私はアン又に向かって微笑んだけど、麻袋で顔を覆っているから表情は分からないだろうな。

「正直に言えばあの言葉はけっこう傷ついたけど…あれはアン又が

みんなの事を思ってた言葉だから」

アンヌはしゃくり上げながらも黙って私の言葉を聞いていた。

「私とアンヌは考え方が違うんだもん。考え方が違うから衝突する事もある。だけど違うからこそお互いの事を分かり合おうとするし、思いやる事も出来る。今だってこうやって分かりあうことが出来たでしょ？だから私は大丈夫。もう泣かないで」

「サーイエ・あ、ありがと……。ありがとう……！！」
「うん……」

アンヌは震える声でお礼を言うと、そのまま泣き崩れてしまった。最後に見るのが泣き顔なんて悲しいな。だけどこの状況で笑ってなんて言うのは酷だよな。

次に会うことが出来るなら笑顔が見たい。だけどそれはきっと叶わないんだろうな。殺されるか、生きていてもヤン婆がいる限り戻る事は許されないだろう。きっとみんなも私が戻ってくる事が出来ない事が分かっているからこそ、こんなに必死で引き止めてくれているんだろう。

「遠くにいても……皆の幸せを祈っているよ」

もう戻れない。いや、もう戻らない。それなら前に進まなきゃ。たとえそれが茨の道でも、ってね。私のやりたいようにやるよ。さ、気持ちを切り替えなきゃ。

「お時間をくださり有り難うございました。行きましょう」
「……………」

団長は黙って私を見てきたので、私も見返した。お互いに表情を読み取る事は出来ない。

「行くぞ」

黒騎士団長が声を掛けると私達はヤン婆の向かって行った家の裏に向かった。

第21話：そしてプロローグに戻る

家の裏には庭のように広い空間があり、私達は庭の真ん中に行き、ヤン婆は端に寄った。

「ヤンデイル様、お願いします」

「ああ」

ヤン婆がぶつぶつ呟いている。だけど声が枯れているし小さいからよく聞き取れない。呪文か。しばらく呟いていると地面に魔方陣が現れ光り始めた。どんどん強くなっていき私達を覆うくらい大きくなると、ヤン婆の姿が見えなくなり、一瞬で視界が切り替わった。私は気がつけば石造りの部屋の中にいた。

すげー…もしかして瞬間移動？全然移動した感覚が無いのに違う場所にいるって不思議な感じだ。けどするなら目を閉じてからしたいかな。ちよつと目がチカチカする。部屋の中には警備兵のような騎士2人がいた。普通の騎士よりも見た目がシンプルだからそんなに偉くはないのかな？ていうかそんなにそんなに強くなさそう。

「ご苦労様です」

「ああ。バルフによるイセア襲撃の容疑者だ。最下牢に連れて行く」

「…了解しました」

警備兵は急に緊張した面持ちになった。最下牢ってそんなにやばいところなんですか？…まあいいや。行かなきゃ分かんないし。

私達はしばらくくねくねした石の廊下を歩き、何度か階段を下りていった。道には暗かったが、私達が歩くと通る時に明かりがつき、通り過ぎると明かりが消えた。エコだね。ここじゃ関係ないか。石だし。

幾つかの牢屋の前を通り過ぎ、歩き続けると重たそうな鉄のドアの前に辿り着いた。すごい頑丈そうなドアだな。中に入るとさらに下に降りる階段があつて、その先にまた鉄のドアがあり、そこを開けるとようやく牢屋があつた。牢屋は厚い鉄の格子に囲まれているので、力ずくで逃げ出す事は不可能だろう。

かなり嚴重だなあ……。これじゃあ逃げる気もなくなるね。まあ元から逃げる気はないけどさ。だけどこの牢屋、入り口が無い。普通だったら必ず格子にドアがあるはずなのにこの牢屋には無い。どうやって入るんだ？不思議に牢屋を見ていると、私の左隣にいる黒騎士が団長に言った。

「なあガイシス、こいつの見張り番は俺にやらせてくれよ」
「マーリンド」

なんだこいつ偉そうだな。まだ若そうなのに。何ていうか雰囲気が高校生くさいんだよな。ガイシスって団長の事だよね？平が上司に向かってそんな口調で良いのか？野球とかの厳しい部活だったらぶん殴られるぞ。

「俺なら申し分ないだろ？」
「確かにそうだが……」
「じゃあ俺がやる」
「だがお前は……」
「大丈夫だつて！心配すんなよ」

黒騎士がへらへら明るく言うと、団長は大きく溜息を吐いた。

「分かった。じゃあ見張りはお前に任せる」

「おう」

「いいのか？ガイシス」

今度は私の右隣にいる黒騎士が言った。∴この騎士団つて上下関係無いの？

「こいつは言い出したら聞かないだろう」

「それもそうだな」

団長と騎士がやれやれといったように見張り番をする騎士を見た。この騎士はマイペースというか自己中なんだな。色々と諦められているっぽい。

「じゃあ決まりな」

そう言つと番人係を引き受けた騎士は私を引っ張り牢屋の前に連れて行き、牢屋の格子の一本を掴むと小さな声で呟き始めた。至近距離だったので、今回は何を言っているのか聞くことが出来た。

「オレが番人ダ。オレ以外のな二者にもローに入つた者を逃ガス事はデキない。そしてオレの許可なく逃ガスことは許サない。ひラケ、キヨーこなるロー獄よ」

・・・は？何こいつ。素面で何言つてんの？君は中二病なの？そして何で若干カタコト？外人だからか。だけど今まで普通に喋ってたよね。今更外人ぶられても…。

痛い台詞を言つた後に、牢屋の格子から手を離すと、最初に触れた格子から順番に広がるように消えていった。ええ、あれで開く

の？これは恥ずかしいだろう！ていうか痛い！痛すぎる！！…ただどこは異世界だもんな。私、呪文必要なくて本当に良かった。

「ほら入れよ」

返事を聞かずに番人係の騎士は私を牢屋の中に引っ張り込んだ。そして騎士は私を離すと麻袋を引っ張った。ちょ、急に引っ張らないでよ！！本当にフリーダムだなお前！

「う、うう…」

あー…外れた。髪ボサボサになったけどちょっとスッキリ。別に苦しいわけじゃないんだけど、髪が天パだから袋の中がもあもあするんだよ。それに空気も籠るし。マスクしている時と同じ感じ。何となく息苦しいんだよね。

「お前…」

「…どうかしましたか？」

「いや…ん？お前耳にピアスか？」

「あ、はい」

「ふーん…」

『ふーん…』って何だよ。自分で話題振っておいで『ふーん…』で終わらせるなよ。騎士は私の耳についているピアスに触ったりして観察していた。出来れば触って欲しくないんですがね。騎士は一通り観察すると離してくれた。そして騎士が牢屋から出ると自然と先程消えた格子が現れ私を囚えた。自動ドアか。

「ルーカス、もういいぜ」

「ああ」

番人係の騎士が先程私の右隣に居た騎士に合図すると、私の両腕を拘束していた手錠のような物が消えた。外れてもまだちよつと痺れが残ってる。私が両腕を見ていると、今度は両手首に鎖につながれた枷が表れ始め、姿を完全に現れると重さを感じた。両足にも繋がれている。何で？！

「お前には一晩ここで過ごしてもらつ」

「え？」

「先程お前の事を陛下にお伝えしたら陛下との謁見を許された。今夜はもう遅いので明日の午前に陛下と謁見してもらつ」

「え、そう・・・ですか・・・」

そんな簡単に王様に会えるのか！一般庶民が王に会えるとか滅多にないよ！！ええー・・・。何を話すんだよ。申し訳ないが私は特に話す事ないよ。

「あの、陛下と謁見と申されましたが、一体どのような事をお話すればよろしいのですか？」

「陛下の質問に答える。そして真実を話せ」

「・・・」

「そしてその質問の答えによってお前の処罰が決まる」

「そうですか・・・」

はあ……。だよねやっぱり。真実を話せといわれても・・・話したくないよー！異世界から来ましたなんて信じるわけないし！私だって初対面の人に『私は宇宙人なんです』とか言われたら、ラリってると思うし。

「以上だ。マーリンド、後はまかせた」

「おう」

「あのっ！一つだけ質問してもよろしいでしょうか？」

「何だ」

「私はもうイセアに戻る事は出来ないんですね？」

「・・・」

「ラウム家に私の荷物があります。それを持ってきていただだけませんか？」

「何故だ」

「あそこにあっても必要ないでしょう？それにあれを形見のように扱われるのが嫌なんです」

半分ホントで半分ウソ。あれを残しておくことで皆が私の事を思い出して辛い思いをされるのも嫌だけど、本当はバッグの中にケータイとかmp3とか入ってるんだよ。それを見つけれられるとヤバイと思うし…。バッグ自体は見つかっても大丈夫な様に布に包んであるんだけどさ、中身見られたらアウトだ。

「お願いします」

「分かった。後で連絡をとってそれをこちらに持ってきてもらおう」「有り難うございます」

この団長って何気に融通が利くよね。厳しいけど優しい感じがするし。良い男だな。

「だが、荷物はこちらで中身を確認してから処分する」

「え？」

「以上だ」

それだけ言うとは張り番以外の騎士達は出ていってしまった。そんな団長ー！酷いよー！さっきの優しさを見せてくれよー！！鉄の

ドアが閉まるのを見ると、私は溜息を吐きと、牢屋の壁際に座った。これも仕方ないことか…。警察だって家宅搜索で荷物を押収するもんな。うーん、どうしよう…。あ、魔法だ。強くイメージしたら中身を見られないように出来るかも！どんなイメージにしようかな…。よし、私が触れなきゃ布が取れないようにしよ。うーん…石でいいや。カチコチで開かない、みたいな。そうすれば無理やりぶっ壊して開けようとしても開かないだろうし。私は体操座りをしながら俯いて念を送った。バッグよー、布よー、石になれー。…『デューー口』とか言うべきですか？よし、もういいかな。

謁見ってどんな感じになるんだろう？質問されるのは別にいいんだけど、ちゃんと答えなかったらどうなるんだ？拷問とか尋問されるのかな…。痛いのは嫌だな…。それならいつその事すばつと殺してくれ。どうせ異世界から来ましたなんて言っても誰も信じないでしょ。今までそんな人はいないってレイが言ってたし。そうなる私は死刑になるのか？

だけど私ってここで死んだらどうなるんだろう？死んだら元の世界に戻れるとかそういうオプションだったりして。だけど戻れなかったら死ぬんだよね。…まあ、それならそれでいいか。

「おい」

ぼーっと考え事をしていたら見張り番の騎士が声を掛けてきた。

「…何ですか？」

「お前は何でそんな容姿をしているんだ？」

「はい？」

「だから何でそんな容姿をしてんのかって言ってんだよ」

騎士は椅子の腕で腕を組み、話しかけてきた。だけど別にそんな高圧的じゃなくて普通にこの人の性格っぽい。いかにもやんちゃ系。

「何でって言われても…生まれつきだからです」

「はあ？」

「だってそうでしょう？逆に貴方は聞かれたら何て答えるんですか？」

「え？そうだなあ…生まれつきだな」

「でしょう？」

騎士は腕を組んだままうーんと唸ってる。この騎士結構アホっぽい。親近感があるわ。

「じゃあ親はどうなんだ？」

「私にとつては『普通』です」

「普通？」

「はい。普通なんて概念はそれぞれ基準が違うでしょう」

「…じゃあお前はその『普通』の親に似てる訳？」

「そうですね、目が父似で口元が母似です」

「じゃあ髪色も親に似てるのか？」

「ええそうです」

「ふーん…」

似てるって言っても黒髪だけだね。日本人だったら頑張ってもちよっと茶色っぽいくらいにしかないし。お父さんは少し茶色がかってたけど、お母さんが黒髪で私にそれが遺伝されたから、髪を染めた時はショック受けてたなあ…。特にお父さんが。それはそれで面白かったけど。

騎士は頭の後ろに腕を組み、ゆっくりと私の方へ近づいてくると、しゃがんで牢屋越しに私をじっと見てきた。

「お前はさー、皆と違う外見で嫌じゃねえのか？」

「うーん、好奇心な目で見られるのは嫌ですね」

「やっぱり嫌なんだ」

「そうですね」

「…じゃあ、親を恨んだりしなかったのか？」

「それは無いです」

「何でだよ」

「だって親だって私をこういう風に生みたくて生んだんじゃないんですから。自然に授かったんですよ。それに私を大切にしてくれました。だから生んでくれた事には感謝しています。ただ…」

「ただ？」

「…生まれてきて迷惑を掛けた事には常に申し訳なく感じています」
「……」

特に病気になってからはひしひしと感じている。常に心配をかけているし、私の居ないところで泣いていることも知ってる。お母さんは『こんな風に生んでごめんね』と泣いて謝ってきた。私のほうが謝りたかった。好きな人との間に授かった子供なのに、こんな風に生まれて、迷惑をかけてごめんなさい。精神的にも経済的にも負担を掛けているのに、それでも私が退院するたびに嬉しそうにおいしい物を食べさせてくれたし、やりたい事をやらせてくれた。そんな優しい両親に…私は迷惑を掛けてばかりだ。何もできない自分が悔しかった。

「泣くなよ」

「え？」

「泣くなよ」

「…泣いてませんよ」

気がつけば私は俯いてた。騎士は私が泣いていると思ったらしい。目は潤んでるけど泣いてないよ！

「そうかよ。けど泣くなよ！俺が泣かしたみたいになるだろ」
「そうですね」

騎士なりの気遣いに思わず顔が綻んだ。この騎士も何だかんだで優しいね。騎士の方を見ると、騎士がぽかーんと私を見ていた。…なんか久しぶりのぽかーんだな

「…どうかしましたか？」

「え？！いや、別に！！…あ！お前初めて笑ったよな！」

「へ？ああ、そう…ですね」

確かに騎士たちの居るところでは笑ってないな。ていうか笑うところ無かったし。アンヌに向かって笑ったけど麻袋を被ってたからなあ。見えないわな。

「…変ですか？」

「は？そうじゃねえよ。ただ女は笑ってた方が良くんだよ！」

「まあ…そうですね」

確かに女の子の笑顔はかわいいな。めぎ●しの愛ちゃんの笑顔なんか朝からかなり癒される。私の笑顔なんて冷笑がほとんどだけど。

「だけど私の笑顔は今日で見納めですよ」

「え？」

「明日私は死刑になるんでしょう？」

「…それはまだ分からねえだろ」
「そうですね。だけどどっちにしろ良い事は無さそうですね」
「……………」

そこから騎士は黙ってしまった。

「だけど最後に騎士様と話せて楽しかったですよ」
「…お前さあ」
「はい？」
「死ぬのが怖くないのか？」

怖い、かあ…。

「そうですね。少し怖いです。だけど…このまま生きているよりかマシです」
「何でだよ。お前生んでくれた事に感謝してるって言ってたじゃねえか」

「ええ、そうですね。感謝はしています」
「じゃあ何で…」
「生きる理由が、意味が無いからです」
「え？」

「私にはもう大切なものは何もあります。だったら生きている意味もあります」

「……………」

「それに、死んだらどうなるのか興味があります」
「興味？」

「はい」
「どんなんだよ」
「…内緒です」

元の世界に戻るか、なんて言えないよ！

「何だよ教えるよ！」

「だめですー」

「何でだよー！」

「えー？女は秘密を着飾って美しくなるものなのだからですよ」

「はあ？何だそれ」

「とある方の格言ですね」

「…お前喋る気ないだろ」

「はい」

「ていうかお前なんで俺のときは敬語で喋らねんだよ」

「そうですねー・・・親近感があるからですよ」

「・・・そうかよ」

「はい」

にこにこ笑顔で答えると、騎士は溜息を吐いて椅子に戻っていった。

「はあ・・・」

思わず溜息が出る。そりゃ牢獄の中いきいきしてる人なんていないよね。動くと手足に着けられた重たい枷が鳴る。これを見ると改めて自分が捕まってるんだなあって思う。別に悪いことしてないのに。

冷えた牢獄の壁に凭れかかると、格子つきの窓から覗く月を見た。満月じゃないけど綺麗な月だなあ・・・。私はいきいきしてないけど、鬱々もしてないのさ。まあ、なるようにしかならないよね。お迎えが来るまでのんびりと待ちますか。

ん？そういえばここって地下だよな？なのに何で月が見えるんだ？

「すみません騎士様」

「…なんだよ」

なかなか子供っぽいな……。拗ねちゃってるよ。

「ここって地下ですよね？」

「それがなんだよ」

「なぜ地下なのに月が見えるのですか？」

「あー、それはこの牢獄に入ってるやつ精神安定のためだ」

「へえー」

確かに一人でずっとこんな所に押し込まれてたら気が滅入ってラリッちゃう人がいてもおかしくないか。

「そうなんですか」

「ああ」

「月、綺麗ですね」

「そうだな」

私は再び窓に目を向けると、最後になるであろう月を目に焼き付けた。

第21話：そしてプロローグに戻る（後書き）

一応伏字&元ネタ解説

- ・デューロ - ハリポタで使われた物を石化させる呪文。
- ・め●まし - 朝のニュース番組。
- ・女は秘密を着飾って… - 某探偵マンガに出てくるキャラクターの口癖。 A s e c r e t m a k e s a w o m e n w o m e n .

分かりにくいものがあつたらすみません…;

第22話：人の話をちゃんと聞け！

「おい、起きろ」

「ん…」

目を開けると昨日の騎士が目の前にいた。どうやら昨日気付かなかったに眠っていたらしい。もう窓からは朝日が差し込んでいる。

「…おはようございます」

「ああ」

なんだか今日の騎士は昨日に比べてそっけない。何でだろう。私が寝てたからかなあ？

「そろそろ謁見の時間だ。謁見の間行くからこれを被っている」
「あ、はい」

そういつて手渡されたのは昨日の麻袋。はあ、今日も蒸れそう。私が麻袋を被ると、ちょうど他の黒騎士たちが入ってきた。

「マーリンドお疲れ」

「ああ」

「何か変わった事はなかったか？」

「特にねえな」

「わかった。じゃあ行くぞ」

「はい…」

昨日の見張りをしていた騎士が私の腕を取ると、後ろに持つていき、昨日のように拘束した。もう一人騎士が来ると、私の左腕を取って彼らに連れて行かれ、昨日の魔方阵がある所まで行くと黒騎士団長がいた。今日もばつちり装備をしているので顔が分からない。ここの黒騎士達はみんな甲冑を被りっぱなしで苦しくないのか？蒸れて禿げるぞ。

「じゃあ俺の仕事ここまでだから。いつてらっしゃーい」

見張り番をしていた騎士はここで止まってあくびをしながら手をヒラヒラと振っていた。もしかして昨日寝てないのか？・・・まあ、見張りの仕事だもんね。お疲れ。

「それでは行くぞ」

「ああ」

黒騎士達は私の四方を囲むように魔方阵に立った。なんか威圧感で空気が薄くなったような気がする。

私達は魔方阵の中に入ると、もとからうつすら光っていた魔方阵の光りが強くなり、質素な部屋の中に移動した。

部屋の中には神のようなものが描かれている大きな宗教画が飾ってあった。真つ赤で波打つような長髪を持った軍神マルスみたいな人……いや神か。それが球状のもの……多分世界だと思うけど。それを包み込むように抱きしめている絵だった。

「今から謁見の間に向かう。これでお前の処罰が決まる。祈るなら今のうちだぞ」

「いえ、結構です」

私が即答した事に騎士達は吃驚していた。だって私この神様なんて知らないし。ていうか普段だってそんな信仰心なんて無いからね。頼りにしてるのは困ってる時にお願ひする神様くらいだよ。

「では行くぞ」

「はい」

騎士に続いて部屋を出て行った。しばらく外に出ている長い廊下を歩き、城の中に入ると広く煌びやかな廊下を歩いていった。またそこを真っ直ぐ進んで行くと、だんだん廊下の両端に騎士が等間隔で立っていた。団長がいるので通るたびに緑色の騎士たちが敬礼をしてくる。お勤めご苦労様です。そしてようやく、大きな両開きのドアに辿り着いた。

「黒鷹騎士団団長、ガイシス・マンガランド。先日のイセア襲撃事件の容疑者を国王陛下との謁見のために連れてきた」

「ご苦労様です。どうぞお入り下さい」

団長が用件をいうと、扉の両隣に控えていた騎士たちが敬礼をして扉を開けてくれた。

中に入ると、白と金を基調にした部屋だった。玉座まではグリーンカーペットが敷かれていて、その玉座は20段くらいの階段の上にあった。かつこいいなあ……。

玉座を見してみるとまだ王様は来ていなかった。しばらく待つみたいだ。

「跪いて頭を下げていろ」

「…はい」

跪くとか…初めて言われた。これが女王様だったらSMっぽいな。『跪いて足をお舐め！』みたいな。もちろんその気は無いですけどね。団長を始め他の騎士たちは私の両隣に一列に並んで王様を待っていた。

しばらくすると甲冑の足音が聞こえ、隣にいる黒騎士たちが片足を着いて跪いた。

「よい、顔を上げよ」

「はっ！！」

返事をする黒騎士達は立ち上がり気をつけをした。王様は声を聞く限りで優雅だけど威圧感がある。

「その者が先日のイセア襲撃の犯人か？」

ん？王様とは違った声がある。こっちは感情が籠ってなくて冷たい感じがする。

「はい、しかしまだ犯人かどうかということははっきりとはしておりません」

「話はザビロニスから聞いている。見せよ」

「は」

団長が返事をする、私の麻袋を外した。王様の前のせいか、前より扱いが丁寧になってる。最初から優しくしてよ。ふう、外れた。だけど団長の手がそのまま乗ってるから顔を上げるなって意味か。へいへい。

「ほう…確かに話通り赤髪と黒い瞳を持っているな。女、顔を上げ

よ」

あー嫌だ。あげたくないよー。けど命令には逆らえないんだよね…。

私は黙って顔を上げた。顔を上げるとまず階段が目に入り、上へ視線を動かすと、玉座に佇む王がいた。明るい赤色の髪の毛を三つ編みにして肩へ流し、瞳が青緑できりつとした目。鼻筋が通っている肌が白いので美しい。だけど男性らしさがちゃんとある。隣にいるのはおそらく宰相だろう。宰相もけっこう肌の色が白く、落着いた青の髪を肩くらいまで伸ばしている。目がエメラルドグリーンで綺麗だけど、鋭い目が冷たさを感じる。…総合的に二人とも若いしカッコイイ。さすが異世界。トリップ。目の保養。

「ほう、瞳も『黒』か…」

あ、忘れてた。二人が美形だから見入っちゃったよ。王様は珍獣を見るように私を見て、宰相は冷たく見下ろしていた。いくら美形でもこういう風に見られるのは嫌だ。宰相は冷静に私に詰問してきた。

「サーイエと言ったか」

「はい」

「正直に答える。お前はバルファールとバルフを操りイセアを襲わせたのか？」

「違います」

襲わせるわけないっつーの！どうして自分で自分の居場所を失くす馬鹿がいるんだよ！！

「ではバルファールと遊んでいたという報告は何なのだ」

「傍目から見たら遊んでいるように見えたのかもかもしれませんが、断じて私は遊んでいません」

あれでも私なりにバルファアを引き付けてたんだよ！おもちゃのようになつてね！！

「その後上空から降りてきたという報告があるが、それは本当か？」

「はい」

「何故お前は上空にいたんだ」

「バルファアが炎を吐き暴れ始めたので上空に避難しました」

「では、お前は上空で何をしていたのだ」

「燃え広がる炎を消火しました」

「ほう、お前が広範囲の炎を消火したのか？」

「はい」

だって燃え広がったら村が危ないし。この質問にはみんな興味深く私を見た。えー？…消火しちゃいけなかったんですか？

「では何故それ程の力を持ちながらバルファアを倒さなかったのだ。お前一人であればどの広範囲が消火出来るのならバルファアなど簡単に始末する事が出来ただろう」

「それは・・・どうしようか考えていた時に騎士団の方がこちらに向かっている姿が見えたので、騎士様におまかせしようと思い、消火のみに専念いたしました」

「そうか、だがお前の判断で少なからず我らの騎士も負傷した。それが狙いだっただのではないのか」

「え？」

「バルファアを操り、村を襲わせることで我が国の騎士団を呼び出し、国の戦力を削ぐ。そしてその隙を突いて我が国を攻め落とすというそういう命令を受けていた。もしくは自分が国を支配しよう」と

目論んでいた。違うか？」

「……………」

何なんだこいつ。人の話を全然信じて無いじゃん。とにかく私を始末したいのか。はあ…面倒くさい。

「そうです…」

「…やはりそうか。お前はどの…」

「そう言えば、信じてもらえるんですね」

私が冷たく宰相を睨みつけると、宰相も私を見下ろした。

「いくら私が真実を話したところで貴方が信じようとしなければそれは全て嘘に変わり、嘘が真実になります。貴方の思っている通りにしたいのでしたらこの謁見には意味がありません。殺すなら早く殺してください」

何で変わらない結果をわざわざ必死になって弁解しなくちゃいけないんだよ。面倒くさい。宰相は表情が変わらないので何を考えているのか分からない。この鉄仮面が。お前は顔筋ちゃんと使っているの？

私が宰相を睨み続けていると、隣りで大人しく話を聞いていた王様が口を開いた。

「お前を簡単には殺しは無い。真実が分からないままお前を殺しては、真相は闇の中に落ちてしまい、その後の我が国に何かしら影響を与えるかもしれんからな」

「そうですか。ですがこの様な話は不毛です。如何なさるおつもりですか？」

「全てを話せ。余はお前を信じよう」

「え・・・？」

「陛下・・・」

「お前は黙っている」

王様の厳粛な命令に宰相は黙った。良いぞ王様もつと言え！！
ていつかもういつその事こいつをクビにしてくれ！！！！

「陛下は、本当に私の言うことを信じてくれるのですか？」

「ああ、信じよう」

「例えそれが、とても信じられるような話でなくとも信じてくれる
のですか？」

「お前の目を見れば分かる。信じられないような話でもそれが真実
なら信じよう」

王様は頼もしく私に向かって笑いかけてくれた。…王様、あんた
は本当に良い男だ！外見も良くて中身も男前！！素晴らしいね！！！！

「…私を信用してくださり有り難うございます。では私も陛下を信
用して、真実をお話します。しかし、この話は陛下のみに話させて
頂きます」

「何だと？」

何だとじゃねえーよ。お前に一番話したくねえーんだよ。最初か
ら信じてもないやつを簡単に信用できるほど私の心は広くない。
名前なんだっけ…。えーとザビロー…あーもうザビーでいいや。ザ
ビーは出てけ。布教活動でもしてるよ。そして禿げる。

「私が話す事はとても重大な事です。軽々しく話すことは出来るも
のでは無いと考えております。真相は陛下のご判断でお伝え下さい」

「分かった。そういう訳だ。お前たちは全員出て行け」

「しかし陛下……」

「私はサーイエを信用すると言った。約束は守る」

「御意。それでは失礼いたします」

ザビーが出て行こうとしたとき、王様が引きとめた。

「盗聴するような真似は許さんぞ」

「……」

お前する気満々だったのか！！ホント抜け目ないな！

「失礼いたします」

王様の命令で部屋には人っ子一人いなくなった。王はぶつぶつ呟き終わると、椅子の上で面白そうな顔をして私を見た。

「これで誰も入ってこれん。さあ、邪魔者は居なくなった。話を聞こう」

「はい」

「緊張せずとも良い。気楽に話せ」

「え？」

「その様に畏まっていたら言いたい事も言えぬだろう」

「はあ……」

「それで良い」

さっきまで厳粛な感じだったのに一気に砕けたな。ガールズトークみたいにつきつきしてるよ。まあいいや、そっちのが話しやすいし。

「ではそうさせてもらいます」

私は大きく息を吸うと、ゆっくり息を吐いた。

「私は、異世界から来ました」

第23話：最悪な処罰

「…異世界からきた、だと？」

「はい、そうです。信じられないでしょう？」

余りに予想外の話に王様もビックリしたらしく、さっきの真面目な顔に戻った。

「確かに、とても信じられるようなものではないな…」

「だから確認したんですよ。本当に信じてくれるのかを」

「………」

「私だってそんな事言う人が目の前に現れたら頭がおかしいんじゃないかって疑いますよ。だけどこれが真実です」

「………」

「もし陛下が信じられないようでしたらこの話はここで終わりにします。先程も言いましたが意味が無いし面倒くさいんです」

私が溜息を吐くと、王様は肩を揺らした。

「…何ですか？」

「いや、すまない。余りに素直な反応が面白くてな」

「最後ですからね。だったら開き直るしかありませんよ」

「そうか…。だがまだ最後とは決まっていけないだろう。余はお前を信じると言った。最後まで話を聞かなければ判断をする事が出来ないからな」

「そうですね…」

王様の笑顔は人をからかって笑っているような笑いではなくどこか温かな笑いだった。こんな風に人を信じられる王様はすごいな。こんな王様なら国も安泰だと思う。

「話を続けよ」

「・・・はい。私は人間が住む地球という星の日本という国に住んでいました。私は持病を持っていて、今回はその発作が起きて意識無くなり、次に目覚めた時には神聖樹海に居たんです」

「お前は神聖樹海に居たのか!？」

「え、ええ。そうですけど・・・」

「護神の森から着たとは聞いていたが、まさか神聖樹海から来たとはな・・・」

「やっぱり神聖樹海は特別なんですね」

「ああ、神聖樹海は王族でさえ立ち入る事は出来ぬ。そこまでの道中が厳しい事もあるが、あそこには我が世界の神々が住まうといわれている場所だ」

「・・・罰当たりですみません」

「いや・・・お前も分からないなら仕方がない」

本当ならかなりやばい事だろうけど、王様は苦笑しながらも許してくれた。ありがとう王様！

「お前は人間の居た世界から来たと言っていたが、お前も人間なのか？」

「はい」

「では何故魔法が使えるのだ」

「それは多分森の中で出会った人のおかげかと」

「…誰だそれは？」

「えーと、倒れている私を介抱してくれた人が居たんです。その人にこの世界の事を少し教えてもらい、えと…まあ色々あって森を出て行くときにおまじないを掛けてくれたんですよ。それ以来魔法が使えるようになりました。あと多分言葉が通じるのもそのせいだと思いますよ」

そうだよ、レイに舐められまくってから使えるようになったんだよなあ…。レイ元氣かな…。

「ほう…その者は一体何者なのだ」

「分かりません。突然ふらりと現れ、ふらりと消えていつてしまったので」

「そうか…」

王様は難しい顔で考えていたけど、何となくレイの話を他の人に話したくなかった。やっぱりレイの存在はこの世界でも特別だと思うから、ここで話したら迷惑が掛かるような気がした。

「魔人でも人間に魔法を使えるようにするのような力を持っている者がいるとは聞いた事がない。ではそのまじないのせいでお前の髪もそのような色に変化したのか？」

「いや、これは自前です」

「自前なのか？」

「はい。私の世界では髪の毛を染める事が出来るんですよ。だから私は赤に染めたんですけど、髪の毛が伸びてきたので元の髪色である黒が生えてきてこんな風になったんです」

「それでこうなったのか…。我々魔人は髪の色を変える事が出来ぬのだ。髪はそれぞれのメージが関係しているので意図的に変化させる事は出来ない」

「なるほど。だから私の髪が珍しいんですね」

「ああ、しかも聖と魔という特別な色だからな」

「私の世界ではそんな設定無いし、普通の色だからそんな風に好奇の目で見られて本当に迷惑です」

「ふっ、そうか」

王様はまた楽しそうに笑ってる。他人事だと思つてー・・・！！

「お前の世界で簡単に異世界に来る事が出来るのか？」

「出来る訳ありませんよ。仮に出来たとしても私は行くとは思いませんね」

「では何故お前はここに居るのだ？」

「それは私が知りたいですよ！」

「そうか…。では戻る事も出来ないのか」

「その方法が分からない限り戻る事など出来ないでしょう。森の人の話だと、この世界に異世界から人が来たなんて前例は無いのでしよう？」

「ああ、その様な話は文献でも読んだ事が無いな」

「ですよ…。じゃあ戻る方法はほぼ無いと考えても良いと思います。しかし唯一考えられるとしたら、また発作が起きるのを待つしかないでしょうね」

「そうだな…。お前の発作は頻繁に起こるではないのか？」

「いつ来るかは分かりません。それをいつまでも期待して大人しく待つても仕方が無いでしょう？ だったら前向きにこの世界で暮らしていく事にしたんです」

「なかなか良い考えだな」

王様は微笑んだけど、複雑な気持ちだった。

「だからイセアで平穩に暮らしたかったのですが…」

「今回の事件が起きた、か」

「はい。例えば私が犯人でなくても、容姿や能力の事を考えたら私が疑われて当然です」

「そうだな・・しかしお前はそれで良いのか？」

「別に。元からいつまでも平和に暮らせるとは思っていなかったのだ」

「何故お前はそう思ったのだ」

「それはですねー・・」

はあ…。王様の目が私を射抜くように見ているけど、私は思いきり溜息を吐くしかなかった。

「私の世界にはトリップ小説と言うジャンルの物語があるんですよ。そのお話の主人公は大体は神に選ばれたとかふとした出来事で異世界に行く事になるんです」

「ほう」

「それで異世界に行った主人公は特殊な能力や魅力があったり、特別な存在として世界を救う勇者になったり、巫女として崇められたり、お城で美形に囲まれモテモテになって暮らしたりして異世界で生活するんです。そして成長してもこの世界に帰るか、幸せに異世界で暮らすんです」

「ほう…」

「だけど私はそんな王道トリップは絶対に嫌です。世界を救うために冒険したり、お城で美形に囲まれて暮らす気ありません」

王様は面白そうに興味を示した。

「それは何故だ。幸せに暮らせるなら良いだろう？」

「読んでいる側なら良いけど自分がその立場になるのは嫌なんですよ！例えば私が勇者だったとしても、私は命懸けで世界を救うほどの正義感もやる気ありません。そして巫女にだったとしても、大した人間でもないのに崇められても気持ち悪いだけです。それからお城で暮らしたとしても、私には魅力もないし、下らない陰謀やどろどろの恋愛に巻き込まれるのも真っ平ごめんです。だから私は平和に小さな村で暮らしたかったんです」

「くっ・・・ははははは！！」

「陛下！これは私にとっては異世界で暮らすにあたって重要な問題なんですよ！」

「ああ、そうだな。実に気持ちの良い意見だな」

「・・・それはどうも」

「しかし、自分の能力を生かそうとは思わないのか」

「例え能力があつたとしても、自分の意にそぐわない物だったら要らないでしょう？私は一般の平均的な力があれば良かったんです。

「ただ私は見た目も能力も普通ではありません。だから普通の暮らしはいつか終わってしまうと思っていました」

「・・・」

「私がいる事で村の皆を危険に晒し、迷惑を掛ける形になってしまったのなら私が事件の犯人です。どのような処罰でもお受けします」

「・・・随分、潔いのだな」

王様の言葉は独り言のように聞こえた。それくらい静かで、私には寂しく聞こえた。

「私はもう、何も持っていないです。だから殺すならそれで構いません」

「それなら何故、その様に悲しそうな顔をするのだ」
「え？」

王様は玉座から立ち上がり、ゆっくりと階段を下りてきた。

「お前は命懸けで救うほどの正義感はないと言ったが、お前は村に迷惑を掛けた責任を取って死のうとしている。それは規模も形も違えども、お前の貫く正義ではないのか？」

「……」

「そして自分の事を大した人間では無いと言ったが、他人を思いやり自らを責め、死を覚悟できる者を余は大した人間だと思う」

「……」

「それから魅力が無いとも言ったが、自分の意志をはっきりと伝えるその強さと時折見せる儂さは十分な魅力の一つだろう」

「……」

「そしてやはり……」

王様は跪いている私の目の前に立つと、しゃがんで目線を合わせた。

「お前は美しい」

「……は？」

何言っただこいつ。顔が良くても目が悪いんじゃないか？

王様は私の顎に手を添えると、観察し始めた。

「猫のように愛くるしい目に長い睫。柔らかそうな桃色の唇に肌理細やかな肌。我ら魔人とは違う人種だが、余はお前を美しく思う。」

「陛下…それ褒めすぎです。嘘はいけませんよ」

「余は嘘を吐いてまで女の機嫌など取らぬ。ん？よく見ると目も黒ではなく濃い茶色だな……」

近い近い近いっ！！！！

「陛下顔が近いです！」

「気にするな」

「気にします！！」

「ふっ、照れておるのか。可愛い反応もするのだな」

「な、とにかく離れてください！」

陛下はクスクス笑ってどんどん顔を近づいてくるので私が後ろに逃げた。

「何だ、つまらん」

「私は面白さを求めているんじゃないんです！私の処罰を決めるための謁見です！！」

まったくこの世界のイケメンは顔を近づけるのが好きなのか！！

「ああ、その事はもう決めた」

決めてたのか！だったら遊んでないで早く言ってよ！！

「お前への処罰は…」

さあ、来い…。

「我が城で生活させる」

「はあ？！何でそれなんですか！？」

「余がお前を気に入った」

「だからってそれが罪人に出す処罰じゃないでしょう！」

「お前は城で暮らすのが嫌だと言っていただろう。それなら十分な罰だ」

この王様は……！！罰というより罰ゲームみたいな事するな……！！
負けて溜まるか！

「だけど私のようなものを城で暮らさせたら陛下の立場だって危なくなるし、碌な事ありませんよ……！！」

「だからと言ってお前はこの先行く当てはあるのか？イセアにはもう戻れないし、徐々に黒髪が生えてくるのなら人々はお前を気味悪がり、どこにも行けなくなるだろう」

「そう……かもしれません……」

「それが嫌なら余の妃になるか？」

「謹んでお断りします」

それなら普通に城で生活した方がマシだああ……！！

「即答で断るとはいい度胸だな」

「有り難うございます」

王様は爆笑してるよ。最初の威厳のある態度はどこへ行ったんだ……！！

「お前はどのような処罰でも受けると言っていただろう。大人しく城で暮らせ」

「……………」

「分かったな？」

「……………はい」

王様の高らかな笑い声が謁見の間に響いた。こんな王道トリップ生活が始めるなんて……バルフ・バルフの馬鹿やロー……！！

第二章 プロローグ：ついに始まってしまった…

「今日から俺たちの仲間になったサーイエ・アマーノウだ。みんな仲良くしてやれよ」

「…よろしく願います」

私は目の前にいる騎士達に挨拶をした。小学校の転校生か！！当然ほとんどの騎士達是不安がっているか気味悪がっている。悪かったね気持ち悪くて。だけどこれもある意味転校生への洗礼だよね…。

「おいサーイエ、笑顔が足りねーぞ！！」

「そりやすみませんねえ…マーリンドさん」

もとからあんまりよろしくしたくないから仕方ないじゃん！

「確かにマーリンドの言う通り、笑顔の方が早く皆と仲良くなれるぞ」

「そうだな、大変だと思うけど頑張りなよ」

「サボるならばれない様にサボれよ」

「サボるだなんて！サーイエ、そんな事絶対にだめですよ！！」

私の周りで声を掛けてくれるのは種類の違う美形ばかり…。やんちゃ系、爽やか系、穏やか系、アンニュイ系にかわいい系。……もうこれ乙ゲー作れるんじゃない？

「ハア…」

コントローラーを握り締めるプレイヤー側に戻りたい…。

第1話：やっぱりイケメンばかり

なぜこんな事になったのか、それは私が城で暮らすことが決まった日に遡る…。

「サーイエ、いつまで落ち込んでおるのだ。城で暮らすというのなら早々に準備を始めるぞ」

「…はい」

誰のせいで落ち込んでると思ってんだよ！王様は気にせず階段に座り込み話を進めた。

「余はお前の事をザビロニスに話すことにする」

ザビロニスって…

「あの宰相にですか？」

「ああ。あれでも余の右腕なのでな。このように重大な事を隠しておけん」

「そうですか…」

「嫌か？」

「…別に構いません。これから暮らす上で必要な事ですから」

仕方ないよね。それで少しでもマシに暮らせるなら我慢するよ。

「先程のあやつの態度だが、許してやってくれ」
「え？」

王様を見ると苦笑していた。普通王様がこんな風に簡単に謝るものなのか？

「あやつは昔、イセアに住んでいたのだな。村を荒らされて少なからず苛立っておったのだろう」

「・・・そうですか」

それは申し訳ないことをしたな…。私を犯人だと思っているんなら許せないだろうね。もし私が彼の立場だったら簡単に許せる事が出来るだろうか？…難しいかも。

「分かりました。その事は水に流します」

「うむ」

「ただ問題は彼が私の言うことを信じてくれるかという事ですな」
「そうだな。信じさせる証拠があれば良いのだが…」

証拠かあ…、あ。

「あります！」

「何がある？」

「私の荷物です。私の荷物の中に今まで向こうで生活していた物が入っているんです。それを見たら信じれくれるんじゃないでしょうか？」

「それはどこにあるのだ」

「騎士様に私の荷物を村からこちらへ持ってきてくれるように頼んであります。昨日頼んだので多分もう持ってきてきていると思う」

んですが…」

「そうか、では後ほど詳しい事を決める時に持ってきてもらおう」
「はい」

「ではとりあえず謁見はここまでにする。余は他にもやらなければ
ならない仕事があるのでな」

「そうですよね…」

「そりゃそうだ。王様だもん。いきなり罪人の謁見が入って迷惑だ
よね。」

「お忙しい中お時間を割いてくださりありがとうございます」
「気にするな。なかなか面白かったからな」

王様はにんまりと私の方を見た。そんな基準で良いのか。

「では詳しい話は夜にする。部屋を用意するのでそこで大人しく待
つておれ」

「分かりました。だけど牢屋じゃなくて良いんですか？」

「お前はもう罪人ではなからう？ならば部屋で良い」

「分かりました。・・ありがとうございます」

王様は私に笑いかけると、ぶつぶつと呪文を呟いて魔法を解いた。

「話は終わった。ザビロニス」

「は」

すぐに返事が聞こえ、ドアが開きザビーがやってきた。

「この者を城で生活させる事にした」

「……」

ザビーは返事をせず、目を見張って王様を見ていた。少しは表情変えられるんだね。とは言っても筋肉は全く使っていないけど。

「詳しい話は公務が終わってからする。この者を最重要客室に連れて行け」

「陛下…」

「それと村から持ってきたというこの者の荷物もそこへ運べ。くれぐれも扱いには気をつけよ。良いな？」

王様はザビーを見つめ、ザビーもしばらく王様を見ると、ようやく返事をした。

「御意」

「では余は仕事をしに行く。後は頼んだぞ」
「は」

どこからともなく最初に王様と一緒に居たらしい赤い鎧の騎士たちが入ってきて、王様と共に部屋を出て行った。その態度は毅然としていて、さっきまで気軽に話していた雰囲気など微塵もなかった。切り替えが早い…。さすが王様だ。

その様子をぼーっと見ていると、ザビーが降りてきて私に近づくと冷たく私を見下ろした。何だよ、やんのか？

私も負けじと見返すとザビーは何も言わず目を逸らし、黒騎士たちを呼んだ。

「黒騎士」

ザビーが呼ぶと私を連れてきた団長達が入ってきた。

「この者をアイ塔の最重要客室へ案内しろ。陛下が来られるまでそこで過ごしてもらうので部屋の警備をせよ。そして陛下から扱いは気をつけよとお言葉があった。失礼の無いように」
「は！」

失礼の無いようにって あんたのその態度はもうすでに失礼だね。淡々とやる気ありませんみたいな感じでいうなよ。説得力ないなあ。

ザビーはそれだけを伝えたと、とつとと部屋を出て行ってしまった。余程私と一緒に居たくないらしい。まあお互い様だけだね。それにしても最重要客室って…何でそんな部屋を用意してくれるんだ王様！普通の部屋でいいのに！！

「申し訳ありませんが移動のためこれをお被り下さい」

「あ、はい」

私が王様に心の中で文句を言っていると、団長が麻袋を見せた。最初より喋り方が丁寧になってる！だけど、今までの団長の話し方も嫌いじゃないよ。ザビーみたいに見下してるわけではないし、軽蔑しているようでもなかった。粗野でも気持ちの問題なのさ。私は大人しく麻袋を被せられた。

「ではこちらへどうぞ」

私はまた黒騎士に囲まれ移動を始めた。謁見の間から出てしばらく歩くと、床にサークルが描かれていた場所に来た。その両隣には緑の騎士が立っていた。

「アイ塔の客室広間まで頼む」

「了解いたしました」

私達がサークルの中に立つと、緑の騎士達が呪文を唱え始めた。するとサークルには魔法陣が現れ始め、全て描かれえると一瞬で豪華な作りの広間に移動をした。

「しばらく歩きます。私に着いてきて下さい」

しばらく歩いていくとまた緑の騎士とサークルがあり、さっきと同じように瞬間移動をした。それを3回位繰り返すと、もつと豪華で品のある廊下に出た。そこはもう歩くことはなく、すぐ傍に両開きのドアが一つだけあった。

「こちらになります」

ドアの前に着くと、私の両隣にいた騎士達が左右のドアを開けてくれた。

「うわぁ……」

部屋の中はクリーム色を基調にした部屋で、細やかな壁画が描かれていた。天使はいなかったが、可愛い妖精や植物が描かれていた。そして透かしのように薄っすらと、さっき見た宗教画の神様も描かれていた。

すごい！超豪華！！さすが最重要客室だね！これはもう世界遺産の領域だわ。ヴェルサイユ宮殿みたいに豪華だよ。あの絵、描くの大変だっただろうな！。

「どうぞお入り下さい」

「あ、すみません」

こんな所でアホみたいに口を開けて見てちゃいけないよね。
私が部屋に入るとドアが閉まった。そして腕の拘束を解き、丁寧に麻袋を外してくれた。

「有り難うございます」

「御礼など必要ありません。私達の今までの無礼をどうぞお許し下さい」

団長を含め、他の騎士達の私に頭を垂れた。うわあ 何だこれ。

「あの、その事の方こそ気になさらないで下さい。私は罪人として捕まっていたので当然の態度です」

「……」

「それに皆さんは私を貶めるような態度ではありませんでした。私はその事がとても嬉しかったです。有り難うございます」

いま思えば、けどね。普通だったらもつと怒鳴り散らされたりぶん殴られてもおかしくなかっただろう。だけどみんな紳士だし。

「お許し頂き、有り難うございます。ここでは私達黒騎士がこの部屋の警備、警護をさせて頂きます」

「分かりました」

警備と言えば聞こえは良いけど、実際は監視だよ。夜までこの部屋で軟禁か……。まあ牢屋よりかマシか。あそこはお尻が痛くなるからね。

「ご挨拶が遅れました。私はこれよりアマーノウ様の警護をさせて頂く黒鷲騎士団・一番隊隊長兼、団長のガイシス・マングライドと申します」

団長はようやく兜を外して自己紹介してくれたのだが…かなりのイケメンだった。スポーツマンタイプのイケメンだね。

健康的に焼けた肌に金の短髪で、瞳は濃い水色。逞しく精悍な顔つきなのに、目に少し愛嬌があるので、近寄りがたいという感じがしない。それに真っ直ぐに見つめる視線は、この人の性格を表している様だった。身長も190cmくらいはあるだろうなあ…。大きくてこんだだけ面が良ければモテるよなあ。まあ私はずっと見ていると首が痛くなりそうなんだけどね。

「どうかなされましたか？」

「あー…いえ、何でもありません。こちらこそよろしくお願いします」

「こちらに居るのはこの部屋の警備を行うロイス・テレミスと、ルーカス・フォンドです」

団長が二人の騎士を紹介すると、二人も冑を外して自己紹介した。

「ご紹介に預かりました黒鷲騎士団・二番隊隊長兼副団長のロイス・テレミスです。警備は万全を尽くしますのでどうぞ安心してお過ごし下さい」

「…はい、有り難うございます」

「同じく黒鷲騎士団・三番隊隊長兼参謀のルーカス・フォンドです。よろしく願います」

「…よろしく願います」

またもやイケメン…。ロイスさんは身長180cm位かなあ

？程よい肌色で赤茶髪の前髪をななめ分けにしている、明るい茶色の目をした万人向けのイケメンさん。

ルーカスさんはロイスさんよりちよつと身長が高くて、少し白めの肌色。よくいる欧米人タイプの白さだから不健康そうという訳ではない。薄い茶髪で少し眺めの前髪で少し垂れ目で左目の舌に泣きぼくろ。アンニユイな感じのフェロモンを出してる。

…どうしてイケメンばかりわらわらと出てくるんだよ！！入団試験でオーデিশョンでもやってんのか！？あーもう落ち着かない！普通の人出て来いよ！！！禿げたおっさんでもいいから出てきて私を落ち着かせて！！！！

私が内心荒れ狂っているとドアのノック音が聞こえた。誰か来た！来いおっさん！！

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは……カワイイ系のイケメンでした。

「サーイエ・アマーノウ様の荷物をお持ちいたしました」

「お渡ししろ」

「は」

かわいいこちゃんは私の元に来ると、一礼して荷物を渡してくれた。

「初めましてアマーノウ様。黒鷲騎士団・一番隊副隊長のヒヨック・ト・レン・ダレリウスです」

名前長っ！！え、ていうかこの顔で……いや、若そうなのに副隊

長なの？すごー…。あ、貴族の息子とかそういう感じが。

身長はあんまり高くなく私より少し高いくらい。165cmくらいかな？黄色味の強いブロンドで後ろで髪を結んでいるが少しボリュームがあるから少し先が跳ねててかわいい。しかも顔も小顔で男のわりには色白、大きい瞳はエメラルドグリーン。・女の私より可愛いつてどうよ？誘拐とか襲われないのか不安だ。

「本日は陛下が来られるまでアマーノウ様のお手伝いをさせていただきます」

「そうですか…。よろしく願います。・」

こんな可愛い子に面倒をみられるとは…むしろ私にさせて下さい。かわいこちゃんにそんな事させてしまうのはどうも気が引けるよ。

「陛下がこちらに来られるのは夜になりますので、それまでこの部屋でお寛ぎ下さい」

「……」

・どう寛げと？世界遺産レベルの部屋で尚且つイケメンに囲まれて寛げるほど私は神経太くないぞ。

「では私達には部屋の外で警備を致しますので失礼します」

そう言ってロイスさんとルーカスさんは出て行った。そして残るは団長ことガイシスさん。

「私は部屋の中で警護をさせていただきます」

「…分かりました」

「どうぞお座り下さい」

「はい…」

え、これって座っていいの？座るものというより飾るもの的な意味合いの方が強そうなんですけど…。私は恐る恐るかなり高級そうなソファに座った。

うわぁ…！座り心地抜群！！…だけどなんか寛げねええ！！小庶民がこんな高級そうな椅子に座って気が休まるわけが無い！ていうか私風呂に入っていないし洗濯もしていないから汚いんだよ！ソファを汚す事の方が罪悪感感じるわ！！

それに部屋に居るイケメンだよ！減ったにしても寛げないよ！！ヒョククト・…めんどいからヒヨでいいや。ヒヨは隣の部屋に行ったし、ガイシスさんは私から少し離れたところにイギリスの衛兵の如く立ってる。…あー！こんな事になるなら牢屋の方が良かったかも…。

私はソファに凭れないように背筋を伸ばしてどうしようかとそわそわしていると、ヒヨが戻ってきた。

「アマーノウ様、食事の用意が出来ましたので、どうぞこちらでお召し上がり下さい」

「え？あ、はい。有り難うございます！」

やったソファから離れられる！私は荷物をソファに置いて立ち上がると、ヒヨに続いて隣の部屋に入った。

そこには長いテーブルの上に豪華なフランス料理のような食事が用意されていた。こんな短時間でどうやって用意したんだよ…。ヒヨに椅子を引かれて椅子に座ったのは良いが、こんなに食べられない。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いえ……。初めて見る豪華な食事に驚いてしまっ……」

誤魔化すためにアハハと空笑いしたが、かなり哀れみの目で見られた。

……こんな空気が夜まで続くなんて嫌だー！！！！

第2話：お仕事が決まりました。

監視と哀れみの目で食事を見られる気まずさで、結局食事はほとんど喉を通らなかった。私がいまだに食べなかった事でヒヨには更に哀れまれたが苦笑を返すしかなかった。君たちがいなかったらちゃんと食べてたよ！…何て言えない。

食後、結構汚れていた私は風呂に入らせてもらった。浴室へ行く途中、ベッドルームを通っていたが、ベッドルームもこれまた豪華だった。もちろんベッドはキングサイズで天蓋付き。だけどそのベッドがダブルベッドに見えるくらい部屋は広かった。寝るだけなのにこれだけ広くしてどうすんだよ。ここ合宿所じゃないだろ。

壁は青空が描かれていて清々しかった。光りがよく入る大きな窓の外にはバルコニー。外に出てないからよく分からないけど景色は良さそうだ。

ベッドルームの中のドアを開けるとすぐに浴室に出た。浴室と言っても脱衣所だったけどね。脱衣所はクリーム色が基調の部屋で裝飾に金や銀が使われていて上品だった。

正面には磨りガラスのドアが付いているから多分浴室。右の壁には洗面所とドア。多分トイレかな。そして左の壁は全部鏡になっていた。…一体何をそんなに見るんだよ。自分の裸体をずっと見なくちゃいけないとかかなり嫌なんだけど。悲しいスタイルしか映らない。私が部屋を観察している間にヒヨは部屋から出て着替えを持ってきてくれた。

「有り難うございます」

「いえ・・・では失礼します」

ヒヨは私に着替えを渡すと、早足でとっと部屋を出て行ってしまった。心なしか顔が少し赤いような気がしたけど……まあいいや。

私は着替えを確認すると、ちゃんと下着まであった。しかもアンヌにもらったやつより豪華なかぼちゃパンツ。これこそメイドさんが着るようなやつだった。かわいいって言えばかわいいけどさ……穿きたくない。下着どころかノーパンでズボン穿いてるようなものだぞ。全然下着じゃないし。ん？もしかしてヒヨは女性の下着を持つてきたから照れていたのか？超ウブじゃん！！見た感じ高校生くらいだけど、このパンツであの反応！普通の青少年なんて年齢制限を無視してエロ本やAV見てるのに。あの子に見せたらどんな反応するんだろう？顔真っ赤にして部屋から出て行くか気絶しちゃいそう。うわーやばい。可愛い。

ニヤニヤしながら次の着替えをめくるとコルセットが出てきた。え、使い方知らないんですけど。アンヌはコルセットなんてくれなかったし。もしかして上流階級はつけるのか？あー、よく映画でドレス着る時とか着けてるよね。窒息どころか骨格まで変わりそうなくらいきつく縛ってさ。これ胸の部分まであるから胸まで潰れそうだ。うーん……ブラの上に落ちない程度に軽く締めておくか。適当でいいや。

服はシンプルだけどふわふわとしている白のロングドレス。白い長袖には肩のところにポリウムがあり、手首の辺りがきゅっと締まってる。首はタートルネックになってるけど普通に着やすい感じだよかった。今履いている靴と合わせると随分アンバランスになるけど仕方が無いか。

お風呂に入ろうと浴室に入ると、とても広くて周りには外の景色が広がっていた。すごい景色だけど……これって外から丸見えなんじゃないの？

私はタオルを巻いて景色を近くで見ようとしたら頭を打った。う・

これ壁だ。壁がスクリーンのようになっていて魔法で外の景色が映るようになってるのか。すげー。地球でも未来で発明されそうだな。浴槽はよくホテルとかにある共同のお風呂みたいに広くて、壺を持った女性の壺からお湯が出ていたり、綺麗な女性や妖精の彫像があった。私からしたら無駄に広くて豪華。

こんな広い浴室を独り占めなんて気が引けるし逆に落ち着かない。私はとつと体を洗ってお湯に浸かるとすぐに風呂を出た。

はあ、全然気が休まらない… ってうわあ！！ドアを開けたらガイシスさんが外で立っていたからびっくりした。目が合うとじっと見てきた。な、何だよ…。

「あのー…」

声を掛けるとはっとしたように頭を下げた。

「失礼致しました。僭越ながら、ここで警護をさせて頂きました」
「そうだったんですか…。あ、お風呂有り難うございました」
「いえ。リビングにお茶の用意が出来ております」
「分かりました」

ガイシスさんに続いてリビングに戻ると、お茶とケーキが用意されていた。ヒヨがご丁寧に椅子を引いてくれたのでそれに座った。その時にヒヨと目が合うと、すぐに視線を逸らされてしまった。超ピュアだ。癒される。私はまたにやけそうになるのを押さえてテーブルの上を見渡した。お風呂の後に熱い紅茶を飲む気がしなかったし、ケーキも美味しそうだったが食べる気もしなかったので結局水だけ飲んだ。

「アマーノウ様、先程もあまり食事を採られていませんでしたが、お口に合いませんでしたか？」

「あ、いえ。そんな事はありません。とても美味しかったです。有り難うございました」

「ではご気分が優れないのでしょうか？」

「そういう訳ではありませんが…」

なんて言えばいいんでしょうね。うーん、と考えていると、ヒヨが心配そうに私を見つめてきた。…ヤバイ。なんだこの可愛さ。すごい胸にくうーつと来る…！！

ヒヨの可愛さはレイとはまた違った可愛さなんだよー！何だろう、レイの中身はわんこがわんこな妖精さん。マイナスイオンを大量発生させてきゅんきゅんくる可愛さ。ヒヨは全体的にわんこって感じがする。今のこの愛くるしい目とかもろペットの顔だよ！耳があつたら今は絶対にへたれてる。うわぁ・犬耳と尻尾とか超萌え要素。

「アマーノウ様？」

「あ、いえ…」

耳と尻尾を想像して興奮してるだけです。気にしないで下さい。

「本当に…大丈夫ですか？」

「……………」

…ダメだ。くうーんって鳴き声が頭の中で聞こえる。私、可愛い子には勝てません。

「…少し、疲れました」

「そうでしたか…早く気付かず申し訳ありません。隣の部屋がベツドルームでございます。どうぞ、そちらでお休み下さい」

「はい、有り難うございます…」

うつ、もう好きにしてくれ…。何でも言うこと聞くよ。私はヒヨに続いてベッドルームに行った。

ヒヨは私をベッドルームまで案内すると、一礼をして部屋を出てドアを閉めてしまった。そしてさっきからずっと黙って着いてきていたガイシスさんと2人、部屋に取り残された。

「あの…ガイシスさん」

「はい」

「何故ここに居るのですか？」

「警護が私の任務です。お休みするのに失礼かと思いますが、どうぞご容赦下さい」

「そうですか…分かりました」

お仕事ですもんね。それはどうもお疲れさん。私は彼を外へ出すのを諦めて大人しく寝ることにした。さっき通った時はあれで寝るのは気が引けるなあと思ったけど、そろそろ疲れがピークに達してきたのでどうでもよくなった。

ベッドの中にもそもそと潜ると、見た目に反して布団はかなり軽くて温かく、心地良かった。かなり寝やすいコタツに潜ってる感じだ。ぬくぬくする。あー、幸せ。しばらく出たくありません。コタツに入るとなかなか出れないんだなあ。全く動かない。コタツには魔物が住んでるからね。

布団に包まって和んでいると、ガイシスさんと目が合った。ガイシスさんは私をガン見していた。…和んじゃいけませんでしたか？いや、けど休めって言うてたし。…気にするな。うん。それが一番。寝よ。あ、そういえば…。

「あの、ガイシスさん」

「何でしょうか？」

「陛下が来る事が分かったら起こしてくださいと嬉しいです」

「分かりました」

「有り難うございます。ではおやすみなさい……」

「……」

私はお礼を言つとまたもそもそ動いてガイシスさんのいる逆の方向を向くと、のび・君のように3秒で寝た。

「……きろ」

「ん……」

「いつまで眠っているつもりだ。早く起きろ」

んー、ザビー……？何だもう来たのか、早いな。ゆっくり瞼を開くと……

「目は覚めたか？」

面白そうに笑う王様の顔が見えた。

「陛下・・・？」

「目は覚めたか？」

「え？ああ、はい、目は覚めましたけど…。あの、ガイシスさんは？」

「やつは下がらせた」

「そうでしたか・・・」

なら仕方ないか。王様の命令には逆らえないしね。王様は関係ないように私の顔を撫でた。

「陛下、かゆいです」

「起きている時は美しいが、寝ているお前は愛らしいな」

「陛下、寝言は寝てから言ってください」

「身も綺麗になりその服も良く似合っている」

「陛下、人の話を聞いてください」

いつまでふざけた事言ってるんだ。顔を顰めると陛下に笑われた。

「陛下に向かってその様な振る舞い、失礼だと思わないのか？」

そういえばザビーも居るんだった。陛下のおふざけですっかり忘れてたわ。

「余が許したのだ。気にする事はない。ザビロニスもわざわざそのような事で目くじらを立てるな」

「・・・」

「サーイエもザビロニスに気遣う必要は無いぞ」

うわぁ…こいつ明らかに不満そうな顔してる。うん、気遣う必要は全く無いな！

「…陛下は貴重な時間を割いてここに参られたのだ。さつさと話を聞かせろ」

お前は姑か。まあ話さなきゃ埒が明かないな。私は荷物を取り出すと、私のいた世界やここに来た経緯を詳しく二人に話した。

「…と、まあこんな感じです」
「………」

私の話を聞き終えた二人の表情が対称的だった。王様は面白そうに微笑んでいて、ザビーの表情は全く変わっていなかった。何を考えているのか読み取れない。

「陛下」

「何だ？」

「これからどのようにしてこの者を住まわせるつもりですか？」

いきなり話が飛ぶな。まあ信じてくれたのは嬉しいけどな。見たことも無い容姿や道具を持ち、何を聞いても的確な答えを返すやつがいたら信じない訳にもいかないだろう。もし私がド・えもんに会ってどこで・ドアや・ケコプターを実演されたら信じると思うし。

「サーイエを王族の血筋を引いていることにするのが無難だろう」
「真実を隠して城に住まわせるという事ですか？」

「ああ、この話を信じる者は少ない上に世界を根本的に覆す話だ。
これ以上騒ぎを大きくする事を本人が望んでいないからな」

「…ほんと申し訳ありません」

「気にするな。余はお前のその正直さを気に入ったのだからな」

不敵に笑う王様の笑顔は頼もしかった。その前向きな性格と器の
大きい所はぜひ見習いたいよ。

「多分王族の血筋になるだろうと思って、私も少しは考えておきま
した」

「では聴かせよ」

「…はい」

ザビーが王様以上に偉そうに言った。お前は何様だよ。あ、お義
母様か？

「どなたか過去に女遊びの激しい王族はいませんでしたか？」

「先々代の王は女遊びが激しかったと聞いているが…」

「では私を『先々代の王が一夜の遊びで出来た庶民の女性との間に
出来た子供の子供』ということにして下さい」

「庶子の子、ということか？」

「はい」

「確かにそれなら存在が明らかにされてなくても不思議ではないな
…」

「しかし陛下、庶子の子が王族として城に入るのは反発する者が多
々いるかと思えます」

「あ、別に私は一般庶民と同じ扱いで構いません」

二人は訳が分からないといった顔で私を見た。そこまで変な事言ったか？

「私の存在は今まで認知されていませんでしたし、王族とは全く関係ありませんでした。私が王族に入っても陛下の立場を悪くしたり利用されるのが関の山です。それに陛下には言いましたけど、下らない陰謀に巻き込まれるのはごめんです」

後半が本音ですけどね。素直に言ったらまた王様に笑われ、ザビ―には呆れたような視線を送られた。

「そうか。ではお前は我が一族・オーデイスラルド家の血筋を引く者だが、王族の地位や権力は全く必要ない、という事でいいのだな？」

「はい、お願いします」

「しかしお前が王家に入らないにしろ、暮らしも庶民と全く同じにする訳にはいかない」

「そうだな」

「じゃあどうするんですか？」

「部屋はこの塔の一室を使い、生活はまず城での振舞いや教養を身につけてもらう。その後はあまり表に出ないように静かに暮らすことになるだろう」

「…という事は、私は働かずにこの塔で大人しくしている、という事ですか？」

「そういう事だ」

何だそれ。それって結局この塔に軟禁されているだけじゃないか。ふざけんな。これじゃあ神聖樹海から出てきたことすら無意味になる。そんなの絶対に…

「嫌です」

「・・・何だと？」

「宰相の言う通り、ここで大人しくしていれば問題も起きる事はないと思います。だけど私は働きたいんです」

「何故だ？」

「先程も言いましたが、私は病氣持ちなのであまり自由に一人で何かをする事が出来ませんでした。大人なのにいつまでも親に甘えて仕事もせずに家に居るのはとても心苦しかったです。その心配をする必要が無い今、私は自分で生きてみたいんです。何でも構いません。私に働かせてください」

私が頭を下げると沈黙が続いた。

「サーイエ、顔を上げる」

「はい・・・」

ゆっくりと顔を上げると二人は真面目な顔をして私を見ていた。

「お前は...成人しているのか？」

「え、そうですけど...。あれ、言ってますでしたっけ？」

「聞いていない」

「あー・・・それはすみませんでした」

確かに言っただけでなかったかも。ていうか言うタイミングなかったし。

「お前はいくつなのだ？」

「20歳です」

「人間で20歳ということは、魔人では100歳か・・・」

王様は信じられないと言った顔で私を見て、ザビーの眉が少し寄った気がした。

「背も低いし顔も幼いから50代くらいかと思っていた」

「あー、ダンさ…ラウム家の人にも言われました。魔人は何歳から成人なんですか？」

「100歳からだ」

「あー、じゃあ同じですね。私の国も20歳が成人なんですよ。50代ってことは…私って10歳位になるんですか？」

まさか10歳は無いだろ…。だって小学四、五年生だよ？20歳になってランドセルを背負うのはキツイよ。三・春馬がランドセルを背負っているとか…無理だ。そんな小学生は絶対に嫌だ。

「いや、人間で言えば13〜16歳くらいになるだろう」

「そうなんですか。ちなみに私は人間で何歳くらいに見えました？」

「14・5位だろう」

ならまだ良いや。女子高生の制服着てもまだコスプレで済ませられる。

「成人か…」

王様はぼーっと私の顔を見た。確かに外人から見たら若く見られるけど、そこまで信じられないものか？私が首を傾げると陛下はまた顔を触ってきた。

「成人という事は、結婚できる年齢だな」

「へ？ああ、そうですね」

「それならやはり余と結婚しないか？」

「はあ？」

何言つてんだよこの王様は。朝に話した話覚えてないの？馬鹿なんですかそれともタラシなんですか？きつと馬鹿って事は無いと思うから後者か…。成人女性なら誰でもいいみのかよ。うわサイテー。

「・・・サーイエ、それは王に向ける視線じゃないぞ」

「普段だったら不敬罪に問われるものだ」

「え、ああそうでしたか？それはすみませんね。つい思った事が顔に出てしまつて」

「お前・・・」

「ほら、いつまでもふざけてないで話を進めますよ」

「・・・」

王様は溜息を吐き後ろにも垂れると気だるげに話を促した。

「私の事は50代の・・・人間年齢で15歳という事において下さい。子供なら許される事もありますし、いざこざにも巻き込まれにくいと思いますし」

「ああ、そうだな」

「しかし一口に働くと言っても、50代で城での仕事というのはかなり限られているぞ」

「別に掃除係とか皿洗いで良いですよ。というかそれがやりたいです」

「駄目だ」

「何ですか？」

「いくら地位は無くとも体裁上、王族と同じ血を引く者にその様な仕事をさせる訳にはいかない。それにその外見ではよく知りもしない者には不気味でしかないだろう」

私の希望はすつぱりとザビーに斬られてしまった。

「じゃあどうするんですか？」

下働きも駄目で年齢的にも駄目だったら仕事なんてほとんど無いじゃないか。

「黒騎士か白騎士が妥当だろう」

「え、騎士！？」

「黒騎士と白騎士に所属する者は貴族から庶民まで幅広い身分も関係なく過ごせる。よって貴族の干渉も受けにくく、王族の血を引く者として品位を落とす事はない。身の守る術を自分で覚える事も出来る。最初は慣れないかも知れないが、強力な魔力を持っていれば武術が使えなくとも平気だろう」

「そうですね…」

「確かにザビロニスの言う通りだが、サーイエには危険過ぎないか？」

「気になるようでしたら魔獣の討伐や戦闘には参加させず、騎士団の中でも安全な仕事を回せばよろしいかと思います」

「……」

そうか、騎士って言っても安全な仕事もあるんだ。だったらいいじゃないか。警察官だってお巡りさんからCIAまで色んな部署があるし。

「陛下、わたし騎士団に入りますよ」

「いいのか？」

「はい。話を聞いた限りでは一番適当ですし。武術は使えないので雑用や見回りなどの地味な仕事をやらせてもらいますよ」

「そうか」

王様は再び私の顔に手を伸ばして優しく撫でた。この人、人の顔を撫でるのが好きだな！。

「だが騎士団の入団には男のみとなっている」

「え、そうなんですか？」

「ああ、女は生命の母。守るべき存在だからな」

おお…紳士というか騎士道というか……クサイな。ブラツク・グリーンとか見せてあげたい。戦う女がどんなにかっこよく美しいか…。女優だったらアン・エリーナ・ジョリーとかミ・ジョヴオビッチもそうだね。だけど男しか入れないのにどうやって…まさか！

「男として入れとか言わないですよね！？」

「それはない。お前の存在はイセアに行った騎士たちは知っているし、そのことは既に他の者にも知れ渡っているだろう」

なら良かったー！男装物の逆ハーとか私には無理だ！！やり切る自信がない。

「余が許可を出せばサーイエは入団する事は出来る。だが男しか居ないから襲われるかもしれないぞ」

「常に寝食共にしている訳じゃないから大丈夫でしょう。それに私を襲う人なんかいないと思いますよ。不気味な奴に手を出す物好きはいないでしょう」

「いや、お前は美しい」

…たくこの王様は。いつまでふざけた事を言ってるんだ。早く医者に診て貰った方がいい。もう溜息しか出ない。

「仮にそうだとしてもマニア向けでしかありませんよ」

「そんな事はない。ザビロニス、お前も美しいと思ったであろう?」

「……」

返事ねえじゃねえか。目を逸らされるのも案外むかつくな。

「これでマニア向けって分かったでしょう?」

「だが……」

「陛下は心配のし過ぎです。例え襲われても犯^やられる前に殴^やってやりますよ」

「……」

『殺^やつてやる』じゃないだけ良いと思って欲しいものだ。ふんつと鼻を鳴らすと陛下が肩を揺らし始めた。

「そうだな…それがいい」

「分かってくれましたか?」

「ああ」

「じゃあ騎士団に入団ということでお願いします」

「分かった。入団を許可しよう」

「有り難うございます!」

よっし仕事決定! 人生で初の仕事だ!! あー嬉しいなあ! 少し不安もあるけど、とりあえずやってみないと分からない。安全な仕事もあるみたいだし。仕事を貰ったからには真面目にやりたい。笑顔でお礼を言ったら苦笑した王様に頭を撫でられた。

「明日、適性検査をしてどちらの騎士団に入団するのを決定する」

「分かりました」

「ザビロニス。ガイシスとアドニスにこの事を伝えておけ」

「御意」

「では余は部屋に戻る」

「あ、はい。忙しいのに有り難うございました」

「良い。お前も疲れているのだろ。よく休め」

「はい」

王様が部屋から出て行くのを見送ろうとしたら、陛下が振り向いた。何？

「まだ言っていないかったな。我が名はオズウェルシス・ヴェントナート・オーデイスラルドだ」

「おずつえるしす？」

「ああ」

…長え。特に後半部分。

「身分は違えど我らはこれから親族だ。いつでも頼れ」

私の頭を優しく撫でる陛下の手がとても暖かくて、なぜか気恥ずかしくて俯いてしまった。

「…はい。ありがとうございます。陛下」

「名を教えたのに陛下と呼ぶのか？オズウェルトでいい」

「そんなの庶民が呼べる訳ないじゃないですか」

「お前なら気にせん」

「オズ、ウェルト…。これで、いいですか？」

恐る恐る陛下を見上げると、陛下はいきなりガバッと抱きついて

きた。

「な、何ですか?!」

「良い!やはりお前は愛らしい!」

「はあ!? 訳分かりません! ていうか離して下さい!」

「嫌だ」

「ちょ、ザビーどうかして! あ…」

「ザビー?」

しまった! ついいつも考えている方が出てしまった! ザビーの方を見ると『何言ってるんだこいつ…』っていうのがひしひし伝わってくる…。

「いやー…これは深い意味は無くてつい出てしまったんです…ハハハ」

「……」

無言の視線が恐ろしい…。

「では余の事はオズと呼べ」

「はあ?」

「ザビロニスだけ愛称で呼ぶのはずるいであろう」

「ずるいも何も無いでしょう! ちよつと間違っちゃっただけじゃないですか! いい加減離・し・て・下・さ・い!」

「嫌だ。オズと呼ぶまで離さん」

こいつは…! 『俺の名を言ってみろ』とかお前は●ヤギか! いくら押しても離さないし!

「あーもう分かりましたよオズ! これでいいですか!」

「ああ」

満足げに返事を見ると、陛下はようやく離してくれた。

「ほらもう遅いんだから早く部屋に戻ってください！」

「急かさずとも良いだろう？」

「良くないです！宰相！早くこの人を連れて帰ってください！」

「……」

こいつもまだ黙っていやがるし……！そんなに気にする事か！ちつちえ野郎だな！！

「あーもうさつきはすみませんでした！だから早く……」

「陛下、明日も仕事があります。行きますよ」

「そうだな。ではまた明日」

最後に王様は私の髪をさらりと梳くつて優雅に部屋を出て行った。もちろんザビーは私の方を見向きもせず、寡黙に王様の後に続いて出て行った。

嵐が去った……。仕事が決まって嬉しかったけど、今ので一気に吹っ飛んだ。疲れた……。さつき寝たといっても完っ壁に熟睡だったから寝た気しないし……。とつとと寝よ。

第2話：お仕事が決まりました。（後書き）

一応伏字&元ネタ解説

- ・の●太君・国民的アニメに出てくるキャラクター。いつもネコ型ロボットに頼ってばかりいるダメ人間で、寝るのがやたら早い。だけど心優しく射撃が天才的に上手い。
 - ・ど●でもドア・ドラえも●のひみつ道具の一つ。行きたいところに行ける。
 - ・タケコプター・上と同じくひみつ道具の一つ。頭につけて空を飛ぶ。
 - ・三浦春●-1990年生まれの人気俳優。お気に入りの漫画は『はじめの一步』。
 - ・ブ●ック・ラグリーン・原作：広江礼威。戦う女性が多く、やたらかっこいい。
 - ・アンジェリーナ・ジ●リー：1975年生まれハリウッド女優。代表作『トゥーム・レイダー』など。唇がセクシー。
 - ・ミラ・ジョヴォ・ビッチ：1975年生まれ元・モデルのハリウッド女優。代表作『バイオ・ハザード』など。胸は無いけどかっこいい。
 - ・ジ●ギ・原作：武論尊のハードボイルドアクション漫画に出てくるキャラクターの一人。主人公の義兄。断末魔の叫び声は『ばわ!』
- ウィキを参考にしつつ適当に解説しています。ウィキで調べると色々な事が分かって面白いです。

第3話：やっぱり我が身が一番かわいい

次の日の夕方、私はロイスさんと共に魔術特別訓練室に行った。

室内はとても広く、床は地面で木も生えているし、泉もあつたりして外と同じような環境だった。色々な魔法を使うのにはそれぞれ自然を利用する事もあるので同じにしているらしい。それなら外でやれば良いじゃないかと思うけど、ここなら魔法を使っても被害が出ないで安全なのだそうだ。

広い部屋には既に陛下とザビー、少し離れた所にガイシスさんと白騎士2人が並んでいた。一人は白金の長髪を一つ結びにしている、気品があるので貴族っぽい。もう一人は若草色の短髪でオールバックの逞しい顔つきのイケメン。ストイックな感じの雰囲気が軍人っぽい。またイケメンが増えた…。私は内心溜息を就きながら陛下の下へ行った。ロイスさんが敬礼をするとガイシスさんの隣りに並んだ。休めの体制で並んでいる姿はどこぞのアイドルのオーディション会場のようだった。みんな自信持ってデビュー出来るよ！

「黒騎士団の2人は分かるな？」

「はい、お二人にはとてもお世話になりました」

とりあえずお世話になった人の名前は、午前のうちにロイスさんに教えてもらって覚えておいた。陛下のフルネームはまだちょっと怪しいけど。

「この方々は白蛇騎士団長のアドニス・リルグ・サフィットと、副団長のトリス・ハーク・ジャンディートルだ」

ザビーに紹介された二人はそれぞれ私に頭を下げたので私もお辞儀をした。先に長髪の人が頭下げたから、多分この人…アドニスさん？が団長なんだと思う。意外だ。副団長の…トリスさんの方が団長っぽいのに。

「よろしく願います」

「それではこれより適性検査を行う。この検査は素質を見極める検査だ。検査結果によりお前の所属を決める。くれぐれも力の出し惜しみ等せず全力を出せ」

「はい」

「まず炎だ」

「分かりました」

私は少し緊張しながら両手を見つめた。出過ぎるといけないので500mlのペットボトルの大きさくらいの炎を想像した。良かった…やっぱりイメージがはつきりしている方が出しやすい。

「次は水」

ザビーに言われたとおり今度は水を出した。今まで燃えていた炎の根本から飲み込むように水を出すと、手のひらの上でぐるぐる循環させて空中に保った。マジシャンみたいなあ、とか思うけど私はもうガチの魔術師^{マジシャン}なんだよな。何か変な感じ。

「風だ」

私は循環している水の流れの速度を一気に上げ、まるで水を弾き飛ばすかのようにして両手の上に小さな竜巻を起こした。自分で言

うのもなんだが、なかなかキレイな技の繋ぎだと思う。芸術点も評価のうちに入れてくれないかなあ。ザビーがそんな事する訳ないか。ていうか元からそんな目的の試験じゃないし。

「次は土だ」

「はい」

私は小さな竜巻にどんどん砂を混ぜ砂嵐を作り、それを凝縮して塊にすると石にした。ちよつとアレンジをして六角柱にしてみまして。うん、なかなかの出来栄え。空中でそれをくるくる回して自己満足に浸っていると、なかなか次の指示が来ない。どうしたんだろうとザビーの方を見ると、ザビーを含め全員が真剣な表情で私を見ていた。魔法に集中してたから気付いてなかったけど、こんなにガン見されてたとは…。なんか怖いな。

「・・・次は氷だ」

「はい」

居心地悪いしとつと終わらせよ。私は宙をくるくる回っている六角柱を一瞬で氷漬けにして、石を氷に変化させた。…皆さん、沈黙が怖いです。黙って見てないで早く次に進めておくれザビー！。

「最後に雷だ」

「はい」

はい来ましたラストー！私は氷に雷を落としてそれを粉々に粉砕した。やろうと思えば結構出来るもんなんだね。無事終わったので皆の方を見ると、眉間に皺を寄せたり目を見張ったりと反応は様々だった。やっぱり全属性が使えるのはやばいよね…。けど全部見せなきゃ配属先決まらないし。

「まさか、こんなに魔法が使えるとはな…」

陛下の顔には戸惑いの苦笑いが浮かんでいた。

「普通、素質は得意な物は最大4つが限界とされている。何故なら、普通は相反する魔法は使うのはかなり困難だからだ」

おお、流石チート。さつそく限界突破しやがった。

「しかも詠唱破棄あの正確さ、恐ろしいくらいだ…」
「すみません…」

「いや、それだけサーイエが優秀という事だ。悪い事ではない。サーイエ、お前は光と闇の魔法は使えるのか？」

「前に一度試してみた時は使えました」

「では見せてみよ」

「分かりました」

私は両手を前に差し出すと、右手に光の玉を、左手に闇の玉を出した。光は放出して闇は吸収する。今の状況はホワイトホールとブラックホールみたいなもんかな。だから私の前に差し出した両手には、右から左へと風が流れている。右つから左へと…ってか？あー久しぶりにボ●ロが聴きたいよー。

私の掌の上にある玉は、加減しているからそよそよ風だけど、大きくしたら色々ぶつ壊れたり吸い込まれたりすると思う。強大な力は恐ろしいですなー、ハハハ。

「同時に光と闇が扱えるのか…!？」

「全属性が使えるなんて…」

「……」

はっはっは、すごkarou。もう開き直るしかないわ。騎士団の人は驚きまくってるのに、陛下はなるほど顔していてザビーはいつも通りだった。私の設定は昨日話しておいたからすぐに納得してくれたんだろうね。

「それにしてもこれだけの素質と魔力があるならば、どちらの騎士団に入っても問題は無いだろう」

「陛下、ご質問をしても宜しいでしょうか？」

ガイシスさんが少し頭を下げて陛下に尋ねた。

「何だ？」

「サーイエ・アマーノウ様の魔力は大変素晴らしいものだという事は分かりました。しかし武術の方は如何なのでしょう？」

「そういえば聞いていなかったな。どうなのだ？」

「全くやった事はありません」

私は潔くすっぱりと答えた。ゲームでならモンスターを狩ったり、侍もぶった斬ったり出来るけど、実際にはやった事があるわけが無い。まず銃刀法違反で捕まるわ。

「……だそうだ」

「それでは魔術師の方がよろしいのではないのでしょうか？」

「確かに魔術師なら強力な魔力を持っていたほうが良いが、魔術師は魔法の研究・開発が主な仕事だ。知識と探究心が無ければ勤まらない。残念ながらこいつにそれらは無い上に、行っても研究材料にされるだけだろう」

淡々と答えるザビーの言葉には棘があるような気がするのは私だけですか？

「それに差別の対象にもなり兼ねんなからな。だからサーイエには騎士団を薦めたのだ」

「しかしアマーノウ様は武術経験も無い上に女性です。戦場に立たせるのは賛成致しかねます」

「本人は性別に関しては気にしていない。武術に関しては一から教えてやれ。これ自身、自分の身は自分で守れるようになりたいそう
だ」

「そうなのです。武術経験も無く未熟者ですがどうぞお願いします」

毅然と答えるザビーに乗っかってちよつと自分をアピールしてみた。こういう時のキツイ感じのザビーは役に立つ。どんどん言っちゃって！

「ですが…」

「本人がこう言っている。徹底的に武術を叩き込め。ボロ雑巾のよう
に扱って構わん」

そこまで言わなくていいよ！！ザビーを軽く睨んだけど、当の本人はしれつとしていた。こんな回りくどい事するなんて、お前は本当に姑だな！

「気になるようなら雑用などをやらせておけ」

「分かりました」

「さあ、サーイエ。お前はどちらに入りたいのだ？」

「そうですね…。その前に仕事内容を教えてもらえませんか？」

仕事内容分からずに入ってから後悔するのは嫌だしね。

「どちらの騎士団も基本的な仕事内容は変わらない。町、国の警備や治安維持、魔獣討伐や時には戦場に出向いてもらう。ただ違うのは戦闘時の役割だ。黒騎士は攻撃魔法、付加魔法使って戦い、白騎士は回復魔法、補助魔法を使って戦闘を行う。戦闘を行う際は、主に二つの騎士団が互いにペアを組み、黒騎士が攻撃するのを白騎士がサポートするという形の戦い方をしている」

「そうですか…」

ふむ。私は魔法が得意だけどパワーがないという典型的な魔術師タイプだから、ちよつと調子に乗って前線に出ると数撃喰らって死ぬんだよ。だとすると後ろで大人しく後方支援する白騎士にすべきかな？

だけど前方に行かずに後方で攻撃魔法を中心にして戦った方が早く戦いが終わるか。それだと黒騎士になった方がいいのか？うーん…

「決められぬのか？」

「はい。私はどちらの魔法を使う事ができるなら、どちらも使いたいと思っっているのです」

「ではどちらも使えば良いではないか」

「だとすればそれは一体どちらの所属になるのでしょうか？」

「そうだな、好きなほうに入れば良いのでは無いか？基本的な仕事内容は同じなのだし、もし戦闘が起きるようなことがあれば必要な方の役割を果たせば良い。ただ両騎士団に所属というのは無理だから、どちらか自分の好きな方を選べば良い」

「そうですか…」

形だけでも入団していればいいのか。じゃあ白騎士にしようかな。戦闘に関しては黒騎士に比べて楽そうだし。あと今まで会った黒騎

士は全員イケメンだったから定番の逆ハーになって、貴婦人方の怒りと嫉妬を全身に浴びながら日々過ごさなくちゃいけなさそうだから面倒臭そう。白騎士はまだそんなに会った事ないから分からないけど、とりあえず今分かっている時点で決めるなら白騎士だな。

「余としてはお前には白騎士となってもらいたい」

「え、何故ですか？」

「戦闘に関して白騎士は後方支援が主だから、黒騎士に比べて怪我をしにくい。お前にはあまり傷ついて欲しくないのだ、サーイエ」

陛下の憂いを含んだ顔に、思わず息を呑んだ。いつも茶化しているからあんまり気にしてなかったけど、私を真つ直ぐ見つめている顔はとても綺麗で、この人は本気で心配してくれているんだなあって言うことが伝わってくる。その気持ちに、応えたいと思った。

「陛下、私は……」

「僭越ながら、私も陛下と同じ意見です」

白騎士に入ろうと思います、って言おうとしたらアドニスさんに遮られてしまった。だから言われなくっても入るってば。アドニスさんは私に向かって恭しく頭を下げた。

「どうぞアマーノウ様、我が白蛇騎士団に御入団下さい。貴女のように美しい方に戦いなんて似合いません。本当ならば剣を持つより花を愛でている姿の方が貴女には似合います。しかしそれは何かの事情があり無理なのでしょう？そうなのでしたらぜひ白騎士となり、あなたの力で黒騎士を守り、癒して差し上げてください。出来ることならば、私も癒して欲しいのですが」

「……」

アドニスさんの妖艶とも取れる優しい微笑みと台詞に、私は背筋がぞくつとした。よくまあべらべらと…。何このクサイ台詞！アドニスさんはかっこいいよ？だけどころかカッコよくても……。私には無理だ！あー鳥肌が立ちまくりで痒い！！駄目、私こういうタイプ好きじゃない。ていうか嫌い。超フェミニストで心にも無い美辞麗句を並び立てる人を簡単に信用できないよ。

それに最後の微笑み…。あれは絶対タラシだ。爽やかな王子と見せかけて実際は腹黒王子だな。自分の魅せ方をよく理解しているなんてアイドルの鏡だよ！

どうしよう…。仕事内容的には白騎士の方がいい。陛下も心配してくれてるから白騎士団に入りたい。だ・け・ど…。まさかの畏^{トラップ}発動！私のやる気が一気に下がった。

面倒くさい逆ハーを取るか、超フェミニストで（以下略）を取るか…。あーもう黒騎士が一般かそれ以下の顔だったら迷わず黒騎士に行くのに！！

私が迷っている時、偶然にもアドニスさんと目が会うとにつこりと微笑まれた。よし、決めた。

「私は黒騎士団に入団することにします」

アドニスさんは表情が一瞬固まった。せっかく勧誘したのに黒騎士に入団希望したからね。アドニスさんは眉を寄せて不思議そうな表情をしているけど、瞳の奥に隠された視線が刺さる。痛いけど…。ちよつといい気味。

「それは何故、ですか？理由をお聞かせ下さい」

「ここに来てからはガイシス団長を始め、黒騎士の皆さんにとっても世話になったので黒騎士団の方が馴染みやすいと思ひまして…」

この理由もあながち間違いでは無いけど、正確にはアドニスさんと仕事をするより黒騎士団で面倒ごとに巻き込まれる方がマシって事なんだけどね。

「そうですか…それは残念です。もう少し早くお会いして、貴女のお世話をさせて頂きたかった」

「…お気持ちだけでも嬉しいです」

「どうだかな」

「……」

引きつり笑いを返すと、ザビーが小声でぼそりと呟いた。余計なこと言うんじゃないよ！そのままザビーを目で牽制すると鼻で笑うような態度を返してきた。いい加減にしてよお義理母さま！！

「それよりサーイエ、本当に黒騎士団で良いのかな？」

「はい」

「ではガイシス、サーイエの入団についての詳しい事が決まったら後で報告せよ」

「は！」

「それから我が弟同様、サーイエに対して気兼ねする事は無い」

「分かりました」

「では余はもう行く」

「あ、陛下。適正検査にお付き合い頂き有り難うございました」

「…良い」

陛下は私達に背を向けると、部屋の扉へ向かっていった。陛下機嫌が悪いのかな？初めて会った時みたいに冷たい。私が黒騎士団に入った事がそんなに気に喰わなかったのか？だけど好きな方を選べって言ったのは陛下だし…。やっぱり白騎士団に入った方が…い

や、無理。全くどうした事が…。

「サーイエ」

「あ、はい」

「すごいなーさっきの魔法！」

「俺もびつくりしたよ」

「素晴らしい力だね」

「え、あ、有り難うございます」

いきなりフレンドリーに話しかけてきた3人にびつくりした。陛下に気兼ねしなくても良いって言われたからかな？私が戸惑っているとその事を察したロイスさんが優しく笑いかけた。

「そんなに構えなくてもいいよ」

「え？」

「陛下やザビロニス様から聞いていると思うけど、騎士団に身分は関係ないんだ。実力主義だからね。それにお互いが気を使いすぎると、向上心や団結力が薄くなってしまうんだ」

「そうなんですか…」

「規律や先輩への敬意を払う事も大切だけど、あまり気を使い過ぎず気楽に過ごして欲しい」

「分かりました」

「うん」

ロイスさん優しいー！この優しい微笑みには毒が無い！みんなの人気者の優しい先輩って感じがする。主人公の落し物を拾ってくれたり、図書室とかでいつも勉強してたら、向こうから話しかけて来てくれて勉強を教えてくれる…みたいな展開になりそうだ。乙ゲー基準ですみません。

「もちろん私にも気を使う必要は無いよ」

「…はい」

キラキラとした笑顔で言うアドニスさん。…あんまり親しくしたくない。顔を逸らすと遠くで見えていたトリスさんと目が合った。だけどトリスさんは不機嫌そうな顔をして私から目を背けた。

「ああサーイエ、トリスの事は気にしなくて良いよ。彼は人見知りが激しくてね」

「はあ…」

「きつと君が余りに魅力的だから近寄りがたいだけだろう。その内慣れるさ」

「そうですか…」

もうこの人につっこむのも面倒くさくなってきたわ。だけど彼の目には侮蔑が含まれてるような気がしたんですけど。今まで私の周りの人が普通に接してくれていたから忘れていたけど…やっぱり不気味だよね。まあ係わりたくないんだったらそれはそれでいいや。今までだってそうだったし。

「それじゃあさっそくだが入隊試験をするぞ」

「試験ですか？」

「ああ。俺ら黒騎士団には一・二・三・四番隊、全部で四つの隊があり、それぞれの得意分野に分かれているんだ。一番隊は総合バランス、二番隊は攻撃魔法、三番隊は付加魔法、四番隊は武術」

「じゃあ総合バランスが良い一番隊が一番優れているんですか？」

「いや、そういう訳ではない。いくら総合バランスが良くても、何か一つ突出してる者に必ず勝てるとは限らないだろう？」

「確かに…」

「だから自分に合った隊を決めるためにも入団する際には必ずやらなくてならないんだ」

「そうなんですか。試験内容はどんなものですか？」

「俺と戦ってもらう」

「へえー…って、え！？無理です！！私戦えませんよ！」

「だが戦わないと得意分野が分からないだろう？」

「そうですか…」

いきなり戦えと言われてもフルボッコにされるだけだと思うのですが…。対戦ゲームだったらやる気満々なんだけどね！ガイシスさんは私の事を気にせず、どこからか剣を取り出すと私に渡した。

「ほら、この剣を使え」

「え」

「刃は潰してあるから大丈夫だ。それに俺も手加減はする」

「はあ…」

「この試験に勝敗は関係ないから気楽にやればいいぞ」

「そうですか…。どれくらい戦えば良いんでしょうか？」

「そつだな、俺が納得できるまでかな」

「結構適当なんですな」

「まあな。だけどそんなもんさ」

そんなもんなのか。まあいいや。シンプルな方がこっちもやりやすいし。

ガイシスさんから渡された剣は、普通の剣だった。初めて触る剣。剣を鞘から抜くと、鈍く光る刃が現れた。なよなよと剣を両手で持って構えると、ガイシスさんは苦笑した。ちよつと私には重いかも。この剣だけで勝てる訳が無い。

「ガイシスさん。この試験って剣しか使っちゃいけないんですか？」
「いや、そんな事は無い。お前が戦いやすいようにやればいい」
「そうですか。ではどの程度なら大丈夫でしょうか？」
「どの程度とはどういう意味だ？」
「えーっと、私も自分の力を上手くコントロール出来るか分からないんです。だからもしかしたら・・ガイシスさんに大怪我をさせてしまうかもしれません」

チートの私が望めばどんな事でも出来るかもしれない。だけど想像以上のものが出たらどうすれば良いんだろう？初めて水石を触った時もそうだ。自分に流れるマジの量が分からないから出ると望んだら、想像以上の量が出てしまった。それを戦闘時に使って同じ事が起きたら相手の命を奪いかねない。力の暴走。それが、怖い。

「ほお、俺に勝つ気満々だな」

「え？！いや、そういうことじゃなくて…」

気がついたら俯いてしまった私が顔を上げると、ガイシスさんは余裕の笑顔を称えていた。

「そういう事だろ。ま、確かに怪我をするかもしれないがそんなこと気にするな」

「だけど…」

「自分の実力が分からないから不安なんだろ？だったら、それを試す良い機会じゃないか。それに怪我してもここにアドニス達がいる。二人とも白騎士のトップだからな。怪我なんてすぐ治るさ。な？」

にっと笑うガイシスさんの笑顔はとても清々しくて頼もしかった。

自分のリスクと問わずに、不安に怯えている私を受け止めようとしてくれている事がすごく嬉しい。

この人なら大丈夫、そんな気がした。よし、やろう。私は集中して体と剣を軽くした。

「私としてはサーイエを優しく介抱したいんだけどな」

「分かりましたガイシスさん。では自分なりにやってみようと思います」

「あれ？私の言った事は聞こえてるかい？」

「おう、頼むぜ！」

「いや、ガイシスじゃなくて…」

「アドニス。今は黙って見ている」

「……」

トリスさんに叱られてやんの。ほんと大人しくしててよね。さて…。私は深呼吸して前を見据えると、ガイシスさんが強気な笑顔で剣を構えていた。

「さあ、来い」

私は唾を飲んだ。力を使うのは怖い。それでも私なりにやれる事はやろう。これはもうゲーム・アニメ・漫画を参考にしないよな。あそこまで出来るか分からないけど、やってみる価値はある。働け！私の妄想力！！

「はい」

サーイエ・アマーノウ、行きます！！…ってね！

第3話：やっぱり我が身が一番かわいい（後書き）

一応伏字&元ネタ解説

・ボカ●I VOCALOIDの略。ヤマハが開発した音声合成技術及びその応用製品の総称。右からゝはそのシリーズのキャラクターの曲の歌詞を抜粋したものです。

第4話：立ちほだかるは・・・

「はッ！」

私は剣を横に大きく振ると、突風を起こしてガイシスさんを遠く離れた後ろの壁際まで吹き飛ばした。だけどガイシスさんはそのまま壁ぶつからず、踏ん張って耐えた。

ふむ、こんな感じか。じゃあもうちょっと強めにー・・・オラア！
！今度は竜巻を起こす勢いで剣を振りガイシスさんに向けて飛ばすと、流石のガイシスさんも吹き飛び壁にぶつかった。やっぱり魔法は私のイメージと思いの強さで変わるみたいだ。イメージが出来てなくても、こうなれ！とか思っていると、勝手に発動する。だから多分私に攻撃が当てようとしても、私がそれに気付いていればあんまり酷いダメージにはならないんじゃないかな？

落ちろ稲妻！

「うあッ！！」

私が魔法の解析をしていると、いきなり全身に衝撃が走った。くそう、不意打ちだからちよっと痛いじゃないか！遠くに吹き飛ばされたガイシスさんが楽しそうに笑いながら、ゆっくりと私の方に向かって歩き出していた。どうやらガイシスさんが雷の魔法を使ったらしい。軽く体が麻痺して変な感じ。

「ほら、座ってないでどんどんいくぞ！」

ガイシスさんタフだなあ。私はまだ痺れの残る体を起き上がらせると、魔法で体を軽くして一気に後ろへ飛んだ。とりあえず体の痺

れが取れるまで、他の魔法を使って時間稼ぎでもするしかないな。
私は距離をとりながら、サッカーボール大の炎を数個作り、ガイシ
スさんに向けて飛ばした。

疾風よ、我が剣の力となり全てを断ち切らん！

そう叫ぶと、ガイシスさんの剣に風が纏い、私の飛ばした炎を綺麗に斬って攻撃を避けた。…どうやらあの中二病な言葉が呪文らしい。私、詠唱が必要なくて本当に良かった。このままじゃすぐに追いつかれるので、私は1m程の氷柱を大量にガイシスさんに向けて飛ばした。しかしそれも剣を薙ぎ払われて氷柱が砕かれてばらばらと地面に落ちていく。

「残念だが全部はずれたな」

「そうですね。だけどこれでいいんです」

「何だと？」

「すみませんが少し大人しくしていて下さい」

「っ・・・！何だ？」

私を追いかけるガイシスさんはその場所から動けなくなった。何をしたかと言うと、忍法・影縫いの術――！よく忍者がくれないを影に向けて投げて地面に突き刺して、敵をその場から動けなくするという術ですね、はい。くないが無いので代わりに氷柱を投げてみました。本当はシカ・ルみたいにやってみただけだね。

さて、痺れも取れたし他の魔法も試してみますか。属性のある魔法は出来るけど、無属性の魔法も出来るのかな？何だろう…エネルギー波とも言え良いのかな。そう、かめ・め波みたいな！かめは●波…●Bを見ていた人なら一度は出してみたいと思う技。今なら・・・出来るかな？でもなあー・・・うーん…。

一人で葛藤している間に、ガイシスさんは炎の魔法を使って氷柱を溶かして脱出をしようとしていた。あー、早くしないと逃げられちゃう。どうしよう…。私はチート・チートなんだ。やれば・出来るはず！

私はゴクリと唾を飲み込むと、私は剣を納めると両手を左の腰元に持っていていき、気を貯めた。

「かゝめ…」

あ、手の中がぼわわってしてきた！集中するとどんどんエネルギーが溜まってきているのが分かる。良い感じかも！

「はゝめ…」

氷柱を溶かしていたガイシスさんは私が変な事をしているのに気がつき、炎を溶かすのを止めた。どうやらエネルギーを溜めている私を危険な物と判断したらしい。

我らを守るハハなる大地よ！我に慈あいの加護を授け給工！！

ガイシスさんが呪文を唱えると、彼の周りにバリアのようなものが現れた。呪文がカタコトだったけど大丈夫か？まあどっちにしろそんなバリアじゃ防げないよ！何てったってか●はめ波は山一つ吹っ飛ばせる程の破壊力だからな！

私の掌の中でエネルギーがバレーボールを超えるほど溜まった。よし！●仙流奥義を受けてみる！！いけっ！！

「波——っ！！！！
ぽすっ

「……………は？」

私が両手を前に突き出してかめはめ波を出そうとした瞬間、掌の中のエネルギーが急に消えた。

えー何でー！？何で出ないの？！さっきまで手の中でエネルギー溜まってたの何だよぽすっ…って！やっぱり●仙人の下で修行してないから出来ないのか？！それとも著作権法違反か？うわぁーんそんなぁー！！

私がてんばつっていると、その様子を見ていた皆は目が点だった。

こいつ何してんの？みたいな。あ、私あのポーズのまんまだ。

・・・はーずーかーしー！！痛い痛い痛い！！あーもー馬鹿！20歳にもなっつかめはめ波を出そうなんてガチでヤバイだろ！海外ではかめはめ波大会があるけど、彼らほどなりきれてない！ていっかなれる訳がない！！

「ううゝ…」

恥ずか死ぬうゝ…。顔が熱い。顔から火が出るとか言うけど本当に燃えてるように顔が熱い…。私は唸り声を上げ、真っ赤であろう顔を隠してその場に座り込んでしまった。

「サーイエ、どうしたの？」

「どこか痛むのかい！？」

ええ、もう痛過ぎて心が悲鳴を上げてますよ…。ああ・何でかめはめ波なんてやろうとしてしまったんだろう…。そうだよさっき中二な呪文を唱える必要がなくて良かったなんて思ってたのに、何でそれ以上に痛い事してんだよ！！いくら憧れと好奇心が疼いたからって…うう。チートだから何でも出来ると思ったのが間違いだつたよ。調子に乗ってごめんなさい。だけどそれが出来るのがチート

じゃないのか？はあ・・・ここに来て初めて自分はエセチートだと言うことが分かったよ…。みんなが元ネタ知らないからまだマシ・・・いや、それ以前の問題だ。知る、知らないじゃなくて、いい大人としてやってはいけない一線を越えてしまった…。もう駄目だ。オワタ。

「おい、大丈夫か？」

…ガイシスさん、氷、溶かせたんだね。みんな心配して私の所に来てくれるのは嬉しい。嬉しいことだけど…ぶっちゃけ今は来て欲しくない。ていうか散れ。

「・・・大丈夫ですけど大丈夫じゃありません。だけど大丈夫なんで放って置いてください」

「どっちだよ」

「そこまで落ち込まなくて良いと思うけど…」

「いえ…落ち込む事なんです。私の沽券に係わる事なんです。ええ、もう本当に…」

「そんなに辛いなら、私が慰め「結構です」

「…釣れないな」

アドニスさんは残念そうにふう、と溜息を吐いた。誰が釣られるか！お前はウ●タロスか！！だったら大人しくデンラ●ナーでコーヒー飲んでろ！！！！

「ほら、いつまでも落ち込むな」

「ううゝ・・・」

「座り込んでたら試験が出来ないだろう」

恥ずかしい…。まだ顔が熱い。絶対赤いよ。だけど試験しなくち

やいけないし…。もう最悪だ。仕方なく私はゆっくり顔を上げると、じーっとガン見されていた。もういやー！

「そんなに见ないで下さいよ！」

私はまた顔を隠した。何でこんな恥ずかしい目に合わなければいけないんだ！ああもう穴があつたら入りたい！！塵になって消えたいわ！！！！

「あ、すまん…」

「うん、ごめん…」

ガイシスさんとロイスさんは決まり悪そうに謝ってた。何が思わずだ！羞恥プレイなんて望んでないっつーの！！

「だけどそんな風に可愛らしく頬を染めて潤んだ瞳で見つめられたら、誰だって君に見惚れてしまうよ」

「……はあ？アンタ馬鹿あ？私は呆れてアドニスさんを見上げると、彼はニッコリと微笑んだ。」

「そんな愛らしい瞳に見つめられたら、僕の方が照れてしまうな」
「……………」

この冷めた視線をそんな風に受け止めるなんて、随分おめでたい思考回路だ。なんか一気に冷めたわ。一瞬でこの恥を消し去るほど

のクサイ台詞を言えるなんてすごいなお前。もういい、この事は忘れよう。

「心配を掛けてすみませんでした。ガイシスさん、試験を続けましよう」

「え？ああ、そうだな」

よっこいせつと。もうこうなったらとっと終わらせよ！

「わっ！サーイエー！私の側で剣を振らないでくれよ！-」

「あーすみません、つい勢い余ってしまって」

私は素早く剣を引き抜いたその勢いでアドニスさんに剣を当てようとしたけど、残念ながら避けられてしまった。ちつ。

「次は気をつけて」

「はい」

次は逃げられないように気を付けますよ。アドニスさんは肩を竦めると、ロイスさんと一緒にトリスさんのいる所へと戻っていき、ガイシスさんとは距離を取った。

あー、もう。アドニスさんのせいでイライラしてきちゃったじゃないか。とりあえず殴りたい。先程の醜態を思い出すと、私の中でむくむくと怒りが膨らんできた。自分で自分を殴りたい。あの記憶を消去したいわ。だけど本当に何で出なかったんだろう？うーん、他にも版權物をやってみようかな。だけどさっきみたいになる可能性が…。いや、もうこれだけ恥かいたんなら何しても恥ずかしくない！最初からクライマックスだ！

「はあっ！-！」

魔・剣！！テイル・シリーズでお馴染みの技！思いつきり剣を振ったけどやっぱり出ない！！だが・・今回の私はさつきとは違うのだ！私はそのまま剣を振った勢いで一回転して、大きな風の刃を飛ばした。ふう、失敗したのを上手く誤魔化した。それにしても…こんな所まで著作権法が働くなんて思ってもみなかったよ。異世界なんだからいいじゃないか！ネズミの国じゃないんだからそれくらい許してよ！！！！

心の中で叫んでいる間にガイシスさんが近づいていたので、地面を剣で抉り、ガイシスさん目掛けて地面を隆起させた。やっぱり技名を考えないと出来るんだよねー・・もういいや。版權技は諦めよう。ガイシスさんの足場を崩した瞬間、思いつきり剣を振り下ろした。何でも良いから当たれ！スツキリさせる！！

だけど私の願いは叶わず、ガイシスさんは地面に尻を着きながらも私の剣を受け止めてしまった。やっぱり力が強い。全力で振り下ろしているのにも関わらず、びくともしない。手がぶるぶるしている。

「残念だったなサーイエ」

「残念だと思っただけですらっ・・大人しく当たって下さい！」

「それは断る。最初のしおらしさはどこに行っただ？」

「力を試す、良い機会なんですよ？」

「そうだな。じゃあその力で俺を倒してみろ！」

「うわっ！」

ガイシスさんは勢いよく起き上がり私を押すと、バランスを崩した私は後ろに反り返ってしまった。もうガイシスさんは剣を振り下ろそうとしていた。やばい防御が間に合わない！！私は次に来るであろう痛みに目を瞑った。

「よつと！」

「あいたーっ！！」

うぐお……！！よ、横腹はちよつ・・キツいつす……！私は思わず腹を抱えこんで悶えた。正面から攻撃が来ると思ってたら、ガイシスさんは私の横腹を柄で突いたのだ。軽く突いただけなのに横腹は痛い。地味に痛いんだよ地味に……ぬう……！！

腹を抱えながらガイシスさんを睨むと、ガイシスさんは楽しそうに笑っていた。

「よくもやってくれましたね……」

「隙だらけなお前が悪いんだろ？」

そういつてガイシスさんは悶えている私の頭をぽんぽんと軽く叩いた。くっそお……！舐めやがって……！！てめえは俺を怒らせた……！！

「絶対に『あべし！』って言わせてやります……」

「何だそれ？」

「とにかくそれ位すごいやつを喰らわしてやるって事です！」

「そうか、じゃあ頑張れよ」

「言われなくとも……！！」

私は剣を横に振って周囲に風を巻き起こしてガイシスさんをふっ飛ばすと、今度は縦に振って雷を落とした。

「くっ……！！」

「まだです！」

私は剣をガイシスさんに向けると、ボールをイメージして気の塊を打ち込んだ。手加減したから多分バレーのアタックくらいにしか

なっていないと思う。だけどバレーボールって結構痛いんだからね！
アタックNo.●を見るとよく分かるよ！！

ガードの遅れたガイシスさん攻撃を全部受けて吹っ飛んだので、
私は後ろの壁まで大きくジャンプして壁に着地した。カカ●先生、
上手くチャクラコントロール出来るようになりました！褒めてくだ
さい！・・・って言っても誰も褒めてくれないんだけどね。さあ・・・

「約束通り、すごいやつを喰らわしてやりますよ」

全力でぶん殴ってやる！私は強く拳を握ると、宙を舞うガイシス
さん目掛けて思いつきり壁を蹴った。

「オラッ！！！！ってうわっ！！」

ヤバイ！蹴りと思いが強過ぎた！！！！

「ガイシスさん避け「ぬぐおおッ！！！！」

「ひでぶっ！」

…こ、こんなはずじゃ……。酷い悲鳴を上げてぶつかると、
私達は無様に地面に落ちた。私はもう、死んでいる…そんな気分だ。
ガイシスさんに『あべし！』って言わせたかったのに、まさか自分
が『ひでぶっ！』って言うことになるとは……。もう泣きたい！

「・・・確かに、すごいやつを喰らわしたな」
「・・・そうですね」

呆れたように言うガイシスさんに、私は返事をする気力も無かつ
た。もう痛い・・・痛すぎる。心身ともに今までで一番痛いわ…。体

がじんじんする。だけど骨とか折れてはなさそうだからまだいいか。
あー・・・色々痛いし疲れたから動きたくない。

「サーイエ！ガイシス！2人とも大丈夫か！？」

「ガイシス！何をしているんだ！早くサーイエから離れる！！」

アドニスさんうるせー・・・まるで私が危険物みたいじゃないか。
まあ間違っちゃいないけど。ミサイルみたいな捨て身のタックルは
なかなか出来ないからね。私はカミカゼか？

「離れろって言われても、サーイエが退かなきゃ無理だ・・・」
「え？」

そういえば動くのがたるかったから気付かなかったけど、確かに
地面じゃない感触。顔を上げるとガイシスさんと目があった。私、ガ
イシスさんに乗っかってる。

「・・・・・・・・・・」

私はさつとガイシスさんから退くと、土下座をして一息も着かずに謝罪をした。

「すみません捨て身の攻撃を受けて痛いのに更に重たい思いをさせて
もうホントごめんなさい」

「いや、大丈夫だから気にしないでいい。最初に思いつきりやれつ
て言っただのは俺だしな」

「だけど・・・」

「そつだよサーイエ、君が謝る事はないよ。悪いのはガイシスなん
だから」

アドニスさんは何を根拠に言ってるんだ。明らかに私が悪いだろう。

「ほらサーイエ、私が治してあげるから傷を見せて」

「大した怪我じゃありません。ただの擦り傷なので放っておけば治ります。先にガイシスさんを治して下さい。ダメージが大きいのはガイシスさんですから」

私の怪我はさっきの捨て身のタックルで扱った時の擦り傷しかない。雷も少しビリビリしただけで、そんなに痛いものではなかった。多分だいぶ手加減してくれたんだと思う。それに横腹は痛かったけどあの時だけだしね。それに比べてガイシスさんは風で吹っ飛ばされるわ、雷に打たれるわ、ボールで滅多打ちにされた拳句、捨て身のタックルをもろくらったからね。絶対痛いでしょ。

「ガイシスは放っておいても簡単に死なないから大丈夫だよ。それにトリスがやるからね」

「そうですか…」

「君は優しいんだね、サーイエ」

「は？」

アドニスさんは優しく微笑むと私の手を取った。え、何？

「私は優しい女性は好きだよ」

「……」

だから何だ。誰もアンタの好みなんて聞いて聞いてないんですけど。それに普通、怪我人は酷い方を優先するもんでしょ。あんたが優しくないだけじゃないの？あー、この人がいると毒舌が止まらな

い。

気落ちしていると、アドニスさんに握られた手がふわふわと温かくなり、それが全身に行き渡ると私の体の疲労と傷は癒えていた。

「まだどこか痛い箇所はあるかい？」

「いえ、ありません。ありがとうございます」

「当然のことをしたまでだよ」

「はあ……」

キラキラとした笑顔のアドニスさんは少し・いや、かなりかな。鬱陶しいけどやっぱり白騎士団長だけあるわ。前にアンヌに怪我を治してもらった時と比べるとかなり早い。まああの時はもつとぼろぼろだったけどね。

ガイシスさんの方を見ると、トリスさんに怪我を治し終えたところだった。

「ありがとな」

「ああ」

「ガイシス」

アドニスさんが真顔で立ち上がると、座っているガイシスさんを見下ろした。

「何故こんな事をしたんだ」

「入隊するに当たって必要だからだ」

「それは分かるよ。僕が言っているのは最後の事だ」

「最後？」

最後ってタツクルの事か？あれのガイシスさんの何が悪いんだよ。

「女性に跨ってもらう事だ」

「はあっ?!」

真面目な顔して何言ってるの!? ていうか問題はそこ?!

「いくら偶然の事故だからと言っても女性に恥を・・・黙れアドニス!!!」

「ぐっ!!」

私が呆気にとられていると、トリスさんがアドニスさんの頭をぶん殴った。おお…ナイスパンチです。

「お前のその考えの方が恥だ!!」

「しかしトリス! これはとてつもなく重要な事だ!」

「重要も何も無い! 大体お前はいつも…」

それから二人の口論が始まり、やがて内容が跨るだの何だのから普段の行動やモラルの話になって行き、それをぽかーんとしていると、ロイスさんが溜息を吐いた。

「サーイエ、この二人の事は気にしないでいいから」

「いつもの事だからな」

「そうですか…」

ていうことはいつもアドニスさんは不謹慎っつーことだね。アホくさ。

「それよりお前に入る隊は決めたからな」

「どこになったんですか?」

「三番隊だ」

へえ、三番隊なんだ。三番隊って確か付加魔法だっけ？

「お前は信じられないほどの魔力や俊敏さを持っている。だがその力を自分でも持て余しているんじゃないか？」

「そうですね…」

「だったらそれを最小限に抑えて有効に使った方が良さだろう。付加魔法を覚えれば、力の弱さもカバー出来る。それで自分の力が上手くコントロール出来る様になったら二番隊に、武術の腕も上がったら一番隊に入ってもらおう」

「分かりました」

「三番隊の隊長はルーカス・フォンドだ。覚えてるか？」

「あ、はい。部屋の外で警護をして下さった人ですよね？」

「ああ。あいつは頭が切れるし人を見る目がある。考え方も柔軟だから問題は無いだろう」

確かに参謀って言ってたしね。私の中の参謀って地味なイメージだったから、説明されなきゃあんなにフェロモン垂れ流してる人が参謀だと分からなかった。目だけで妊娠させるとか言われてそう。うん。これも色々と危ないと思うから、悪いけどあんまり近寄らないようにしよう。

「隊についての詳しい話はルーカスにさせるから、お前は部屋に戻っていてくれ」

「分かりました」

「それからサージェ」

「何でしょうか？」

真面目な顔になって真剣みを帯びた声でガイシスさんは真っ直ぐ

私を見据えた。

「今日からお前は我が黒鷲騎士団の一員だ。これからお前には様々な苦難が待ち受けているだろう。だがお前は一人ではない、俺たち仲間がいる。決して、誇りと自分を見失うな。心を強く持ち、気高く生きる」

漫画とかに出て来そうな台詞だけど、この人はそれを本気で言ってくれている。それが今の私にどれだけの勇気を与えてくれるんだろう。本気で言ってくれるからこそ心に響く。この人ほど団長に相應しい人は居ないと思う。この私でさえ一瞬で、この人に付いていきたいと心から思えたのだから。

「はい……ガイシス団長」

「ああ」

私が笑顔で応えると、ガイシス団長は爽やかな笑みを浮べて私に手を差し伸べた。私はその手をしっかりと握って立ち上がった。握った手はとても大きくて固く、熱く感じた。

「ありがとうございます」

「じゃあ俺は陛下に報告しておくから、後はロイスの指示に従ってくれ」

「はい」

「ロイス、サーイエの事頼んだぞ」

「ああ」

「よし、じゃあ入隊試験はこれで終わりだ。アドニス達もつき合わせて悪かったな」

ガイシスさんの言葉にアドニスさん達はようやく口論を止めた。

「え？ああ、全然構わないよ。サーイエとも仲良くなれたからね」
「……」

どこが？あなたと仲良くなった覚えないんですけど。むしろ私はあんたの印象が悪くなったよ。正直私はアドニス…団長にはあんまり居て欲しくなかったんだけど…まあいいや。

「皆さん今日は有り難うございました。これからもお世話を掛けると思いますが、よろしく願います」

「遠慮せず何でも言ってくれて構わないからね」

「…ありがとうございます」

じゃあとりあえず黙ってくれ……。とか言いたい。アドニス団長に苦笑を返すと向こうはキラキラとした笑顔を返してくれた。そしてガイシス団長を始め3人は、ロイス副団長を残して部屋を出て行った。

第4話：立ちはだかるは・・・（後書き）

一応伏字&元ネタ解説

- ・シカマ・ - 人気忍者漫画のキャラクター。影を使った忍術が得意で頭がかなり切れる。
- ・か・はめ波 - ドラゴンボールに出てくる技。気を凝縮させて一気に放出する。
- ・D・ - ドラゴンボールの略。
- ・亀・流奥義 - 武天老師の流儀。
- ・亀仙人 - ドラゴンボールに出てくるキャラクター。主人公の師。武天老師の別名。
- ・ウラタ・ス - 仮面ライダー電王に出てくるキャラクター。かなりの自信家な上キザで女好き。口がうまい。
- ・デン・イナー - 電王に出てくる時の列車。
- ・人剣 - ゲーム・テイルズシリーズの最も基本的な技。剣を振ると地を這う衝撃波を放つ。
- ・ア・ックNo.1 - 青春スポ魂バレー漫画及びアニメ。普通のバレーじゃない。
- ・カ・シ先生 - 人気忍者漫画のキャラクター。主人公の班の教官。一応天才忍者。
- ・あべし、ひでぶ - 北斗の拳の断末魔の悲鳴。

第5話：誰だよっていつか知らねえよ！

とぼとぼと部屋に戻ると、ロイス副団長がお茶の用意をしてくれた。

「ん！おいしい！！」

「そう？」

「はい！すごくおいしいです！」

ロイス副団長の淹れてくれたお茶は、高級なダージリンのような深い味わいと心地よい香りのするお茶だった。この味はティーパックじゃ出せないね。私はティーパックのお茶しか出せないよ。

「良かった。ほら、これもどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

お茶の味に感動していると、ロイス副団長はお茶菓子まで出してくれてた。おいしいお茶も出せるし、お茶菓子を出す心遣い。きっといいお嫁さんに…ならないか。旦那だね、うん。だけど誰かの心の中で嫁にもらわれると思うよ！ロイス副団長と過ごす時間は不思議なほど落ち着いていた。この城に来てこんなに気が休まったのは初めてな気がする。私はソファに凭れかかった。

「疲れたのかい？」

「あー、まあそうですね。この城に来て初めてこんなに和んだなあと思います」

「初めてこの部屋に来た時も緊張していたね」

「はい。こんなに芸術品に囲まれたのは初めてですし、それを私が使って良いのかと不安になりました…。あの、私って ずっとこの部屋で過ごすんでしょうか？」

「うーん、それは陛下に聞かないと分からないな。俺たちが決める事じゃないし」

「そうですか…」

「だけど今までみたいに俺達が部屋を警護する事はなくなると思うよ」

「ホントですか!？」

「随分嬉しそうだね」

「あ、すみません」

「クス、いいよ気にしないで。実際僕もいつまでも他人が自分の部屋に居られたら窮屈に感じるだろうからね」

ロイス副団長…やさしいな。ロイス団長やルーカス隊長みたいな派手さはないけど、普通に整った顔立ちしてるし、穏やかな雰囲気 that 落ち着く。ずっと一緒に居るとしたらこれくらいの人が一番安定した暮らしが出来るそう。

「どうかしたの？」

「いえ、何でもありません。お菓子頂いてもいいですか？」

「うん、どうぞ」

私はもれそうになった溜息を、お菓子と一緒に飲み込んだ。

それからしばらくロイス副団長と和んでいると、コンコンとドア

を叩く音が聞こえた。

「どなたでしょうか？」

「俺だ」

「俺も！」

誰だよ。オレオレ詐欺か。しかも許可も取らずに2人は部屋に入ってきた。ああ、ルーカス隊長と…誰だ？赤い髪をしてるから王族か？どこことなく陛下に似ている気がするので多分王子だろう。

「よう！サーイエ！」

「…こんにちは」

「何だ元気ねえな」

「え、そのようなことはありません」

ただいきなり王子に友達感覚で来られても困ってるだけですよ。

「そうか。ならいい」

（多分）王子はずんずんと進んでくると、私の横のソファに元気よく座った。よくこのソファをぞんざいに扱えるな！さすが王族！

「ロイス、茶」

「ああ、いま淹れる」

ルーカス隊長は向かいのソファに座ると、軽く一息を吐いて髪をかきあげた。…すっげーフェロモン。アニメだったら絶対に彼の周りの空気はキラキラのピンク色だよ。普通だったら不快に感じるんだけど、この人は全然わざとらしくない。むしろすっごいナチュラル。超似合ってる。声もなんかエロいもん。気だるげな喋り方なせ

いか吐息が……。テニ・リの忍・みたいだ。多分素でこうなんだろうな。きつと近くにいたりかなり迷惑を被りそうだ。あーあ。この人の隊ですごく残念。

「ほら」

「おう」

「サンキュ」

2人はロイス隊長からお茶を受け取ると、（多分）王子は一気に飲み干した。熱くないのか？

「ロイスおかわり」

「……マーリンド、少しは味わいなよ」

「味わってるって。ほらおかわり！」

「まったく……」

「へへっ」

ロイス隊長は溜息を吐きながらもお茶を注いだ。お母さんみたいだな。生意気だけどなんか憎めない、そんな感じかな。私が（多分）王子を観察していると、私の方に振り向いた。

「何だお前も欲しいのか？」

「え、そのようなことはありません」

「ならいいけど……なんかお前固くねえか？」

「え、そのようなことはありません」

「それ三回目だな」

ルーカス隊長がお茶を啜りながら呟いた。観察しないでください。

「やっぱり固えじゃねえか。何でだ？」

「マーリンド、質問ばかりしてサーイエが困ってるだろ」

ロイス隊長が（多分）王子にお茶を差し出しながら助け船を出してくれた。ありがとうお母さん！あれ？もうこの世界にお母さんが二人も……。まあいいや。それよりこの人マーリンドっていうのか。私がこの城で会った人は限られてるから……

「ああ！」

「どうした？」

「もしかして牢屋の騎士様！？」

「何だ？お前オレのこと忘れてたのか？薄情なやつだな」

「忘れてたって言うより顔を知らなかったんですよ！」

「あー、そういえばあの時は甲冑がぶつてたな」

「はい。それなのにいきなり友達感覚で来たから困ったじゃないですか！」

「あはは、悪い悪い」

「お前達仲いいな」

「え？」

今まで傍観していたルーカス隊長がぼつりと呟いた。

「そうだな。何かあったの？」

「牢屋で話しただけです」

「何だよそっけねえな。一緒に一晩過ごした仲だろ？」

「そういう如何わしい言い方しないで下さい」

確かに言ってることは間違っていないけど、他に言い方があるだろうが！ルーカス隊長が興味を抱いてしまったじゃないか！

「それより何であなたがここにいるんですか？用があるのはルーカ

「ス隊長ですよな？」

「ん？ああ、そうだな」

ルーカス隊長は返事をしながらも呑気に茶を飲んでいる。この人何しに来たんだよ…。

「別にお前に会いに来ただけだ」

「え？何で？」

「だって俺も隊長なのに挨拶がないなんてずるいだろ」

「……あなた隊長だったんですか？」

「あれ？言つてなかったっけ？」

「聞いてませんよ」

「あはは、悪りい悪りい」

それ本日2度目なんですけど。

「まったく…それじゃあサーイエが分からなくても仕方がないな」

「一国の王子が情けない」

「うるせえなルーカス！」

「ほらマーリンド、ちゃんとサーイエに自己紹介するんだ」

「ああ？あ、悪りい。俺はオラリオス帝国・第三王子で黒鷲騎士団四番隊隊長のマーリンド・アーサナート・オーデイスラルドだ」

また長い名前かよ。四番隊ってことは武術が得意なのか。そんな感じるわ。

「えーと…マーリンド様でいいんですか？それとも隊長？」

「マーリンドでいい。よろしくな」

「あ、はい。よろしく願います」

「おう！」

は！流されてしまったがこんなにすっぱり王子を呼び捨てにしているのか？やばくね？身の安全が…。けどあんまり人の言うこと聞かなさそうだなあ。

「悪いが本題に入っていていいか？」

「あ、すみません。お願いします」

ルーカス隊長がカップを置いたので、私はルーカス隊長に向き直った。

「今回の試験でサーイエは三番隊に入隊が決まっただが、しばらくは仕事をせずに勉強をすることになった」

「勉強・・・ですか？」

「ああ。お前はイセアに来る前の記憶がほとんど無いんだろ？」

「え？そうなのか？」

「ええ、まあそうです…」

「けどお前親の顔覚えてたじゃねえか」

「え？！」

「ほら、確か目が父ちゃん似で口元が母ちゃん似なんだろ？」

「あー・・・」

しまったー！！！！そういえば牢屋で言ってたわ…。あの時はどうせ死ぬからいいやーとか思ってた普通に話してしまったよ！！あーどうしよう！落ち着け！落ち着くんだ私！！

「本当なのか？サーイエ」

「あの、その事については何というか…あやふやなんです」

「あやふや？」

「はい。臃げな記憶って、ありませんか？」

「臃げな記憶？」

「例えば……昔に会った人の顔は覚えているけど、名前は思い出せないとか」

「あー、よくあるよくある」

「王子のお前がよくあつたら困るだろ」

「じゃあお前の両親の顔も名前も憶えてないのか？」

「……」

率直な質問に私は俯いた。嘘ですごめんなさいめっちゃ覚えてます。父は誠で母は小百合です。ビールが好きなくせにすぐに酔っちゃう中年体系と、ジョニー・デップが大好きな少し細めのおばさんです。申し訳なさ過ぎて顔上げられないよ。嘘ついてる時に同情の眼差しを受けるのはきついよぉ。

「とりあえず、今はその事はいいでしょう。その後はサーイエには訓練をしつつ俺の補佐をしてもらう」

「補佐……ですか。補佐の仕事内容はどのようなものですか？」

「まあ、主に報告書の作成や書類の整理、隊に必要なものがある場合それを用意したりするとかそんなところだな」

「ぶっちゃけるとルーカスのパシリだぜ」

「あと仕事をサボらないように見張る仕事だよ」

にやにやしながらマーリンドは私を小突き、ロイス副団長は苦笑しながら言った。ルーカス隊長はそれに不服を漏らした。

「ちゃんと仕事してるだろ」

「確かにしているけどお前は書類を出すのがギリギリだし、隊に指示を出したら時々姿を消すだろ」

「あー、それ情報収集に行ってるんだ」

「この間、俺の隊のやつがお前が昼寝してるとこ見つけたぞ！」

「それお前の隊のやつもサボってんじゃないのか？」

「え？そうか？」

「きつとそうだ」

ルーカス隊長はお茶を啜りながら悪気もなく答える姿にロイス副団長は溜息を吐いた。

「こんな感じに何だかんだと理由をつけてサボるからよろしく頼んだよ」

「はい、分かりました」

事務と雑用と見張りか。うん、地味でいいね！ルーカス隊長を見るとちよつと目が合いじーつと見られた。な、なんだよ。見つめられると少し照れるじゃないか。…て、ちよつと待て。平和な仕事を貰えた喜びで忘れてたけど、この顔、声、フェロモン。ルーカス隊長は絶対モテる。モテないわけがない。

ルーカス隊長の補佐↓一緒に居る時間が長い〃女性から嫉妬を買う可能性大。かなりの迷惑を被ることを思い出した私の喜びは一気に落胆に変わった。

「あの　ルーカス隊長」

「何だ？」

「私に出来る仕事ってそれだけですか？」

「何だ、もっと働きたいのか？」

「え、そういう訳では…」

「それならオレの書類も整理してくれよ！」

「マージンドはサーイエに任せたら全く書かないだろ」

「だってサーイエが書くんならオレが書く必要なんてないじゃないか」

「いや、だから…」

他の意味で身の安全な仕事をくれって事ですよ！でかい声で言いたいけど言えない。

「とりあえず今はお前がどれだけ働けるのか知りたいから我慢してくれ」

「はい…」

今は我慢 仕方ないか。仕事を選び好み出来る身分じゃないからね。私は内心大きなため息を吐いた。

「悪いな」

「え？」

「お前の要望に応えられなくて」

そう言つてルーカス隊長は蠱惑的に笑つた。ルーカス隊長からしたら普通に私を見ただけなのかもしれない。だけど何故か自分の考えが全て見透かされているような気がしたから。うーん…さすが参謀、だね。

「じゃあ、今日の俺の要件はそれだけだ」

「はい、分かりました。わざわざありがとございました」

「ああ。ロイス」

「何だ？」

「茶」

「……」

「オレは菓子追加―！」

……用事が終わつたんなら帰つてよ。

結局ルーカス隊長達は夕飯近くまで私の部屋に居座った。最初は城や騎士団の話をして、私の話になると記憶喪失設定を駆使して話題を遠ざけた。途中でヒヨが私の夕飯の準備をに来るまでずいぶん時間が経っていることに気が付かなかった。ロイス副団長は急いでルーカス隊長はマイペースに部屋を出て行ったが、何故かマーリンドはそのまま居座って私とヒヨと一緒に夕飯を取った。

「ねえマーリンド」

「んあ？」

「口にソースついてるよ」

「ん」

マーリンドは口をもごもごさせながら返事をする、口の周りをべろんと舐めてまた食べ続けた。お前はガキか。

「マーリンドって一応王子なんだよね？こんなんでいいの？」

「別にいいって。公の場ではちゃんとマナー守ってんだし。な？」

「うーん…」

「これ食わないならもうぞ」

「あ」

私が考えている間にマーリンドは私の皿に乗っていた残り物をつまんでいった。

「マーリンド様はしたないですよ！」

「あー。いいよヒヨ。もうお腹いっぱいだから」

「そういう問題じゃ・っつて、ヒヨつてもしかして僕の事ですか？」
「うん。ヒヨックートって言い難いし」

「そうか？」

「私はね。それにヒヨの方が可愛いでしょ？」

だつてぴょんと跳ねてる毛がヒヨコみたいで可愛いんだもん！
ヒヨなんてぴつたりの名前じゃないか！

「か、可愛いだなんて失礼じゃないですか！僕は男なんですよ！！」

ヒヨが顔を赤らめて反論してきた。予想通りの反応が可愛いなあ。

「そういえば昔よくドレス着せられてたよな」

「え！？マジで！？？」

「昔の話です！！」

「マジマジ。オレ初めてこいつに会ったとき女だと思ったもん」

「うわぁー超見たい！ヒヨ着ない？」

「絶・対・着・ま・せ・ん！！」

「まだいけるんじゃないの？」

「いけません！というよりそんな問題じゃないでしょう！！いい加減にしてくださいよ二人とも！怒りますよ！！」

「もう怒ってんじゃないかねえか」

「あはは確かに！！」

「~~~~！！」

ヒヨは顔を真っ赤にして怒りと羞恥に耐えていた。あー久しぶりに涙が出るかと思った。いちいちムキになって答えるヒヨはすごくいじりがいいがあって可愛い。まあ可愛いなんて言ったらまた怒るだろうから言わないでおこう。

「まったく・・・！」

「ごめんごめん。拗ねないでよヒヨ。ほら、このデザートあげるからさ」

「別に拗ねてなんかいません！それにいいじゃない！」

「んじゃオレがもらう」

「あんたは少し遠慮しなよ」

「食わないなら一緒に一緒だろ？むしろ食べ物を粗末にしないオレに感謝しろよー」

私を肘で小突くとあーんと大口を開けておいしそうにデザートを頬張る姿を見ると何も言えなかった。まあ・・・いいんだけどさ。おいしく頂かれたなら食材もきつと本望だろうよ。

食後は二人の関係について教えてもらった。なんとヒヨは將軍の息子らしい。この顔で將軍の息子とか將軍はどんだけ可愛い顔してるんだろう？気になるなあ。まあそのおかげで王家と関わりがあり、幼い時に会って同い年ということも手伝って仲良くなったそうだし話を聞く限りだと昔からヒヨはマーリンドに振り回されながら面倒を見てきた感じだけだね。長年お勤めご苦労様です。

その後も二人と談笑しているとノック音が聞こえた。

「はい」

「陛下があらせられた。開けるぞ」

「どうぞー」

ザビーがドアを開けると陛下と共に部屋に入ってきた。

「マーリンド？」

「おっすオズ兄！」

「何故お前がここに居るのだ？」

「サーイエに会いに来たからに決まってんじゃない」

はい、実に簡潔ですね。確かにそうでなきゃあなたはここに居ませんよ。陛下は訝し気にマーリンドを見た。

「何だと？」

「あー、それは黒騎士団隊長の中で自分だけ私にちゃんと挨拶してなかったからわざわざ来てくれたそうです」

「ほう、こんな時間にか？」

「いえ、それは夕方に来てそのまま居座っていただけです」

「そうそう」

「…て、何で私があんたの説明を代わりにしなくちゃいけないのよ」

「まあいいじゃねえか」

「まったく…。ちゃんと自分で答えなよ」

「へーへー」

「……」

これは絶対に答える気ないな。お母さんの『宿題やりなさいよー』に対する返事と同じだ。本当にガキだ。

「随分、仲が良いのだな」

またこの質問だ。だけどルーカス隊長とは違って陛下のは少し冷えた声だった。え、何また何か怒らせた？ うーん…あ、あれか！ マーリンドと仲良くしてるから怒ってるのか！ うわぁー逆ハ！ 設定めんどくせえ！！

「ああ、一緒に一晩過ごした…ゴフツ！ 痛ってえな！ 横腹突くな！！」

「あんたの言い方が悪いからいけないの！ 普通に言いなよ！！」

「じゃあ同じ皿の飯を食った仲だ」

「それも違う！！！」

もう何なのこいつ！何で普通に言えないの？！誤解を生むことに
気付け馬鹿！！

「・・・で、実際はどうなのだ？」

「だから陛下！これはただマーリンドが牢屋の見張り番だったのと、
私の残した夕飯をこいつが勝手に食べただけです！！」

「オレちゃんと許可取ったし」

「返事をする前に食べてたら意味ないわ！」

「…もう良い」

「え？」

「ヒヨックート、マーリンドを連れて部屋を出よ」

「え、あ、はっ！」

ヒヨは勢いよく敬礼をすると、マーリンドを引き摺って部屋の外
へと向かった。

「おいヒヨックート放せよー」

「だめです！陛下のご命令をお聞きください！」

「オズ兄」

「出ていけ」

「……………」

陛下の怒りを感じたのか、マーリンドは不貞腐れながらも大人し
くヒヨに引き摺られていった。ああ、私も一緒に行きたいよ…。

ぱたんとドアが閉まると、冷たい沈黙が部屋の中に流れた。うわあ
陛下に話しかけたくねえー！少しばかりの期待を寄せてザビーに視
線を向けると・・・ガン無視。そうだよな！お前はそいう奴だ
もんな！ちよつとでも期待した私が馬鹿だったよ！！

「サーイエ」

「はい！」

陛下に呼ばれ反射的に返事をする、不機嫌そうに陛下は私を見ていた。もう何で怒られなきゃなんないのさー！

「来い」

「え？」

「良いから来い」

有無を言わせなかった。内心溜息を吐きながら、私はじりじりを陛下に近付いた。やだなあこついうの。けど負けないんだからね！陛下の前に立つとしばらく睨み合い、ぽつりと陛下が呟いた。

「何故…」

何故？

「何故お前は余の事を愛称で呼ばぬのだ」

「………は？」

「何故余の事を愛称で呼ばぬのかと聞いている」

「え？何でって…」

「ザビロニスやヒヨックートでさえ呼ばれているのに、何故余の事は呼ばぬのだ。昨日ちゃんと教えたであろっ？」

「それはそうですけど…」

「呼べ」

陛下はきつく言いながらも切なさを湛えたような自然を私に向けた。もう何なんだよこれ…。私は内心溜息を吐いた。

「オズ」

仕方なくそう呼ぶと陛下の視線が少し和らいだ。そんなに愛称で呼ばれたいものなのか？私はあんまり好きじゃなかったな。『さえっち』とか勝手にニックネームを付けられたときは嫌だったよ。『っち』ってなんだよ『っち』って。たまごっちじゃねえんだぞ。けど陛下…いや、オズにとっては大事な問題なんだろうなあ。もしかして…

「朝、機嫌が悪かったのもそのせいなんですか？」
「……………」

つんとした表情をしてるところを見ると当たりのようだった。くーだーらーねえー！！この人もガキだな！さすがマーリンドのお兄さんだよ！呆れたようにオズを見てみると、視界の端にザビーが見えた。『うわ…こいつマジ馬鹿だ…』って言ってるのがよく分かる。うん、私もそう思うよ。

「はあ…よく考えてくださいよ。私はあくまでも私は一般庶民の身分なんです。そんなやつが国王に向かって愛称で呼ぶなんておかしいでしょう？不敬罪に値してもおかしくないと思うのですが…」
「陛下、残念ながらこの者の言う通りです」

ザビーの残念ながらは陛下に対して『残念』じゃなくて私が言い当てたことが『残念』なんだろうな。嫌な性格してるね。

「そういう事です。だから我慢してください」

陛下は考えているのかどこかを見ているようだった。だがすぐに

視線を戻した。

「ではこうしよう。公の前では陛下と呼び、普段はオズと呼ばばいいだろう」

「…陛下、そういうものはいつか綻びが出るものです。どうぞ御自重下さい」

「その時はその時だ」

「……」

明るく言うオズに私とザビーは呆れていた。以外にこの人は楽観的だな。ザビーを見るともう諦めていた。あ、もうこの人はこれ以上言う事を聞く気はないってことですね。分かりました。もうこれ以上は何も言いませんよ。

「それで良いな？サーイエ」

「ええ、それでいいです…」

「陛下、そろそろ本題に入ってもよろしいでしょうか？」

「ああ」

ちゃんと用があつたんだね。愛称の件で何でこの部屋に来たのかすっかり忘れてたよ。

「今回の用件は、明日にお前の処遇を決める会議が開かれることになったのでそれに出席してもらう。重要決定案は大臣と共に相談し合い決めなければならぬ決まりだ」

「そうですか。けど私は何をすればいいんですか？」

「黙って立ってればいい」

「え？」

「相談しなければならぬが、結局最終決定するのは余だからな。心配することはない」

「なるほど。分かりました」

「明日はガイシス黒騎士団長とロイス副団長が迎えにくる。ちゃんと準備をしておけ。以上だ」

「はい。おつかれさまです」

「陛下、帰りましょう」

「先に行つておれ」

「御意」

ザビーはとつとと部屋を出て行つたのに陛下は留まつた。今度はなんだよ……。オズは私に近付くと顔を寄せてきたので反射的に後ろに引いた。

「何故離れる」

「いやそれはこっちの台詞ですよ。何で近寄ってくるんですか？」

「寝るときの挨拶はないのか？」

「はあ？」

オズは自分の左頬をつんつん、と触つた。おやすみのチューか。

「余の機嫌を損ねたのだからそれ位してもいいだろう？」

「そんなのオズが勝手に拗ねてただけでしょ。私のせいにしないで下さい。ていうか離れて下さい」

ぐいつとオズを押し返すと、オズは溜息を吐いた。

「サーイエは冷たいな」

「そんなことはありません。普通の反応ですよ。ほら、オズもういいでしょ。さつさと部屋出てって下さい」

「してくれないのか？」

「する訳ありません。ていうか絶対にしません。間違ひなくしませ

ん」

「そうか、では余がしよう」

「は？」

一瞬の隙をつき、陛下は私の額にキスをした。一瞬訳が分からなかったが、オズの面白いな笑顔ですぐに理解した。なんだこのどや顔は！してやった？ふざけるな！朝の腹いせかこんちきしょう！！私はオズを突き飛ばした。

「何してるんですかいきなり！！」

「寝るときの挨拶だが？」

「『挨拶だが？』じゃありませんよ！！勝手にキスしないで下さい！！」

「では聞いたら良いという事だな」

「違いよ！！…あ」

思わず素の喋り方になってしまった。オズは楽しそうにクスクスと笑っている。うあー、抑える自分。こっちが怒れば陛下が楽しむだけだ。…あ、そういえばさっき自分もヒヨで遊んでたわ。ヒヨ、ごめんよ。私は深呼吸をすると気を鎮めた。

「もういいから出てって下さい。おやすみなさい」

「サーイエモ…しねえよ！！とつとと帰れ！！」

私はオズの背中をずんずん押して部屋の外に出した。外で笑い声とおやすみという言葉が聞こえた。あー、全く王様は自分勝手だな！だけど王様だからって何しても許されると思うなよ！！何となく私は頬を拭い、そこを綺麗に吹いた。

「はあ…」

私は溜息を吐くとベッドに沈んだ。何でオズはこんなに私にくっついてくるんだ。こんな愛され設定じゃないよ。面倒くさい。巻き込まれる身にもなれよ。逆ハーより嫌われ設定の方が私にとってはマシだ。いや、それはそれ面倒くさいか。あー明日は会議か。いつそのこと死刑になった方が楽なのかもしれない・・・なんてね。

第6話…これがトリップの良いところ！

翌日、ガイシス団長とロイス隊長と一緒に会議室へと向かった。
はあ…ちよつと緊張してきた。いくら突っ立ってれば大丈夫と言われても、大勢の前で自分のことをを議論されるのは如何なものかと。会議っていうより裁判な感じだ。

「緊張してるのか？」

「え！？」

内心げんなりとしてると、いきなりガイシス団長に話しかけられたのでびっくりした。

「ええ、まあ そうですね」

「ははっ！前回の謁見の時とはすごい違いだな」

「確かに。あの時のサーイエは怖いもの無し、って感じだったね」

ガイシス団長とロイス隊長は前回の謁見の事を思い出し、笑い始めた。
別に笑い事じゃないんですけど。

「あの時はどうせ死ぬならどうでもいいやって感じてしたからね。緊張も何もありませんよ」

「そうか。じゃあ、今はどうなんだ？」

「今は…どうでしょう？」

「何だ、分からないのか？」

「多分、怖いんだと思います」

「怖い？どうしてだ？」

また自分の居場所を失ってしまうかもしれないから。

「どうしてでしょうね？」

私はそれを口に出ることが出来ず、ニヒルと笑っておどけた。そうするしかなかった。同情なんかされたくない。

ガイシス団長はしばらく私を見つめると、私の頭をぽんぽんと軽く叩き、屈んで私と視線を合わせた。

「お前が怖いと思っけていても、俺達はお前の味方だ」

「それに陛下が居るんだからあんまり怖がらなくていいよ」

ロイス隊長が私を安心させるようによしよしって感じに私の頭を撫でたので、何だか照れくさくなった私は俯いて顔を隠した。そしてたら今度はガイシス団長が顔を覗き込んで来たので困った。

私を子供だと思っけるから仕方ないけど、一応女の子だということと自分の顔の良さを自覚して欲しい。

「分かったか？」

「はい」

返事をするときガイシス団長が微笑んで私の頭を優しくぽんぽんと叩いた。2人とも私の頭に触るの好きだな。別に悪くないけどさ。

2人を見上げると優しく微笑んでくれたので、私もそれに笑

顔で応え、再び足を進めた。

「失礼致します。サーイエ・アマーノウを連れて参りました」
「入れ」

私は軽く深呼吸をすると会議室へ入った。部屋のドアが開くと、室内全ての視線が私へと注がれた。

約半数の人の髪が濃さは違えども赤い髪をしていた。多分王族が貴族だろう。これだけいれば自分の赤髪が貴重じゃないように思えてくる。

特に髪の色が赤い集団の中にはマーリンドも混ざっていた。今日はちゃんと王子っぽくしている。マーリンドと目が合うとウインクをさなので、黙ってればイケメン王子だと思いつつも、少し緊張がほどけて有り難かった。

マーリンドの隣を見ると、これまた美形が座っていた。赤くて緩くウェーブの掛かった超ロング髪の毛を三つ編みにしている。三つ編みにはアクセサリーが散りばめられていてオシャレ。服はゆったりとしていてレイが着ていた物に似ている。色白で美人だけど、そこまで華奢でもないし肩幅もあるから男性だろう。

その人と目が合うと、穏やかに微笑んでくれた。…良い人だ。だけど部屋の中の空気は穏やかではなかった。好奇や異物を恐れる空気で満ち溢れているからだ。私は内心溜め息を吐いた。

こんなことは今までに何度もあった。発作を起こした後、怖がられたし気持ち悪がれもした。だけどそれでも私は学校へ行った。だ

って行かなくなったら負けの様な気がしたから。

怖いから何？気持ち悪いから何？他人がどう思おうと私は私だ。

他人の定めた価値になんて堕ちたくない。

自分の価値を落とすのは自分がそれに負けたとき。私は自分を信じて。私の価値を決めるのは私だけだ。

私はオズの元にたどり着くと隣りに立たされ、ザビーの説明が始まった。

「この者がサーイエ・アマーノウです。年齢、出生ともに不明。外見から推測すると50代かと思われます。三ヶ月程前に護神の森から現れ、それ以降イセアで暮らしていました。先日、魔物を操りイセアを襲撃させた嫌疑に掛けられていましたが、陛下はこの者は犯人ではなく、先々代国王・アルフェルド陛下の庶子の子と判断され城で保護する事になりました」

ザビーの説明を聞くと室内にざわめきが起こった。

そりゃそうだ。いかにも怪しい奴が先々代の庶子の子だなんて俄か信じがたいだろう。だけどこいつは魔者ですーとか言っても同じようにざわめきが起きそうだ。

「陛下！一体どういうことですか！？」

「この者が先々代王の庶子という証拠はどこにあるというのです！」

おーおー、まるで記者会見のようだね。総理や芸能人はいつもこんな面倒な人達に付き合ってるのか。大変だな。

その時、騒音の中に木製ハンマーの音が部屋に鳴り響いた。

「静粛に」

ザビーの冷淡な一声で部屋の中は一気に静まり返った。

「これより陛下が御説明されますのでご静聴下さい」

いつもの用に淡々とした話し方も、時と場合によっては威圧的に聞こえる。だけどオズはそれをまるで気にしていないようなので、私も気にしないことにした。

「まず、証拠の一つはこの髪だ。この様に美しい赤髪は王族の中でも極稀だ。先々代のように。奴は生命力に溢れた美しい髪をしていた」

オズは私の髪を手にとるとそれを弄んだ。遊ぶなよ。私の髪は生命力が溢れる所かキューティクルが死滅しかかっているぞ。トリートメントやケアを怠っているから傷毛も出てきたし……。ぐすん。そんな事は気にせずオズは私の髪をかき揚げ耳に掛けた。

「次にこのピアス。ピアスは本来力を抑制したり付加させる物だ。このピアスからは神聖な力を感じる。アンシエルにも確認してもらったから間違いない。そうだろう？ アンシエル」

「はい、陛下」

さっきの赤髪の美人さんが穏やかな顔で答えた。意外に低く落ち着いた声が素敵だった。

「そんな力を持つ者が邪悪な者とは思えぬ」

神聖な力っていうとレイのおまじないか。やっぱりレイは神聖な

存在だったんだね。あんなに綺麗で可愛くて癒やし効果満点な子が邪悪な存在な訳ないじゃないか！親バカだと思われるかもしれないけど、親バカじゃないって。会えば分かる。うん。

「それにこの様に美しく精巧な装飾を施したピアスなど、庶民どころか貴族でもなかなか手に入れることは出来まい。おそらく金品に目の無い奴が贈ったのであろう」

そう言つてオズは私の左耳にぶらざかるピアスに触れた。

私の耳にはピアスが5つあり、そのうちの4つは丸型のスワロスキーのピアス。そして左耳の1つだけぶら下げるタイプのもの。それはドロップ型のスワロスキーを中心に銀の装飾が周りを囲み、耳朶の留め具は百合マークになっている。

そしてこれもプレゼントされたもの。大切なものだからあんまり触つてほしくないんだよね。失礼だけど汚れちゃうような気がする。

「それからサーイエの話す断片的記憶ではこの容姿は生まれつきで黒の髪が生えてきたのはイセアで暮らし始めてからだ。だとすると親も赤髪を持つていると考えるのが普通だろう。容姿、強力な魔力、美しい装飾品。これは王族の血を受け継いでいるとしか思えぬ」

おお、ここでうつかり漏らしてしまった情報を消化したよ！ナイスだオズ！！

「先々代の王は強力な魔力を用いて国の拡大させた偉大なる王だ。だが成し遂げるためなら手段を選ばず、女遊びや金使いも荒い本能に忠実な愚王でもあった。そんな王に庶子の一人や二人居てもおかしくなかるう？」

「・・・・・・・・」

軽く言っているけど、オズの顔には冷たい嘲笑が浮かんでいて少し怖かった。

「よって余はサーイエをオーデイスラルドの血を受け継ぐ者だと考えている。誰か意見はあるか？」

部屋の中は静まり返り、少し空気が重かった。その中には俯いている人もいる。そんなにスゴい王様だったんだね…。

沈黙を肯定と取ると、オズはザビーに視線を向け説明を促した。

「この者は先々代の庶子となりますが、王族とは見なさず身分は庶民とし、一切の政治的権力を持たないものとします。そして騎士となり粉微塵になろうとも一生涯国に尽くすことを誓いました。何か不明な点、意見のある方はおりますか？」

私が意見したいんですけど。そんな事言った覚えはないよ！

内心ザビーに対して悪態を吐いていると、えんじ色の髪のおじさんが手を上げた。

「何だ？」

「いくら強力な力を持っていると言っても、彼女は女性です。女性が騎士になるのは如何なものかと思えます」

おっさんは意見は一見私の心配をしているように思えるが、どこか差別的な感じがした。

「本人が望んだことだ。それに騎士の仕事でも安全な補佐をさせるつもりだ。それなら問題なかるう」

「では生活の方は如何なさるおつもりですか？規約の通りだと一般

の騎士は宿舎で生活することになりますが、まさか御一緒に生活させるつもりでは有りますまい」

え、そうなの？男性宿舎に女一人…そんな定番の逆ハ―とか断固拒否！イケパラになんて行きたくない！瑞●がどんなに大変な生活をしていたことか いや、あれは佐●の方が大変だったか。同じ部屋で好きな子が寝泊まりなんて男子校生にはきつくない？ここでは騎士宿舎だけど、いくら騎士とはいえ油断したらガチで襲われそうじゃね？

私、貞操の危機に瀕したら相手を殺りかねないと思う。だけどあの部屋からは出て行きたいし…。魔法で念じれば何とかならないかなあ？

「その事については騎士団総団長であるベルククラスと話し合い、ベルククラスがサーイエを引き取ることになった」

引き取る？騎士総団長が？私を？…どどどどちら様ですかああ！！？

騎士団総団長を探そうと部屋を見渡したらすぐに見つかった。だってでかいもん。

ていうか…ものすごくストライクなおじさんなんだけど！！外見年齢40代後半、隣に座ってるおじさんより二周りは大きい筋肉質な体型で緑色の固そうな髪を後ろへ流している。左頬には一文字の傷跡が耳まで達し、厳つい顔が騎士団総団長の厳格さを醸し出している。そしてかなり渋くて格好いい。

私、老けメンキヤラ大好きなんだよ！おじさんっていいよね！あんまり余計なことは語らない渋いキヤラが一番好きなんだ！時々見

せる優しい顔にめっちゃキュンときちゃうんだよー！

FF10のアー・ンさんとかいいよね。昔は熱いやつだったって設定も最高っす！こんな人が私を引き取ってくれるなんて超ラッキー！！

狂喜乱舞しているとベルクラーズ様と目があつた。クールで鋭い視線がたまりません！

「騎士団はベルクラーズの管轄であり、何か問題があっても対処できるであろう。サーイエを引き取る事には本人も快諾した」

快諾だなんて……！私は顔がにやけそうになるのを必死で我慢した。本当に有り難う御座います！問題なんて起こしません！いい子にします！

「他には何か？」

「いえ 結構です」

えんじ色の髪のおっさんは渋々と言った感じで着席した。私とベルクラーズ様の仲は引き裂かせないんだからね！

「他に御質問が無いようなのでこれで会議を終了させていただきます。ベルクラーズ様には詳しい御説明をさせていただきますのでそのままお残り下さい。解散」

会議が終わり、大臣・貴族連中は部屋から出て行くと部屋には私、オズ、ザビー、ベルクラーズ様、それと何故かマーリンドと隣にいた美形さんがいた。

「あの、陛下」

「何だ？」「どうしてマーリンド様がここにいらっしゃるのですか？」

「マーリンドでいいぞ。今更言われると気持ち悪い」

「うん、私も言ってる気持ち悪い」

「おい」

「ふふふ」

あ、つい本音が零れて美人さんに笑われてしまった。

「この者達は余の兄弟だから余には教える義務がある」

「兄弟…」

「サーイエにはまだ紹介していなかったが、これは第二王子のアンシエルだ。我が国の教皇を務めている」

「きょうこう…教皇！？」

この人が教皇って…。普通教皇ってもっとじいさんがやるもんじやないの？地道にお務めを果たして献金して位を上げて、選挙に勝った人がなれるようなイメージなんだけど。やっぱり王家の血筋か？それともじゃんけん大会でもやってるの？

「初めまして」

うう 眩しい！聖人だ！聖人がいるよ！！まさに雰囲気がそんな感じた。

アンシエル様は失礼にもまじまじと見ている私に対して、優しくで穏やかな笑みを浮かべて手を差し出してくれた。

こんな人に触っていいのかと迷っていると、向こうから握手してくれた。うわぁゝ何か申し訳ない。罪悪感で手汗出そう。手汗付いたらごめんなさい。そんな私を見てアンシエル様はくすりと笑った。

「2人の言っていた通り、可愛らしい方ですね」

「え？そんなことはありませんよ」

「謙遜なさらないで下さい。それにとっても清らかなメージの持ち主です。素晴らしい」

「…あ、有り難う御座います」

可愛いだの清らかだの…ごめんなさい、完全不純物なんですけど！性格悪いし肉もジャンクフードも大好きだし、処女でもないよ！異世界トリップってそういうのが重要なんじゃないの？よくあるじゃないか『乙女の純潔を捧げよ』、みたいな。私は乙女っていうよりヲトメです。日々妄想に取り憑かれています。

うーん…失礼だけどアンシエルさんはちょっと苦手かな。それは悪い意味じゃなくて、褒められなれないからこういう風に純粹に褒められると困るんだよ。アドニス団長のとはかなり違う。あの人は褒めてるんだろうけど胡散臭いから嫌だ。

「それから先程も申ししたが、これがサーイエを引き取ってくれる騎士団総団長のベルクラス・クロエ・ダリウスだ」

待ってました！目の前に立つベルクラス様はまるで壁のようだった。もしかしたら私の倍はあるかもしれない。上を見上げると無表情で私を見下ろしていた。ちょっと怖いけど…かつこいい！

「先々代の頃より国に務めておるのでな、是非にとお前を引き取ることを申し出てくれた」

「あ、有り難う御座います！」

「いえ、オーディスラルドに仕える者としてアルフェルド様のお孫様を預かることが出来、光栄に御座います」

「そ、そんなつ！こちらの方こそ総団長様に引き取って至極光栄の至りであの、その…」

「お前少し落ち着けよ」

「うえゝ」

落ち着けるかああ！！声まで超イメージ通り いやそれ以上に格好いいよ！！ああもう感動…。

「至らぬ点も御座いましょうが、どうぞ宜しくお願い致します」
「よ、宜しく願います！」

そう言つてベルクラス様は手を差し出してくれた。え？これ握手してもいいの？いいの？

テンパった私は、何故か確認するようにオズとベルクラス様の手を交互に見た。オズは苦笑しながら頷いた。

あーこんなにドキドキするの久しぶりだー！周りにイケメンがいてもときめかない私がこんなになるなんて…！！

恥ずかしさで俯きながら手を握り恐る恐る顔を上げると、ベルクラス様はほんの少し微笑んで優しく握り返してくれた。いやー！もーかつこいいい！！

私は完璧顔がにやけた。興奮し過ぎと思われるかもしれないけど、私にとつては大ファンのハリウッドスターが私のために微笑んで握手してくれたのと同じ価値があるんだ！！

「おい、何にやけてんだよ」

「い、いいじゃん別に」

「不愉快だ。やめよ」

「…すみません」

「ふふふ」

何だよみんなして！そんなに不機嫌にならなくてもいいのに。どうせ私のにやけ顔なんて気持ち悪いですよー。

「言っておくけどベルクラーズは結婚してるしガキもいるからな」
「へえ、そうなんだ」

それは別に問題ない。私は好きな芸能人とかに恋人がいても気にしない派だからね。いいなあ奥さん。こんなかつこいい旦那さんなんて最高じゃないか。一步後ろから着いてくる昔の日本人タイプの奥さん希望。そんで子どもは普段父親とは喋らないけど密かに尊敬してるみたいな感じで。将来はお父さんに似ていい男になるんだろうなあー。うへへ妄想が止まんねえや。

「ちなみにガキはヒョククトな」

「へえ - えええ？！嘘お！？」

「いやほんと」

私は絶句した。嘘だよ絶対！こんな大きくて渋くてかつこいいお父さんから、あんなに可愛くて女の子みたいな子が生まれる訳がない！！遺伝子組み換えでもしてんの！？それとも変態動物ですか？！そんな私の反応を見てベルクラーズ様は少し苦笑した。

あ、もういいっす。この顔見れたらどんな子でも関係ないっす。たとえバナ・マンの・村が息子でも何にも言いません。

「おい、またにやけてんぞ」

「ふへへ」

「：サーイエ」

「えへへ、すみません」

私の浮かれっぷりに2人は呆れ、1人は笑い、3人は見守っている。だがザビーはそんな事気にもせずいつも通り淡々と話した。

「これからお前はダリウス邸で暮らすことになるが、本邸で生活するのは些か問題が生じる。それで敷地内に別邸があるのでそこで暮らせ」

「はい」

「後でヒヨックト副隊長が迎えに来るので部屋で待機している」

「分かりました」

「では解散」

会議が終わり、私はガイシス団長とロイス副団長と一緒に部屋へ向かった。

「無事に終わって良かったね」

「はい。本当に突っ立っているだけだったので全然大丈夫です。それにしても……ベルクラス様カッコいいですねー！」

私にとっては会議なんかよりベルクラス様に会えた事の方が大きな収穫だった。トリップして良かった！って思えるのはこういう時だね。

「サーイエがこんなに興奮するの初めて見たよ」

「そりゃあんなに素敵な人を見付けたら興奮しますよ！」

「クス 今まで素敵な人に出会ってなかったみたいない方だね」

「あ、皆さんも十分に素敵ですよ？けどこう 理想の人の素敵さとはまた違うじゃないですか」

「確かにそうだな」

「じゃあサーイエはベルクラーズ総団長みたいな人が理想なの？」

「はい。外見もストラ 好みにぴったりなんですけど、硬派で余計なことを喋らずに行動で示すみたいな感じの所が好きです」

古き良き日本人男性ですな。昨今では草食系のヘタレばかりで今や絶滅危惧種ですよ。実に嘆かわしい。あ、だけど恋愛に関して はちょっとヘタレだと萌えるかも。

「じゃあザビロニス宰相とかはどう？あの方も十分にストイックで 余計な事を口にしないと思うけど」

「ザビー ロニス宰相は無口で冷徹過ぎます。余りにも喋らな過ぎるのは駄目です」

しかも鼻で笑ったり人を小馬鹿にしたり典型的なニヒルキャラじゃねえか！それで途中で過去の悲しいエピソードが出てきたりしてファンのハートをキャッチするんだろ！別にそういうキャラは嫌いじゃないけど、自分が馬鹿にされるのは嫌なんだよね。あと私はどちらかと言えばカリカリよりマツチョ派だ。ザビーはそんなにカリカリとは言わないけど、やっぱりベルクラーズ様に比べれば貧弱貧弱うっ！！

「なかなかサーイエも難しいね」

「そうですね。だけど理想の人なんて滅多にいませんよ。だからベルクラーズ様の存在は奇跡です」

「ハハハ！奇跡か！」

「はい、奇跡です」

「ふふ、だからあんなにも興奮してたんだね」

「はい。私の気持ち分かってもらえましたか？」

「うん。十分に分かったよ」

分かってもらえて何よりだわ。

「ベルククラス様ってどんな方なんですか？」

「今は赤、緑、黒、白の全騎士団を纏める騎士団総団長を勤めているが、嘗てはオラリオスの虎と呼ばれる程の屈強な黒騎士だったんだ」

「虎……ですか？」

「ああ。強さを象徴する伝説の生き物だよ」

虎かぁ。虎ってあの虎？四神にも白虎がいるみたいにそれと同じ様なものかな？

「様々な武勇伝があるが、一番有名な話が500年程前のブルジアーノとの戦いだ。オラリオス軍は一時壊滅状態に陥ったんだが、その時にベルククラス総団長が一人で敵陣へ乗り込み形成を逆転させたんだ。その時に打ち取った敵の数は600を越えると言われている」

すげええ！！それもうB・SARAだよ！！

「その後も様々な武勲を戴き、黒騎士としての現役を退くと騎士団総団長という今の地位を賜ったんだ」

「すごいです！英雄なんですね！」

「ああ。あの方は俺達オラリオスの騎士にとって誇りであり憧れの存在さ」

ガイシス団長の誇らし気な笑顔が本当にそう思っているのだとい

うことが伺えた。立場も人柄も申し分ない設定だね！
惚れ直したよ！

「きっとヒヨからしても誇らしいお父さんですよ」

「ああ、そうだろうな」

「噂をすれば、だよ」

「あ」

気が付けば私達はもう部屋まで着ていた。そこにはもう既にヒヨが着ていて部屋の外で待っていた。

「ヒヨただいまー！」

「皆様お疲れ様です。会議の方は如何でしたか？」

「ああ、無事に予定通り終わった」

「そうですか。あの サーイエはご機嫌のようですが何かあったんですか？」

「ベルククラス様の事を話してたんだよ。素敵なお父さんだねー！」

「え？ええ、そうですね」

「もう格好良すぎてヤバいわぁー！」

ヒヨは私の浮かれっぷりにかなり戸惑っていた。その様子にガイシス団長達は苦笑した。

「ただのファンだから問題ないよ」

「そうですか…」

「じゃあサーイエの事を頼んだよ」

「はい」

「じゃあサーイエ、俺達仕事に戻るからいいこにするんだぞ」

「はい！」

「じゃあね」

ガイシス団長は私の頭を撫で、ロイス隊長はひらひらと手を振り爽やかに帰って行った。2人ともすっかり良いお兄ちゃんになるわ。良きことだ。

「さて、じゃあ荷物取ってくるからちよつと待ってて」
「はい」

私はヒヨに断ると寝室へ向かった。朝にテーブルの上に置いておいた白い布に巻かれた私の荷物。この白い布はレイが私にくれた布だ。私の荷物はその布に巻いておけるくらい少ない。トリップした時に着ていた服にミユール、バッグ。そしてバッグの中には財布、ケータイ、MP3、化粧ポーチ、ハンカチ、ティッシュ。

本当に遊びに出掛けるときに必要な物しかない。今の私に残されたのはこの両手、いや片手で足りる物しか残ってないのだ。それを抱きしめると虚しさに浸った。

「おまたせ」
「いえ大丈夫です。ではダリウス邸にご案内します」
「うん、お願いします」

私達は城を出て馬車のようなものになり、ダリウス邸に着くまで私はベルクラーズ様の素晴らしさを熱く語った。ヒヨは酔っ払いの相手をするように相槌を打っていたようだがそこは気にしない。

「ねえねえ、ヒヨの家族ってどんな感じなの？」

「どんなってどういう事ですか？」

「何人家族だとか雰囲気だよ」

「ああ、一応今の暮らしは父上、僕、妹と使用人の計7人で暮らしています」

「あれ？お母さんは？」

「42年前に亡くなりました」

「…ごめん」

「気にしないでいいですよ」

ヒヨは気にしていないようだけど、何となく居たたまれなかった。

「あ、妹がいるって言ってたよね？やっぱりヒヨに似て可愛いのが可愛いよね？」

「…僕に似ているからとかは別として、可愛いとは思いますが」

「だよーね！やっぱり可愛いよね！早くみたいなー女版のヒヨ」

「……」

「ん？心配しなくても大丈夫よ。例えば妹が可愛くてもヒヨの事を蔑ろにしないから」

「そういう意味じゃありません！」

「はいはい」

私の脳内は加工されたベルクラーズ様と女装したヒヨで一杯だった。渋いおじさんと萌え萌え兄妹に囲まれた生活なんて幸せ過ぎる！！

私の態度にむくれつつも、ヒヨは諦めて溜め息を吐いた。

語り始めて約10分、私達はダリウス邸に到着した。

「おお…おつきー」

でかいなあー。これ富豪の家だよ。マンション位はあるもん。もちろん縦長じゃなくて横長ね。クリーム色の上品な屋敷は庭は綺麗に剪定されているのでより栄えた。本当にお手伝いさん5人で生活大丈夫なのかな？もつと居てもおかしくないような気もするけど。玄関に着くとヒヨは丁寧なドアを開けてくれた。

「どうぞ」

「お邪魔します」

何となくでかい家に入るのって恐縮しちゃう。それが庶民の性さ。中にはいると落ち着いたエメラルドグリーン色のバルコニーが広がっていた。正面は二手に分かれた階段があり、高そうに花瓶と壁には凛々しいお祖父さんの肖像画が描かれていた。カッコいいー。ベルククラス様によく似てるわあ。

左右に通路と斜めドアがある。作りとして大富豪の別荘みたいだけど、やたら金ピカしたり大量のモニュメントも無く、上品に落ち着いた雰囲気にとまっている。うん、いいね。

「お帰りなさいませヒヨックート様」

声のした方を振り向くと、5人の使用人さんと思われる人達がいる。4人は中高年だが一人だけ金髪の美少女…女版ヒヨがいた。

かーわーいーいー！！！！ドレス着たヒヨが居るよ！ヒヨに比べて

少し垂れ目で童顔。金の髪の毛もふわふわしていて触り心地良さそう！ほんっとお人形さんみたいに可愛い！服はかなり質素な服だけど…やっぱり可愛い子が着れば何でも可愛くなるよね！

私は他の使用人さんには目もくれず、女版ヒヨをガン見していた。

「ただいま。今日はみんな揃ってるんだね」

「はい、今日から新しくこの屋敷に住まう方がいらつしやるので、是非ともお迎えせねばと思ひましてな」

「彼女がこれからうちの別邸で暮らすことになったサーイエ・アマーノウだよ」

「存じております。初めましてアマーノウ様。使用人頭のバツシュと申します。私は本邸に居りますが、これから生活のお手伝いをさせていただきますので、何かが御座いましたら何なりとお申し付け下さい」

きれいな白髪が印象的なバツシュさんはやんわりと微笑んで挨拶をしてくれた、けど何を考えてるのか分からない様な目をしている。多分私を警戒しているんだろう。

「こちらにいる使用人は右からカケール、ハンマルア、ターシャ、そしてラヴィーナです」

順番に薄い茶色のおじさん、緑がかった髪ของ身長の大きいおじさん、アツシユ系の緑掛かった髪のおばさんがそれぞれお辞儀をしてくれたが、やはりどこか態度がぎこちない。

仕方がないよね。だけど弁解する気もないし、自然と理解してくれるまで待とう。

…あれ？いま使用人って言ったよね？ラヴィーナちゃんも使用人なの？

「御迷惑をお掛けすると思いますが、どうぞよろしくお願いします」
「別邸での家事やお世話はラヴィーナがする事になっておりますので、何かあったら彼女にお申し付けください」

「よ、よろしく願います…」

小さく鈴の鳴るような声でラヴィーナちゃんは答えた。少し緊張して私を窺う仕草がまた萌える…。周りは美形の男ばかりで正直疲れてたから余計に癒されるわ…。多分ここ最近で一番いい笑顔をしたと思う。可愛い子の前じゃにやけてもしようがないって。

あ、やばいビビらせたかな？ちよつと驚かれてるというか固まった。私のにやけ顔は気持ち悪いんだよね。テンション上がりすぎてすっかり忘れてた。せつかくのかわいこちゃんに会えたけど、仲良くなるのは難しいか…。

「すみません。ラヴィーナは人一倍恥ずかしがり屋なんです」

「あ、そうなんだ」

「別邸へ案内します。ラヴィーナ、行くよ」

「は、はい、お兄さま」

キター！！お兄さまキター！！！！これ完っ璧。最強妹属性メイドだよ！

二次元に行きたいと常々考えてたけど、こんな形で萌えっ子に出会えるとは思わなかった。変態臭いけどペロペロしちゃうよ！チュッチュしちゃうよ！

異世界ありがとう！そしてありがとう！

本邸から歩いて約5分、木の茂る場所に別邸があった。別邸はま

るで1/2スケールの本邸だった。外観も室内もデザインはほぼ同じ。違う点は部屋数が少ない事と殆どドアが無い事、そしてリビングからすぐに庭に出られることかな。あと少し離れたところに湖があつて景色がいい。まるで療養地みたいだ。

私は一通り家の中を案内してもらつた。一階にはリビング、キッチン、お風呂など生活に必要な物があり、2階にはベッドルームや書室などがあつた。私の部屋は一番奥の2階では一番広い部屋だった。室内は薄いピンクの壁で天蓋付きのクイーンサイズのベッド、大きいクローゼット、真っ白でピカピカの洗面所があり、まるで高級ホテルのようだった。

「こんな素敵な部屋に私なんかが住んでもいいの？」

「ええ、サーイエのために用意したので是非使つて下さい」

「ありがとうございます」

につこりと笑うヒヨはやっぱり可愛いな。きつと言つたら怒るだらうけどね。

広い庭には綺麗な花が沢山咲いており、手入れが行き届いている事がよく分かる。

「もしかして庭の手入れもラヴィーナさんがやるんですか」

「は、はい」

「家事も庭仕事もやつてたら大変じゃありませんか？」

「いえ、あの、大丈夫です」

「ラヴィーナは家事や花の世話をするのが好きなんです。ね？ラヴィーナ」

ラヴィーナちゃんは黙つてコクつと頷いた。ああ、かんわい。こつというのは普通の人がやると根暗だと思われるけど、可愛いがやるとほんわかする。今まで萌えに飢えてた分、私のデレデレ度はハン

パない。

「だけど生活に馴れて余裕が出来たら私もお手伝いします」

そう言つとラヴィーナちゃんは丸くした。

「手伝う…?」

「はい、全部ラヴィーナさんに任せていたら悪いですし、出来るだけ自分で出来ることは自分でやりたいんです」

笑顔で言つと、ラヴィーナちゃんは俯いてしまった。え?何で!? やっぱりキモかった!?

「あの、もし手伝われるのが嫌ならいいんです!ただ迷惑掛けてるんじゃないかなあって思いました…」

今度は顔を覆い隠したあ!!!えー!?何でー!!!?もう話しかけんなどか見るのもおぞましいとかそういうレベルですか?!だって泣くよ?!

「ラヴィーナ?どうしたの?」

「……す」

「ん?」

「ラヴィーナ、すごく恥ずかしいです」

「え?」

何が?

「ラヴィーナは、サーイエ様の事をもっと怖い方なのだと思つていたんです…」

「それは当然の事だと思います。得体の知れない存在ですし」

「はい。それに先々代王のアルフェルド様のお孫様なのに黒髪を持ち、女性ながらも黒鷲騎士団に入団される方なので、きっと岩のようにつけて体も大きく、刃のように鋭い目つきをした方を想像していたのです」

「ラヴィーナ…」

怖えよ。それもう女を通り越してモンスターだよ。ラヴィーナちゃんも想像力豊かだよ。まさかそこまで思われてとは思ってなかったよ。そして何気に何でも素直に言う子だね。まあその方が気が楽で良いけど。

「だけど実際は華奢でとても可愛らしい方でびっくりしてしまいました」更に私にも気を使って下さる優しいお方だと分かり、とても申し訳なくて恥ずかしくなってしまうたんです…」

「そう ですか」

可愛いって ラヴィーナちゃんの方がよほど可愛いんですけど。

…まあ私も化け物に比べたら可愛く見えるか。

ヒヨは申し訳無さそうに私に謝った。

「サーイエ、ごめんね」

「ううん、大丈夫だよ。ラヴィーナさんも気にしないで下さい」

「うう ありがとうございます」

そう言いながら情けない顔をするラヴィーナちゃんはすごく可愛かった。お姉さん何でも許すよ！

「あの、サーイエ様は私に気を使わないで下さい」

「気を使わないでと言われても…」

ラヴィーナさんも使われてるし…」

「ラヴィーナは使用人だからいいのです！」

「だけど。あ、友達ではいけませんか？」

「友達ですか？」

「はい。私、友達がいないので…」

「サーイエ様…」

ここにはもう友達はいない。アンヌ達とは友達になれたけど…会
い辛い。自分から会いに行く事はないだろう。だから友達欲しい
と思つてた。それにラヴィーナちゃんと仲が良い方がもっと気軽に
生活出来るしね。

「分かりましたサーイエ様。お友達になりましょう。ラヴィーナの
事は気軽にラヴィーナとお呼び下さい」

「じゃあ私もサーイエで」

「はい！」

「友達が出来て良かったですね」

「うん！」

「不束な妹ですがよろしくお願いします」

「いやいや、こちらこそよろしくお願いします」

「はい！」

うわぁーなんだこの可愛さ！この展開！女の子の青春友情物語だ
よね。なか●しとかでありそう。私はりぼ●派だけど。

「2人が仲良くなったし、僕はそろそろ仕事に戻ります。後の事は
ラヴィーナに任せるので、分からないことは彼女に聞いて下さい」

「分かった。わざわざありがとね、ヒヨ」

「どう致しまして」

「ではお氣をつけていつてらっしゃいませ」

「うん、またね」

そう言ってヒヨはラヴィーナの頬にキスをして部屋を出て行った。

…ええええ？！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6312m/>

いつも見ていた世界

2011年12月21日19時43分発行